
水沢夢
[イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。8
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。 8

水沢　夢

イラスト　春日　歩


水沢夢
[イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。8

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


津辺愛香
観束総二
トゥアール
イースナ
神堂慧理那
桜川 尊



目次

水沢夢
［イラスト］春日歩

俺、ツインテールになります。8

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

トゥアール
異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、ネタにされると激しく怒る。

観束未春（みつかみはる）
総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

イースナ
善沙闇子の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

結翼唯乃（いわばねゆの）
フェニックスギルディが
ポニーテールの少女となった姿。
圧倒的な戦闘力を誇る。

桜川 尊（さくらがわ みこと）
慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

7巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

並み居る侵攻部隊を倒してきたツインテイルズは、アルティメギル四頂軍の一角・美の四心と決戦を繰り広げる。自ら殻を破ったテイルイエローは最強形態・アブソリュートチェインへと覚醒。ついに美の四心を撃破するのだった。

エレメリアン組織図

? アルティメギル首領
全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。



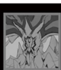
首領直属戦士 ダークグラスパー
四頂軍や各侵攻軍の統率者。後に離反し、テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

一の部隊 | ? | 詳細不明

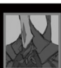
死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）
隊長：ティラノギルディ
右牙（ライトファング）の副将：プテラギルディ
左牙（レフトファング）の副将：トリケラトップギルディ
美の四心が倒されたことでついに侵攻を開始する。

貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ
総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。アルティメギル組織内の爪弾き者の集まりだが、結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ
ダークグラスパーの着任と共に総二たちの世界を侵攻する残存部隊に合流した首領直属軍の一角。長きにわたりツインテイルズと激闘を繰り広げたが、総力戦の末に完全壊滅した。

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊
隊長：ドラグギルディ
隊員：スワンギルディなど
総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。



リヴァイアギルディ部隊
隊長：リヴァイアギルディ



クラーケギルディ部隊
隊長：クラーケギルディ

・タイガギルディ部隊 隊長：タイガギルディ
ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者 フェニックスギルディ
ペガサスギルディ
組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。

プロローグ　ツインテールとあたし。

　あたしの幼おさな馴な染じみ、観み束つか総そう二じは、自他共に認めるツインテール馬ば鹿かだ。

　だから、あたし以外にいるはずない、って思ってたのよ。
　そりゃ……ほら、結構かっこいいし、あいつのこと好きになる女の子が他にいない、とまでは言わないわよ。事実、何度か聞かれたしね。「つき合ってるの？」とか、「他に彼女いるの？」って。
　ただ、あいつがどういう人間か知った後も、心変わりせずに想い続けていられる物好きなんて……あたし以外にいるはずないじゃない。
　四六時中、寝ても覚めても、ツインテールのことしか頭にないやつなのよ？
　ふとした時の横顔が、あ、すごくいいな……って思っても、後からその時何考えてたか聞いたら、案の定ツインテールのことだし。そーいうやつなの。
　最初は誰だれでも、冗談半分だって思うんだよね。そーじのツインテール好きは。いくら何でも、そこまで一途に何かを好きになるなんて、ありえないから。でも、残念ながらホンモノ。
　あいつは、掛け値無しのツインテール馬鹿。この世界のツインテール好き代表なのよ。
　ほら、あたし以外にいるはずないじゃない。あいつの側そばにずっといられる女なんて。
　あいつの側で……ずっと、あいつが望むツインテールでいられる女なんてさ。

　意外と大変なのよ？　ツインテールを維持するのは。

精神的にも……肉体的にもね。

気分転換にショートカットにしたりなんてもっての外ほか。ケアに時間はかかるし、気も使うしお金も使う。髪は自分で切れるようになったから、美容院代は浮かせられるんだけどね。

子供の頃ころから、ファッション誌の髪のケアについて書かれたページだけスクラップし続けて、もう電話帳何冊分の厚さになっただろう。

多分、そのスクラップの中だけで何か所も矛む盾じゆんが出ているだろうな。意外と多いのよ、シャンプー一つ取っても、この成分は髪に悪いです、って言っておいて……数か月後には、実は悪いと言った方が間違いでした、って手の平を返されたり。

その度に、自分の中でヘアケアの最適解を更新してきた。

ブックマークした情報ページも、録画した美容番組も、全部、髪について書かれたり取り上げられたりしているものだけ。

こと、髪の毛のケアに関してなら、素しろ人うとの割りにはちょっとしたものだって自負してるわ。

こういう努力が肉体面の負担だとすれば──より深刻なのは、精神の方。

たまに、寝る時目を閉じると、不安になる。

あたしはこの先、いつまでツインテールでいられるのかなって。

そーじと、ずっと一緒にいたい。

そーじに、ずっとあたしを見ていて欲しい。

でも、あいつは……あたしが大人になって、ツインテールをやめちゃったら、もうあたしを見てくれなくなるんじゃないかな。

あいつが見てるのは、あたしのツインテールだけなんじゃないかな、って。

ツインテールは、子供っぽい髪型──よくて中学生までかなって、自分では思ってた。

さっき言ったファッション誌、ツインテールの特集なんてあったと思う？　需要がないのよ。

成長するにつれて、ツインテールの準備と維持には慣れた。要は、お化粧みたいなもの。

けれど、慣れれば慣れるほど、当たり前になればなるほど、その分不安も増していった。

あたしは、いつまでこうして……〝そーじの望むツインテール〟でいられるだろう。

〝そーじの求めるツインテール〟でいられるだろう……って。

その不安が頂点に達したのは、この春━陽よう月げつ学園高等部に進級する前日の夜だった。

壁に掛けられた真新しい制服を見たまま、一睡もできなかったのを覚えている。

自分でリミットだと思っていた中学の間に、幼おさな馴な染じみから踏み出せなかった。

そーじに、女として見てもらうことができなかった。

ツインテール以外のあたしを、見てもらえなかった……。

友達は告こくればいいとか簡単に言うけど、普通の男子オトコじゃないのよ⁉

あたしだけがあいつを異性オトコと意識してるこの状況で、どうすれば前に進めるのよ……。

いっそ、この想いが形になってくれればって思ってた。

あたしがこのツインテールにどんな想いを、願いを込めているか。

あの朴ぼく念ねん仁じんによおく見えるように、形を持って目の前に現れればいいって思った。

そんな風に、目を開いて夢を見ながら迎えた朝が……一日が、運命の始まりだった。

　たった一日で、世界の常識が変わる。流行も、定説も、歴史さえもが変貌する。
　ツインテールが、あたしの唯一の取り柄が、あいつ以外誰だれも本気で見向きもしないはずの子供っぽい髪型が、世界に浸透し始めたのよ。これが夢でなくて、何なの？
　まるで天使みたいに白衣を翻ひるがえして、厄やつ介かいごとを運んできたバカ女。
　あたしたちの生活を一変させたのは、紛まぎれもなくあいつだ。

　でも、不思議なことに、不安で眠れない日は、その日からもう一日もなかったんだよね……。
　あたしの悪友──トゥアールがやってきてからは。

◇

「人の部屋に勝手に入ってくんなって言ってんでしょうがあああああああああああ!!」
「ひいいいいいい揺レ────ルッッ!!」
　いつの間にか勝手にあたしの部屋に忍び込んでいたトゥアールの頭を掌しよう底ていで揺らす。
　そうするとこれ見よがしにおっぱいまで揺らすのがムカつくのよね……!!

　春、こいつに出会って、今、季節は秋になろうとしている。
　不安で眠れない日は無くなったけど、別の意味で寝不足にはなったわ。

「普段野生動物みたいに気配に敏感な愛あい香かさんが、ソロプレイに夢中で気づかないのが悪いんじゃないですか!!」
　常人なら昏こん倒とうして当分目を覚まさないほどのダメージを受けても、トゥアールはすぐに復活してくる。そして、めげずにあたしをからかったり、そーじにやらしいことをしようとする。
　この恐ろしいまでのアクティブさとポジティブさは、本音を言うと尊敬にも値すると思う。
「ドアをノックしろって言ってんの！　いや、その前に玄関でインターホン鳴らしなさいよ！　あとそんなことしてないっつーの!!」
　トゥアールへのツッコミは、ポイントが多すぎて体力を使う。
「えー？　またまたー、今日も今日とて下校中総そう二じ様にツインテール誉ほめられて明らかにメスのツラになってたじゃないですかー」
「なっ……!!」
「なーんか昔、『何でそんなエロいことばっか考えてるの』とか私に言いましたけど、愛香さんも普通に年がら年中総二様にムラムラしてますよね～おっと！」
　二度目の掌底は躱かわされた。
　トゥアールのやつ、最近体術が飛躍的に向上してるわね……。あたしももっと鍛きたえないと。
　……あたしの武術、こいつへのツッコミのために何年もかけて磨いてきたのかと思うと、悲しくなるわよ。
　本当は、そーじを守るためにおじいちゃんから習ったのにさ。
　あんな世間知らずでお人好しの馬ば鹿か、あたしがいなきゃ何度騙だまされてたことか。
　あたしは、目の前でニコニコしているトゥアールをじっと見つめた。
　羨うらやましいくらい綺き麗れいだし、スタイルも抜群だし……おまけに頭脳明めい晰せきっ⁉　この通り、動ける理系だし……非の打ち所

がないじゃない！　痴ち女じよじゃなければ。
　ううん、普通の男だったら、そういうエッチなところもプラスになるんだろうし……。
　ツインテールだったら、か……。それだったら、そーじのやつ一発で参ってたかもね。
　もっとも、そーじにツインテールを与えたっていう点で、トゥアールは誰だれよりも強くそーじの心と結びついているのかもしれないけど……。
　あたしの視線の意味を勘違いしたのか、トゥアールが白衣の裾すそで口元を隠して笑った。
「あれ？　追加攻撃が来ませんね……まさか、そんなにいいところだったんですか？　ソロプレイ時の総そう二じ様のモノマネも、今日はかなり迫真でしたし……」
「違うって言ってんでしょ!!」
　トゥアールは白衣のポケットから、籠かごに入った緑色のでっぷりとしたオウムを取り出した。
「お楽しみを邪魔したお詫わびにこの、喘あえぎ声を覚えさせたオウムを『愛あい香かさんの部屋から持ってきた』と言って総二様にお渡しします」
　甲かん高だかい声で小刻みに鳴くオウム。少々フィルターをかける必要はあるけど、喘いでいるように聞こえなくもない。……でも。
「きっと総二様も、『そうか、愛香のやつ部屋でこんな風に喘いでるのか』と察して、まあ……三秒くらいは興味を向けてくださるでしょう」
「オウムが喘いだぐらいでそこまで察せる奴やつだったら、こんな苦労してないわよ!!」
　エロ本一冊も持ってないような男にこんな搦からめ手てが通じるわけないでしょ！

　…………あたしはそーじの部屋、家や捜さがしなんてしてないからね。
　なおもトゥアールはあたしを煽あおってきた。
「幼おさな馴な染じみキャラって何で、無防備な殿方が目の前にいるのにおめおめと何年も棒に振ってるんでしょうねえ……いや、愛香さんのことじゃないですよ？　世間一般論です」
「あたしが聞きたいわよ教えなさいよおおおおおおおおおおおおおお!!」
「あれっ何かツッコミが新感覚で殴なぐられても嬉うれしい私がいる!?」
　ホンット、その通りよ。うだうだ考えるのはめんどくさい！
　幼馴染なんて、さっさと卒業しなきゃ！
　あたし以外にいるはずはないって思ってた、そーじのことを本気で好きになる女……たった数か月で、頭が痛くなるぐらい増えたんだから。
　困ったことにこの不法侵入者も、そーじに自分の全てを捧げるくらい、本気……だしね。
「うおあだあああああああああああ骨があああああああああトゥアールちゃんの骨がボールジョイントぐらい自在な可動範囲になるうううううううううううう!!」

　ったく……。
　何だかんだで、この異世界からやってきたお馬ば鹿かも、そーじと同じくらい長い付き合いになりそうね……。

第一章　アンハッピーバースデーツインテール。

　知覚できる夢、と表現すればいいのか。すっかり慣れてしまった、何日かに一度招かれる薄暗く何もない空間を、俺は今日も揺蕩たゆたっていた。
　ちょっとした宇宙遊泳──その命綱を担になうのは、双子の姫・ロエルとリルナだ。
　異世界の双子姫と俺は、彼女たちの能力でこうして夢の中で逢うことができる。
　夢を介した通信も何度目かを数え、双方の世間話に花を咲かせる余裕が俺にも生まれた。
「そっかー、お兄ちゃんたち、もうすぐ体育祭なんだ！」
　桃色のドレスをまとった小さなお姫様……双子姫の姉・ロエルが、我がことのように喜んでくれた。祝福するように手を合わせ、軽く傾かしげた首の動きに合わせ揺れるサイドポニーは、天てん真しん爛らん漫まんな彼女をより色鮮やかに彩いろどっている。
　体育祭という言葉で通じるのは、国柄や文明の違いは多少あれ、平行世界たる異世界ならではだと思えた。
「いいなー、ロエルもお兄ちゃんと一緒にかけっこしたい！」
「そうだな、そのうちやってみようか」
　今日は特にロエルがご機嫌だと思ったが、それを聞くと意外な答えが返ってきた。
「最近ね、お兄ちゃんの世界と繋つながりやすくなってる気がするんだ。これなら、いつか夢の中じゃなくてもロエルたちが会いに行けるかもって思ったら、嬉うれしくて！」
　へえ、異世界同士が繋がりやすくなるなんてことがあるのか。あとで、トゥアールに聞いてみようかな。この夢通信での内容は、目覚めた

時かなりおぼろげになってしまうのだが……。
「うう、ううううううう……」
　ところで今日は、妹姫のリルナが個人的な事情で、ちょっと大変らしかった。
　先ほどから少し離れたところで、小さく呻うめいている。
　天あまの邪じや鬼くなリルナはロエルと会話している俺をずっと無視して、後から寂しくなって交ざってきたりするのだが、今日ずっと無言な理由は……必死にスカートを押さえる仕草と、涙目で真まっ赤かになった顔を見れば、だいたい察しはつく。
「な、なあロエル、今日はそろそろお開きにしないか？」
　リルナのためにも、この夢通信を早々に切り上げてもらうべきだと判断した。
「えー、ロエル、もっとお話ししたい！　あと、今日こそお兄ちゃんのを見るんだもん！」
　ロエルは朝まで粘れば俺の何かを見られると思っているふしがあるが、一体何なんだ……。
「ね、姉様……総そう二じの言う通りだよ、今日は……帰ろう……!!」
「大丈夫だよリルナちゃん、これは普通の夢と違うから、おもらししちゃっても現実に影響はないよ！　……多分」
　……たまに見せる、ロエルの小悪魔的な笑顔が覗のぞく。
「嫌だよおおおおおおおおおおおおおおおおお！　……ぁ、叫ぶと……!!」
　要するにリルナはトイレを我慢しているようなのだが、どうも姉の悪いた戯ずらが一枚噛かんでいるように思える。俺が女体化してしまった時に歓喜した、白衣の少女の面おも影かげが重なった。
「ごめんねリルナちゃん、いっぱいジュース飲ませて。最近リルナちゃんがおねしょしないから、騎士さんがしょんぼりしてるの見ちゃって」

「しょんぼりさせておけばいいだろう、どうしてボクがそんなの見せなくちゃ……!!」
　やや困った属性をお持ちな、お城の騎士のお姉さんを思い出した。
「お兄ちゃんは優しいから、リルナちゃんがここでおねしょしても気にしないよね？」
「俺は気にしないけど、リルナは気にするだろ……」
「何でだよう、キミも気にするだろ普通!!」
　リルナはまだ子供だからともかく、俺はこの年で同じ苦しみに耐えたから気持ちがわかる、とは言えない。
　その時、リルナの顔のすぐ横で強烈な発光が起こった。
「ひゃあっ!!」
　夢通信が終わりかけていて、空間が不安定になっているのかもしれない。
　思わず俺に抱きつくリルナ。涙目で俺を見上げてくる。
「ご、ごめん総そう二じ……ッ――――!!」
　リルナは俺にしがみつく腕に力を込め……たのは一瞬で、何かを諦あきらめるように、力が抜け落ちていった。
「…………………………………………………………………………………あ……」
　最後にビクリと震ふるえ、そして――

　リルナへの神の情けか、俺はそこで目を覚ました。
　一応太股を触ってみるが、もちろん最後に知覚してしまった温かさはそこにはない。あちらの世界に戻ったリルナも、夢の中の影響がなければいいのだが……能力について熟知しているロエルが確信犯的な目をしていたので、望み薄かも知れない。次に会った時、どうやってフォローをするか考えておくか……。

　目覚まし時計を確認すると朝六時。何とも中途半端な時間に目覚めてしまった。

「………………………………総二さん……別の女の子と遊ぶ夢、見てた、でしょ……」
「うおわあああああああああああああ!!」
　クローゼットの中から、黒髪の女の子が這はい出てきた。
　這い出るなんて表現を女の子に使うなど失礼かも知れないが、本当に這い出てくるのだ。
「……わ、私という恋人がいながら、不健康、です……。ちゃんとエロゲー、しないから……!!」
　そのまま、俺のベッドへと四つん這いでにじり寄ってくると、
「……メール……返事……こない……」
　ようやく人と心通わせ始めた宇宙人のようなカタコトで、俺の筆無精を糾きゅう弾だんするイースナ。
「えっ？　あ、ごめん、見てなかった……」
　枕元の携帯を見ると、確かにとてつもない数の未読メールが溜たまっていた。
「わ、私、たまに携帯の着信ランプが、点滅してる幻覚を、見ます……総そう二じさんの返事が来るのを、一晩中……」
「わかったよ、ちょっと待ってくれ！」
　眼め鏡がねの奥の瞳ひとみが禍まが々まがしく訴えてくるので、俺はメールを急いで作成した。
　…………何で、「お」の予測変換が「おもらし」になるんだ。トゥアルフォンだからだよな、標準搭載の辞書ソフトのお茶目だよな!?　俺の夢からサジェストされてないよな!?
　さすがに一通はメールを返信しなければ。何か返信の話題を探さない

と。例えばほら、俺の部屋の隅にいつの間にか犬小屋ができてる。これはそこそこトピックにはなるだろう。
「――――犬小屋？」
　ベッドの前で体育座りで返信を待つイースナの背後……俺の勉強机の真横に、人一人が入れるぐらいのサイズの犬小屋がいつの間にか搬入されていた。いつから俺の部屋は、犬小屋のショールームに……。
「おはようございますわ、観み束つか君！」
　冷や汗交じりに犬小屋を見ていると、中から制服姿の慧え理り那なが、わんと飛び出してきた。
「駄だ目めだもう突っ込みきれねえええええええええええええええええええ連続四人はきつい!!」
　夢通信からのクローゼット、犬小屋とコンボが繋つながりすぎて、朝早くから俺のＣＰＵ使用率は一〇〇％に達してしまった。
　俺のギブアップに呼こ応おうするかのように、勢いよく開いた窓から何かが飛び込んできた。
「そーじどうしたの、トゥアール!?　それともイースナ!?」
　朝六時のツインテールにいささかの眠気も見せず、愛あい香かは華麗にベッドに着地した。
　やっぱりイースナか、とターゲッティングは早かったものの、俺と同じで犬小屋にはド肝を抜かれたようだった。
「か、会長、何やってんの!?」
「未み春はるさんにお尋ねしたら、観束君のお部屋に作ってもいいということでしたので、作らせていただきましたの！」
　聡明な慧理那らしからぬ、答えになっていない答え。確かに俺は扶ふ養ようされている身だが、世帯主ってそこまで強権持ってるもんなのか、母さん……。
「犬小屋って何よ犬小屋って！　何これ、会長専用!?」

「もちろん、観み束つか君の部屋にお邪魔する時だけですわ。さあ、観束君」
　慧え理り那なは四つん這ばいのまま犬小屋から完全に這い出し──何でこの表現をやむを得ず使わなければいけない女の子ばかりなんだ──その体勢のまま、ツインテールを片房手の平の上に乗せて俺に差し出してきた。
「お手にとってくださいまし、観束君。そして、リビングまで引っ張っていってください！」
　確かに俺は無意識によくツインテールを摘つまんでしまうが、慧理那の希望はそれとは別だ。
「駄だ目めだ駄目だ！　ツインテールを引っ張るなんて絶対に駄目だ!!」
「それじゃあ観束君は、わたくしのツインテールを引っ張ってお散歩するのと、わたくしに首輪をつけてお散歩するの、どちらがいいというんですのっ!?」
「慧理那に首輪をつけてお散歩する方がマシに決まってるだろ!!」
「わかりましたわご主人様、はい、首輪!!」
「ああ!!」
　……あれ？
　気づけば俺は、首輪を渡されていた。先日イエローがパワーアップした際に生み出した進化エヴオルブ装備アームズ・アブソリュートリングとは違う、ごく普通の首輪だ。いや、人間がするという意味では普通ではないんだが……噛かみしめるように観束君と連呼した後呼び方変わったし……。
　愛あい香かは俺が受け取った首輪を、横から泡を食って引ったくった。
「あっぶなあ！　駄目だよ会長、まだトゥアールに弟で子し入りした時

の癖くせが抜けてない!!」
「まだではありませんわ、トゥアールさんとの特訓は今もわたくしの中に息づいています！」
　そう断じた慧理那のツインテールには、一点の曇くもりもない。
　殻からを破り、逞たくましく成長した慧理那を頼もしく思うと同時に、本当にこれでよかったのだろうか──と惑うのは、俺の女め々めしさだろうか。
「……え、慧理那さん……総そう二じさんの部屋に、拠点を作るなんて……ずるい……!!」
　親指の爪を噛みながら、イースナが羨うらやましげに犬小屋を見つめる。
　彼女が現れたクローゼットに、俺は物悲しく視線を移ろわせる。何度調べても別の場所に繋つながっている気配はなかったし、やっぱりイースナはいつの間にか部屋に侵入し、あそこに潜んでいるだけなのだろうか……。
『イースナちゃん、朝ご飯できたで～』
「やっぱ繋がってるじゃねえかあああああああああああああああああああああああああ!!」
　ほんわかしたおかんの声が、霧む散さんしかけていた疑念を確信へと変えたのは皮肉な話だ。
　イースナは返事待ってます、とだけ言い残し、クローゼットの中に消えていった。
　慧理那と愛香はまだ、互いの持論を展開し合っている。
　この騒ぎの中、むしろトゥアールがいないことに不自然さを感じていたら……案の定、入り口に立っていた。
「ククク……あれほど進化してしまった慧え理り那なさん、愛あい香かさんは止めずにはいられないでしょう……！　愛香さんと慧理那さんと

イースナで三さん竦すくみになり膠こう着ちやくしているのを横目に、私が総そう二じ様の童貞を奪う！　完璧なシナリオです……!!」
　不敵に何か呟つぶやいているトゥアールめがけ、愛香が一足飛びで摑つかみかかった。
「三竦みしていようが、あんたなんて片手間で十分なだけよ!!」
「まさかの雑ざ魚こカテゴリッ!?」
　何てこった、二人のじゃれ合いを見て、ようやく落ち着いた俺がいる。もはや一日の必要体力全てを消費してしまったかのようだ。

◇

　登校中、俺は愛香に最近のふがいなさを指摘された。
「ここのところ、ちょっとたるんでるんじゃない？　覇は気きがないっていうか」
「確かに、疲れが溜たまりやすくなってるなあ……。少し鍛きたえ直すか……」
　俺が観念して認めると、制服の上から着た白衣を翻ひるがえし、トゥアールが含み笑いを向けてきた。
「溜まってるんですね、総二様!!」
　胸を大おお仰ぎように揺らしながら、トゥアールがめちゃくちゃ嬉うれしそうに言う。
　確かに、疲れが溜まっているのは事実だが……何だろう。
　うん、と頷うなずいてはいけないような。
「ちゃんとツインテール分も補給しないとな……。俺の体力回復には、それが一番だ」
「ま、待ちなさいよ！　そーじ、そんなこと言ってる割りに、最近またあたしのツインテール全然触ってこなくなってるじゃない!!」

　愛香は自分のツインテールの房を摘つまんで揺らし、俺を糾きゅう弾だんする。
「いや、でもそれは俺が心を強く持てば何とかなるし……愛香に迷惑はかけられないよ」
「…………た」
　愛香は顔を真まっ赤かにして、俺のネクタイを摑んだ。
「溜まってるんなら、あたしで解消すればいいでしょ……!!」
「あ、愛香……」
　背後から、音響設備に優れた映画館のような臨場感溢あふれる歓声が聞こえる。
「何だあ!?」
　愛香の肩を叩たたいたり、サムズアップしたり、ウインクしたりしながら、次々にクラスメイトの女子が通り過ぎてゆく。
　あまりに均一化した間隔と速度なので、各々が動く歩道の上に乗っているのかと勘違いしそうだ。
「あー、朝からいいもん見たわー！」
　最後の一人に至ってはそう言って大きく伸びをし、そのモーションのまま腕を固定しバレリーナのように回転しながら去って行った。何だったんだ、一体。
「どうして愛あい香かさんばっかりっ……！　愛香さんが、私の望むシチュエーションをどんどん叶かなえていく!!」
　トゥアールは白衣の裾すそを嚙かみながら、顔を真まっ赤かにして俯うつむく愛香を恨めしげに見つめる。
　俺が顔を上げると、車道を挟んだ向かいの電柱に身を隠す大男が視界に入った。
「……未み春はる様。登校中にイベント有り。仔し細さいをお送りします」

　トレンチコートの襟えりで顔を隠しながら、男が電話をする。
「誰だれだあのトレンチコートの男⁉　今なんか恐ろしいこと言ってなかったか⁉」
　確認を求めるが、愛香もトゥアールも、意識が周りに向いていない。
　いや、よく見りゃあの人、俺の家の喫茶店に来る常連さんじゃないか！
　よくもう一人別のお客さんとテーブルの上で写真の見せ合いっこしたり、何も入っていないアタッシュケースを勿もつ体たいつけて開けたりしてるのを見たけど……利害が一致して母さんの尖せん兵ぺいになってないか、おい⁉
　俺ん家ちの喫茶店は今、いったいどうなってしまっているんだ‼

「お待たせしましたわ、観み束つか君、津つ辺べさん、トゥアールさん！」
　部屋に犬小屋を設置された時はどうすればと思ったが、背後に感じるツインテールの凜り々りしさに、俺は慧え理り那ながしっかりと生徒会長スイッチに切り替えたことを知覚し安あん堵どする。
「慧理……うおあああ⁉」
　合流した慧理那へと振り返ると、そこだけ夜だった。慧理那の背後で、邪悪な黒雲が渦巻いている。
　パワーアップの前に一度暗黒へと堕だしたテイルイエロー……シャドウイエローを思わせる黒さだが、もちろんその黒雲の発生源は慧理那ではない。
「アト……三日……アト……三日……」
　桜さくら川がわ先生だった。
　慧理那の護衛として、凜りん然ぜんとした面おも持もちで通学路を歩むいつもの姿は露つゆほどもなく。

壊れたオルゴールのように延々と誕生日までのカウントダウンだけを呟つぶやきながら、桜川先生は通りすぎる登校中の生徒たちに婚こん姻いん届とどけを渡していく。

ボクサーが、意識を失いながらもパンチを繰り出す不屈さにも似た光景か。

いや、もはやそこまで前向きなものですらなく、生命の輪から切り離されたゾンビが、ただ生者の血肉を求めることしかできない哀れさにも似ている。

「誕生日が近いようで……最近尊みこと、元気がありませんの」

慧え理り那なが頬ほおに手を添え、心配そうに桜さくら川がわ先生を見やる。

放たれている黒雲がシダ植物のように背中を撫なでている感触をできるだけ気づかないよう努めながら、通学路を歩く。

「やばいわね桜川先生、本当に日に日に悪化してくわ」

慧理那が自分から離れ、俺たちに近づいても桜川先生は気づいていない。

「尊を元気づけてあげるためにも、またみんなで誕生会を開きたいと思っているのですが……いかがでしょう？」

慧理那の心遣いはわかるが、桜川先生にとっては誕生会が逆効果なのはわかる。

「……多分だけど、それやるととどめになっちゃう気がする……」

愛あい香かがそうやんわりと止めるが、それは俺も、多分トゥアールも同じ考えだ。

桜川先生、どうやって元気づけてあげればいいのかな……。

ポケットに手を突っ込む。くしゃりとした感触に驚き、中身を出すと——。

いつの間にか、折り畳んだ婚こん姻いん届とどけが入れられていた。いつもより、遥はるかに重量を感じる。
ただの紙が、ボウリングの球のように重い――。

◇

静かだった。
無音だった。
何十体もの豪ごう傑けつたちがひしめいているアルティメギル基地大ホールは今、水を打ったような静けさに包まれていた。
しかもそれは、厳げん粛しゆくな静せい寂じやくなどではない。悲嘆が生み出す、覇は気き無き寂せき寞ばくであった。
ドラグギルディが敗れ。補充部隊の長おさ、タイガギルディが一いつ蹴しゆう。双勇リヴァイアギルディ、クラーケギルディも斃たおされ。指揮官・ダークグラスパーが組織を出しゆつ奔ぽん。
そしてついに、長きにわたり自分たちを導いてくれた猛将・ビートルギルディ率いる美の四心ビー・テイフル・ハートまでもが、ツインテイルズの前に完全壊滅を喫した。
この残存部隊にはもはや、一人の導き手も残っていない。
耐えがたいほどの静けさの中、参さん謀ぼう・スパロウギルディは、ホールの演説位置へと登壇した。
長年ドラグギルディの参謀を務めていたとはいえ、武ぶ勲くんなき一兵が、どれだけ多くの将と戦士の背を見送ってきただろう。そして、このホールを後にした彼らは例外なく、二度とここへ戻ってくることはなかった。
多くの将が拳こぶしを突き上げ、声も高らかに指示を出してきたこの場所で、怖おじ気けに塗まみれた宣言をしなければならない。身を斬き

るよりもつらい決断をしなければならない。
　だが、自分にしかできない、自分がやらなければならぬことだ。
　まなじりを決すると、スパロウギルディはホールにいる兵たちに向け、淡々と告げた。

「――――この世界から、撤退する」

　提案ではなく、決定。普段好こう々こう爺やにも似た穏やかな雰囲気を纏まとうスパロウギルディが初めて見せた冷徹な声こわ音ねに、兵たちは座してなお後ずさりしかける。
　その言葉に秘められた優しさを理解しながら、彼らは反論せずにはいられなかった。
「お待ち下さいスパロウギルディ殿！　ビートルギルディ様の……多くの同胞たちの弔とむらい合戦もせぬまま、尻しつ尾ぽを巻いて逃げろと仰おつしやるのですか!?」
　真っ先に声を上げたのは、ビートルギルディに大恩ある鎖骨属性クラビクルの勇、ライノセラギルディだった。別のエレメリアンも立ち上がり、声を荒らげる。
「そうです！　テイルレッドのツインテールを奪わぬままこの地を去るくらいならば、我われら最後の一兵となるまで戦い抜くことを選びましょう!!」
　スパロウギルディは、厳しく言い返した。
「ツインテイルズはもはや幹部の御方たちでも止めること敵かなわぬ存在！　しかもそれが今は四……いや五人だ！　ビートルギルディ様さえもが真っ向勝負で敗れた今、誰だれが彼女たちに勝てるというのだ!!」
　無念のざわめきで、ホールが満たされていく。
　反論するのはたやすい。そして、この場にいる誰もが反論するだけの

気概を持ち合わせている。
　だが、スパロウギルディにこの辛つらい決断をさせてしまったという負い目が、急速に彼らの思考を冷やしていった。
「全ての責は私が負う。どうか皆、テイルレッドは諦あきらめてくれぬか!!」
　アルティメギルの部隊が、侵略価値無しと判断したという以外の理由で撤退するなど……世界の守護者ガーデイアンに白旗を揚げ、侵攻している世界から退くなど、前代未聞の出来事だろう。
　偉大なるアルティメギル首領にその事実が知れれば、それを扇せん動どうした兵は厳しき罰を受けるに違いない。スパロウギルディの言う責とは、そういうことだ。
　このまま決定を受け入れてしまってよいのか。ホール内の誰もが、歯がゆさに身を焦こがし始めた、その時──凄すさまじい激震がホールを襲おそった。
「うおおおおおっ⁉」
　よろけ、咄とっ嗟さにテーブルにしがみつく戦士たち。
　ある戦士の私物であるテイルレッドタンブラーが床に転がり落ち、乾いた音を立てた瞬間、ホールの照明が一段明度を下げる。
　続いてスピーカーから鳴り響いたのは、ただの一度として鳴ったことのない、アルティメギル基地の緊急アラートだった。

　オニ────チャン……
　オニ────────チャン……

　どうせ鳴るはずがないので警備担当が密かに趣味を仕込んでいたアラートが、よもや機能してしまった。この基地に、かつてない危機の到来が告げられる。

　メインモニターに、基地格納庫に何かが力任せに突っ込んできたという情報が映し出された。
「敵襲か!?」
「まさか、テイルブルーが!?」
「ありえぬ！　この基地を人間が発見するなど！」
「無論、人間ならば不可能だ！　しかし、テイルブルーだぞ!!」
　戦士たちは口々に不安を漏らし、慌てふためく。不測の急襲と見れば、何を置いても先にテイルブルーを予期する。
　考え得る最悪を想定し対処するのは、災害対策の基本であり神髄と言えた。
「……間に合わん！　総員、戦闘態勢を取れ!!」
　スパロウギルディの号令の下、席を立ち、臨戦態勢に入るエレメリアンたち。
　廊下から豪快な足音が響いてくる。歩むというよりも、床を蹴け り砕いているかのようだ。テイルブルーの足音とは、これほどまでに乙女を忘れた轟ごう音おんだというのか。
　ここで迎え撃つ。皆、死ぬ時は一緒だ。一同、顔を見合わせるでもなく、覚悟を決める。
　心残りは、覚悟を決める暇いとまもなく、ハードディスクの中身を消去できなかったことか。ならば存分に未来に遺のこれ、我わが愛いとしき磁気ディスクよ、とハードボイルドに笑う戦士。
　ホールのドアが横開きに開き、戦士たちの視線が集中する。姿を現したのは――屈強な巨漢のエレメリアン一体だった。
　刃やいばのような眼光。研とぎ澄まされた爪と牙。剛健の極点たる、猛たけく雄々しき全身。
　飽くなき狩猟と闘争の果ての到達点。比類なき古代の覇は者しやを体現せし、烈はげしくも美しき戦闘生命─。ただ言葉なく刮かつ目もく

し、戦士たちは息を呑のんだ。
　静まりかえる戦士たちを一望し、そのたくましい胸板をそびやかして豪笑するエレメリアン。
「ぐわっはっはっはっはっは！　何だ、皆武器など持ちおって！　負け犬どもよ、不ふ遜そんな出迎えご苦労!!」
　これ見よがしにマントを翻ひるがえしたそのエレメリアンのからかうような視線で、金かな縛しばりが解けたかのように身動ぎする戦士たち。そして、ようやく悟った。
　事前連絡もなく、到着信号もなく……格納庫にわざと移動艦で突っ込み、自分たちの反応を愉たのしんだのだ。この━新たな部隊長は。
　あるいは━試したのか。これから指揮する戦士たちが、腑ふ抜ぬけの集まりでないかと。
「俺の名はティラノギルディ！　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長にして、最も美しき属性である百合属性ガールズラブを極きめた、最強の帝王よ!!」
　鋼はがねの肉体に百ゆ合りへの思いを漲みなぎらせ。帝王ティラノギルディ、ここに堂々降臨━━!!

◇

　アルティメギル四頂軍の一角・美の四心ビー・テイフル・ハートは、総力戦の末に完全壊滅した。
　これで俺たちツインテイルズは、ロロリーたちの世界で撃破した貴の三葉ノー・ブル・クラブと合わせ、首領直轄軍というアルティメギル最大戦力を、半減させたこととなる。
　それでもまだ油断できないのが、アルティメギルという組織の底知れ無さだ。

単騎で俺たちを圧倒した反逆のエレメリアン、フェニックスギルディの存在もあるしな。
しかし、多少のイレギュラーはあるにしても、基本的にアルティメギルは部隊長や部隊そのものが倒されれば、次の部隊が補充されてくるというシステムなのは間違いない。これは、俺たちが今までの戦いから得た結論だ。つまり、その補充期間は、侵攻の空白期間となる。散発的に何度か現れた、四頂軍・死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが次の補充部隊の最有力候補だとは思うが……。
ここ数日エレメリアンが現れないのはまさにこのパターンだと判断し、俺たちはその数日間、ゆとりのある日常を過ごしていた。
放課後、俺とトゥアール、愛あい香かはツインテール部部室に行く道すがら、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生と合流する。とことこと俺の横まで歩いてきた慧理那に、そっと制服の裾すそを摘つまれた。
「あ、あの……観み束つか君……今日も……しましょうね」
そこまでを普通に周囲に聞こえるように言うと、最後に目を細め、
「特訓」、と続ける慧理那。
「やべ――――――――っ慧理那さんがどんどん調教されてってエロ嬉うれしいけど脅威でどうしましょう私は!!」
「飛べ!!」
実にシンプルな解決策を愛香に提示され、トゥアールが窓から空の彼方へと消えていく。
先日パワーアップした、テイルイエロー・アブソリュートチェインは、俺が首輪のリードを握ることでエネルギーをチャージする仕様なのだが、それは強烈な疲労を俺にもたらす。
しかしヒーロー好きの性さがか、慧理那はとにかくその形態を使いこなしたいと、特訓に誘ってくるのだ。できる限り、協力はしたいのだが……強力すぎて身が持たない。

しかしブーメランのように人智を超えた軌道で元の場所に舞い戻ったトゥアールは、油断している慧理那の前に立って陽気な声で、
「そんないやらしいことを言うのは、この下半身ですか!!」
慧え理り那なのスカートを摘つまみ、一気に捲まくり上げたのだ。振り返って正面にいた俺には、慧理那のパンツが丸見えになる。
レースが大量にあしらわれた、パールのように輝くシルクのパンツだった。
さすがに周りに人がいないのを確認してからやったようだが、それでも学校の廊下だ。
「何をしてんのよこのクソド変態がああああああああああああああ!!」
愛あい香かはすかさず殺人パンチを放つ。
慧理那に当たらないよう気遣って放たれたせいで、悠々とトゥアールに躱かわされた。
「愛香さんはホントあれも駄だ目めこれも駄目と融通の利かない人ですね！　本物のロリをつけ回したり視し姦かんするのは駄目、テイルレッドも駄目、合法ロリの慧理那さんも駄目と言われたら、私は一体どのロリを愛めでればいいんですか!!」
愛香と桜さくら川がわ先生のツープラトンのブレーンバスターを食らうトゥアール。
合法ではない、ＧＯ ＨＯＭＥ。それが、法治国家における答えのようだった。
少なくとも、慧理那の護衛では気力が戻るのだから、プロだな、桜川先生は。
もしかしてトゥアールは、桜川先生を元気にするためにあえて悪役となって慧理那のスカートを捲ったのだろうか。……好意的解釈も限界があるか。

「……ごうほうろり……？　わたくしがですか？」



　スカートを捲まくられたショックより、その言葉への興味が勝ってしまったらしい慧え理り那なだったが、とにかく俺は頭を下げた。
「ごめん慧理那、見るつもりはなかったんだ」
　慧理那は手を振っていえいえ、と謝り返してくる。
「いえ……も、もうご主人様には下着くらい……」
　あっ、と呟つぶやいて口元を手で隠す慧理那。
「ほほおっ!?　慧理那さんの露出癖へきがそこまでアブソリュートに!?」
　起き上がりざま驚きよう愕がくするトゥアール。
「ごめんね会長、トゥアールはあたしがとっちめとくから……」
　慧理那は後光が射すような笑顔を向けた。
「わたくし、観み束つか君とはかなり距離が縮まったと思いますけれど、まだ津つ辺べさんやトゥアールさん……それにイースナさんには遠慮されている感じがしますから……」
　ふわっとはにかみ、慧理那はスカートの両端をお辞じ儀ぎをするような仕草で摘つまんだ。
「こういう子供っぽい悪いた戯ずらをされると、距離が縮まったような気がして、嬉うれしいですわ」
「なんと、やりました！　本人の許可が出ましたよ総そう二じ様！　今度は私と一緒にパンツの中に手……」
　愛あい香かと桜さくら川がわ先生のサンドイッチ式ラリアットを首に受け、悶もん絶ぜつするトゥアール。
「会長、トゥアールを甘やかしちゃ駄だ目めよ！　そうだ、会長がトゥアールをブン殴なぐればいいのよ、それなら全然問題ないわ！」
　困惑していた愛香が、とんでもない提案をする。むしろどこに問題がないというのか。
　はい、と干物のようにつぶれたトゥアールを差し出す愛香。

「いいえ、わたくしは叩たたかれる方であり続けますわ！　そう約束しましたものね、観束君！」
　遠慮のない関係になりたいと思いつつもやはり、自分が誰だれかを叩くことには抵抗があるのだろう。慧理那はやんわりとそれを断った。
　──あと、注意しないと、覚えのない約束が危うくスルーしそうな自然さで増えていく。
「トゥアールが師匠になったからなあ……会長、どんどんアクティブになってくよ……」
　さすがの愛香も、積極的になった慧理那にはたじたじのようだ。
「ああ。慧理那、出会った頃ころに比べて随分変わったよな」
　アイマスクを手にした慧理那にどう対処するか考えていると、愛香がしみじみと呟いた。
「……あたしは……あたしとそーじは、ずっと変わらないよね。昔から……」
「愛香のツインテールだって、日々成長してるじゃないか？」
　それに、俺の中のツインテールだって絶え間なく成長しているつもりだ。
「あたしは、もっと変わりたいの」
　ツインテールが寂しげにしている……と感じた瞬間、そのツインテールを颯さつ爽そうと翻ひるがえし、愛香は慧え理り那なのスカートの中に手を入れようとしていたトゥアールを討とう伐ばつに向かう。
　愛あい香かだって、昔より今のほうがずっと生き生きとしてると思うけどな。……とてつもなく。
　結局今日は、久しぶりにみんなで放課後俺の家の喫茶店でゆっくりしようということに。
　慧理那の〝アブソリュー特訓〟を回避したかったという理由も多分にある。

「お、おじゃましますわ……」
　日没前に家についた。先日の観み束つか・神しん堂どう家母カタストロフィー事件を思い出したのか入り口でもじもじしている慧理那を、苦笑して中に案内しようとする。
　しかしそこで俺も、条件反射的に足が止まってしまった。……大丈夫だよな。母さん、もし理事長が来ても、お客さんの前ではあんなことしないって言ってたし。
　カウベルが鳴り、カウンターにいた母さんが「おかえり」と軽く手を振る。
　常連のお客さんたちも、「おかえり、総そう二じ君」などと声をかけてくれた。このアットホームな雰囲気は嫌いじゃない。
　店内にいるのは……まあ、おおよそいつも通りの顔ぶれだ。時間帯によって来る人も違うが、今ぐらいだと会社帰りの人とかが多かったり。
　奥の席が空いていたので、慧理那と桜さくら川がわ先生をそこに連れて行くことにする。
　カウンター席の、最近常連になったＯＬのお姉さんが、椅い子すごと回転してこんにちは総二君、と挨あい拶さつしてくれた。そして自分の右肩に視線を送り、ぼそりと独りごちる。
「違うわよ。……もう、グマちゃんは普通の人には見えないんだから、ここで会話してたら変だって思われるじゃない」
　喫茶店ここ以外でならそう思われるのは待ったなしなのだが、このＯＬのお姉さんは、魔法少女……で、肩にはグマちゃんという常人には見えないマスコットキャラがいる設定だということが、何回か会ううちにわかった。
　パリッとしたサマースーツで固めた眼め鏡がねの似合う推定二五歳の女性だが、魔法少女なのだ。

でも俺たち、本物の魔法少女と知り合いだからな……。

「あら、みんな」
奥のボックス席で手を振る恋れん香かさん。
ちょうどいいので、みんなで相席させてもらおう。何な故ぜかトゥアールが抜き足差し足で遠慮がちだが。
魔法少女の女性と真顔で長尺の台詞せりふを言い合っている母さんを横目に、俺たちは恋香さんと談笑する。周りの女の子が明るい子が多い中、恋香さんは聞き上じよう手ずといった感じだ。
「本当に素敵だなぁ……慧理那ちゃんのツインテール」
「え？」
恋れん香かさんは話の途中で、慧え理り那なのツインテールについて触れる。
「特に、その先端のカール。とってもかわいいな。どうやってケアしているの？」
「いいえ、これ、地毛ですの。多分……神しん堂どう家の遺伝ですわ」
神堂家の家訓にあまり触れないようにしながら、慧理那は恥ずかしそうに言った。
「お母様に教えてもらいましたの。神堂家の女のツインテールが、何な故ぜ先端にカールがかかっているのか」
「へえ……カールがかかっている理由があったのか？」
ツインテールに対する知識なら、何を知っておいても損はない。俺は慧理那へと前のめりに知識欲をぶつけた。
すると、慧理那はそのしなやかな五指でツインテールを掬すくい上げ、俺の目の前に差し出した。
「このように、男性と繫つながるためだ、と……」
「え……？」

するん、と俺の手首が慧理那のツインテールのカールに飲み込まれた。ピッタリだ……！

慧理那のツインテールのカールが、俺の手首にジャストフィットしている！

「わ、わたくしのツインテール、観み束つか君の形にされてしまいましたわ……」

次代に受け継がれてゆくツインテール。神堂家の女性は、こうして幾代にもわたってツインテールを継承してきたのだろう。目頭が熱くなった。

「いつも無意識にエロ台詞せりふを言う慧理那さんですが……あれは明らかに慧え夢むさんの仕込みですね！　でもたどたどしくて可愛かわいいです!!」

「お姉ちゃんの前でそういうの止やめなさいって言ってるでしょ！」

愛あい香かがトゥアールを締め上げ、桜さくら川がわ先生は店内の婚こん姻いん届とどけ対象を探している。

俺が右手に巻かれた毛先を見ていると、慧理那が息を荒らげながら提案してきた。

「観束君さえよろしければ、しばらくこのままでよろしいでしょうか……はあ、はあ」

「ああ、俺は全然大丈夫。マジで」

慧理那が自分で外すまで、俺から率先して外すつもりはなかったので、全く問題はない。

柔らかなツインテールの感触を、右手首でじっくりと堪能する。アブソリュートチェインのリードと違い、こうしてツインテールで繋がると、むしろ俺自身に活力が湧わいてくるようだ。

……というか、何だろう、胸の動どう悸きが速くなって、体が熱くなってきたような……。

「……あ、あの顔、やば…………ちょっとそーじ！　あたしのツインテールだって巻こうと思えば巻けるんだからね！　ほら、こーして……!!」
「おっ……と」
　愛香が強引に俺の左手首を取り、そこへ自分のツインテールの毛先を巻き付け始めた。
「おやおや随分手慣れてますね、髪の毛をナニかに巻き付けるシミュレーションでもしていたんですか愛香さのおおおおおおおおおお!!」
　こめかみを愛あい香かに左手で摑つかまれて全力シェイキングを受け、叫び通り著いちじるしく左脳にダメージを受けるトゥアール。あくまでそれは片手間で、愛香は熱心にツインテールを巻き続ける。
「待て待て愛香、そんな力任せに巻いたらお前のツインテールが傷いたんじゃうだろ!?」
　すでに俺の肘ひじ近くまで包帯のようにツインテールを巻き、肩が触れ合う距離まで接近した愛香が、自信たっぷりに返答してきた。
「あ、あたしのツインテールはそんなヤワじゃないのよ!!」
「そっか！　さすが愛香だ!!」
　以前愛香からツインテールについてのアドバイスをもらった時は、ツインテールは傷みやすいから扱いには気をつけろ、って言ってた気がするけど……練度の差だろうか!?
「観み束つか君……！　わたくしだってもっと巻けますわ！」
　目を血走らせた慧え理り那なが、俺の肩にぐいぐいと体を押しつけてくる。
「いや、でもカールがもう……」
「カールなら、今これからわたくしが自分自身の手で作りますわ!!」
「な、何だって!?」
　慧理那の飽くなきツインテールフロンティア精神に、打ち震ふるえず

にはいられない。
　左右の手首、愛香と慧理那がそれぞれ、どこまで巻けるか対決の様相を呈してきた。
　店内婚活が失敗続きで、いよいよ魔法少女設定のＯＬさんのマスコット・グマちゃんに求婚する選択肢を視野に入れようかとしていた桜さくら川がわ先生が、俺たちの席に戻ってきた。
「観束……私はどこに巻けばいい……？　どこに巻けば婚こん姻いん届とどけに判を押してくれる……？」
　俺の両手首が満車なので、首にそのツインテールを駐車しようとしてきた桜川先生を説得するのは、骨が折れたのだった……。もっと、俺のツインテール最大積載量を増やしたい。

　ひとしきり話し終わったあと、恋れん香かさんはぽん、と手を叩たたいて嬉うれしそうに笑った。
「ふふ、そうそう。今度みんなと一緒になった時、見てもらおうと思っていたの」
　恋香さんは、椅い子すに掛けていたバッグの中から一枚の写真を取り出し、テーブルの上に置いて俺たちに見せた。幼い女の子が、真ん中に大きく映っている。
「何ですかこの可愛かわいい生き物は！　股またが熱くなるじゃないですか！　ペロペロ!!」
　トゥアールは写真を目にするやいなや、水上の魚を狙ねらい急降下するハヤブサのような速度で身を乗り出した。
　予期せぬトゥアールからの賛辞に顔を赤らめ、愛香がぶっきらぼうに言い放つ。
「それ小さい頃ころのあたしよ!!」
　写真に映っているのは、小さい頃の愛香だ。すぐ後ろにいるのは背を

向けた俺で、何な故ぜかそれを庇かばうように両手を広げ、涙目でカメラを見上げている。
「……………………………………………………………………………………は？」

　人類最高の叡えい智ちを以もつても避けえぬ驚きよう愕がくの長考の後、目を見開いて硬直するトゥアール。
「これがっ…………………………え、これ…………に⁉」
　トゥアールは、手に持った写真と愛あい香かを何度も何度も、首の筋を違えるのではないかというほど動かして確認した。決して認めたくない事実から、何とか目を逸そらそうとするように。
　しかし得てして、真実とは無情なものだ。
「何な故ぜ世界は、こんなにも残酷なんですかあああああああああああああああああ‼」
　激しい絶望に身を焼かれ、トゥアールは天を仰いで絶叫した。
「こんな、こんな世界ならいっそ――‼」
「勝手に悪あく堕おちのプロセス踏んでんじゃないわよ‼」
　トゥアールのこめかみにそっと手を触れ、足を踏ん張る愛香。喫茶店のお客さんの前なので派手な攻撃は控えているが、先ほどのシェイク以上に脳に直接振動を与える凶悪な攻撃だ。
　悪堕ちしかけたトゥアールに「資質あり」と判断したのか、常連さんたちが腕組みをしながら頷うなずき、何か相談をし合っている。
「お姉ちゃん！　どうしていきなりこんなの出したのよ、恥ずかしいじゃない‼」
「愛香も昔はもっと女の子女の子してて可愛かわいかったって、みんなに知って欲しくて♪」
　愛香の抗議も、恋れん香かさんはゆるっとかわしている。

この頃ころからもう男勝りだったんだよな、愛香。瓦かわらの一枚ぐらい簡単に割ってた。
見た目はトゥアールの言う通り本当に可愛い女の子だから、そのギャップに大人から驚かれていた。俺なんて、この年あたりだと女より弱いってからかわれてたっけ。
でも、この頃の愛香が人前で泣くなんて想像もつかないな、何をしてる時の写真なんだろう。
「恋香さ～ん、この写真～、一枚いただきたいのですが～」
トゥアールが猫ねこ撫なで声で恋香さんの肩を揉もみながら、こぼれる涎よだれを拭ぬぐいもせずに商談を持ちかける。
「ええ、どうぞ。まだまだたくさんあるから」
「何であるの!?」
妹の不満をさらに聞き流し、恋香さんはトゥアールに写真を渡してしまった。
愛香が取り返そうとするも一瞬早く、白衣のポケットに仕舞うトゥアール。胸の谷間じゃなくあそこに隠すということは、本気で返す気はないってことだ。
いくら愛香でも、異次元にあるものは手を出せないからな。…………多分。
「そ、そんなの大事にしてどうするのよトゥアール！　それ、あたしなのよ!?」
明確な言葉を返さず、ただ意味ありげに笑うトゥアール。
愛香は自分の身体からだを掻かき抱き、ぞぞっと怖おぞ気けに襲おそわれているようだった。

◇

　着任した新将・ティラノギルディは、まず、この部隊の兵たちが恐れているテイルブルーに興味を持った。
　その武勇伝をかいつまんで説明させ、その後、「ちょっとあれだからこれは封印しておこうね」と部隊で上映禁止作品の扱いとなった、彼女のジェノサイド映像集があると聞き及ぶや、肝試し・根性試しとばかりにわざわざ引っ張り出させた。
　そして今、大ホールのモニターに大写しにしたテイルブルーを前に、遠慮なく大笑していた。
「がっはっはっは！　貴様等が鬼だ悪魔だと騒ぐゆえどんな化け物を相手にしてきたかと思えば、テイルブルー、この程度か！　あれほど見事な貧乳を目の当たりにしてネタにせぬとは、貴様等も遊び心のない！　マントと間違って羽は織おってやればよかったではないか!!」
　さすがは死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長、惚ほれ惚ぼれするほどの命知らずぶりだ。壁に耳あり障子に目あり、壁はテイルブルーの胸なり。ことわざにある通り、軽けい率そつな悪口はどう相手に伝わるか知れたものではない。
　今にも二度目の激震が基地を揺るがし、今度こそテイルブルーが襲おそいかかってくるのではとそわそわし始める戦士たち。彼女ならば入り口の自動ドアを潜くぐるなどという女め々めしい真似はせず、その胸で以もつて立ちはだかる壁全てを破砕し侵攻してくるだろう。
　ちょうどその時。
『貧乳貧乳うるせえええええええええええええええええええええええええええええええええ!!』
　ティラノギルディの嘲ちよう笑しように反応したかのように、タイミングよく映像はテイルブルーの暴走シーン集がスタートしていた。これがバラエティなら、パネラーがワイプで二〇分ほど真顔をお茶の間に晒さらしてしまうであろう凄せい惨さんな映像だ。

「…………こわっ」
　大将たるティラノギルディ御自ら、リモコンを操作しモニターをＯＦＦにする。
「ティラノギルディ様!?　いえ、申し訳ありませぬ……」
　首領直属軍の部隊長が小娘のような怯おびえ声を出したような幻聴に、現部隊の戦士は恐れ多さに姿勢を正した。
「見るだけ時間の無駄だ、このような弱者の戦闘映像など、帝王には不要」
　ティラノギルディはそう吐き捨てて別の映像に切り替えるが、それもまた、雨のように容赦なく拳けん打だを浴びせるテイルブルーの映像だった。
「オラァアアアアア──」
　剣豪の居合いさながらの速度と流麗さでリモコンを手にし、今度はＯＦＦボタンをシューティンゲームの佳境を思わせる必死さで連打するティラノギルディ。
「目がやばいって……」
「ティラノギルディ様!?」
　部下の再びの問いに舌打ちし、ティラノギルディは戦闘員アルテイロイドに消音にした上で決して自分に見えぬよう刺激の少ないシーンをセレクトした映像集に変更せよ、と細かい指示を飛ばした。
「とにかくだ。今日は小僧っ子の貴様等に、死の二菱ダー・イノ・ランヴアス流を叩たたき込んでやる。よいか、この世で最も美しいものは、少女同士の愛！　百ゆ合りこそが綺き羅ら星ぼしと輝く至高の属性なのだ！　その二人がツインテール同士であったなら……もはや、向かうところ敵無し!!」
　三本角のエレメリアンが、横に立って自己紹介をする。
「……死の二菱ダー・イノ・ランヴアス・左牙の副将レフトフアング・

トリケラトップギルディだ。ティラノギルディ殿はあの通り変わり者だ、馴な染じむにはとてつもなく時間がかかるであろうが、共に戦ってゆこうではないか」
「死の二菱ダー・イノ・ランヴアス流とは、それすなわち百合流！　貴様たちも百合の素晴らしさを理解し、負け犬根性を捨て去るがいい!!」
　ホールで着席した戦士たちは、そのあまりにも傲ごう岸がんな物言いに空気を淀よどませる。
「いや、百合属性ガールズラブはティラノギルディ殿一人だが……。私は、幼おさな馴な染じみの娘を好むのだ」
　残存部隊をフォローしようという優しさか、単純にティラノギルディに人望がないのか、トリケラトップギルディがあっさりと隊の規律を否定した。
「幼馴染でも百合はできよう!!」
「百合ではない幼馴染がよい」
　思うべき所は断じて譲らず、媚こびず、言い返す。腰こし巾ぎん着ちゃくではない、有能な副隊長であることが垣かい間ま見える。
「フン、別によいわ……」
　豪笑していた帝王が、娘に一緒にパンツを洗濯することを拒否された父親のような寂しげな背中を向け、モニターを凝視した。
　戦闘員アルテイロイドが映した、ツインテイルズの映像。凄せい惨さんな戦闘シーンは編集され、テイルレッドの可愛かわいさをフィーチャーした動画だ。
　一応他のツインテイルズのメンバーも理解しなければならないため、申し訳程度に一緒に映っている。
　奇襲ドッキリの登場からここまで、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスという部隊そのものはいざ知らず、ティラノギルディに関してはいまいち実力を信用しきれずにいた戦士たちだったが、ここでようやく、首領

直属軍隊長の恐るべき力を目の当たりにすることとなった。
　複数の少女が画面に同時に映った瞬間、腕組みで立つティラノギルディの全身から凄すさまじいばかりの闘とう気きが迸ほとばしった。
「赤、青、黄、黒……！　フッ、組み合わせが捗はかどるわ……!!」
　刹せつ那なの時を置かずして始まる、百合カップリング。
　ティラノギルディはその豪腕でコンソールパネルを操作し、自ら画面を分割。
　カップリングの例を次々に画面に投影していった。
　未熟な駆け出しの百ゆ合り好きならば、全てテイルレッドを中心にすることで思考停止してしまうだろう。
　だがホールの戦士たちが瞠どう目もくしたのは、その圧倒的戦闘力に裏打ちされた、絶対の余裕。
　テイルレッドがいなければ不安になるという弱者の思考をあざ笑うかのように、その組み合わせの幅はレッドとそれだけでなく、ブルー×イエロー、ブルー×ブラック……そして、イエロー×ブラックにまで及んだのだ。
　三種類ではなく、倍の六種類。勇気こそが生み出したバリエーションであった。
「これがツインテイルズか……！　まさに百合どりみどりではないか!!」
　両手を広げ、完成した百合カップリング図を前に歓喜するティラノギルディ。
　間髪容いれず、レッドが他のメンバーに接触している映像を中心にセレクトされた映像を閲覧し始める。
　さぞ歓喜するだろうと想像していた面々は、ティラノギルディの顔がにわかに渋くなっていくのを感じていた。
「百、合……？」

　ううむ、と顎あごを押さえるティラノギルディ。
「どうされた、ティラノギルディ殿。レッドがうっかりブルーの胸……胸？　一応胸、か……うむ、胸に触れた映像ではないか。貴殿ならばメインディッシュのステーキにも等しかろう」
　鼻をほじるような適当さで焚たき付けるトリケラトップギルディ。
「いや、確かに少女と少女がイチャイチャしてはいるが……何な故ぜだ、百合を感じぬ……俺の牙きばがうずかぬのだ」
　まさに恐竜の王者ティラノサウルスを彷ほう彿ふつとさせる巨大な牙は、百合センサーとして活用されているようだが、それに反応がないらしい。
「おそらく、先ほどご覧になられた、テイルブルーの本質がその原因でございましょう」
　残存部隊の戦士が進言した。
「むっ、本質とは？」
「テイルブルーとは破壊神の名高き修羅。もはや、女という存在も超越されているのかと」
　なるほど、女性と女性でなければ百合とはいえない。
　人間と隕いん石せきを並べてはい、これで百合ですよね、と言ったところで、誰だれもが「えっ？」となるだろう。
　一見納得のいく理由だが、それでもティラノギルディの顔の険は解けない。
「見み紛まがうはずはない……俺は百合属性ガールズラブの頂点を極めたのだぞ」
　レッドの映像で、一時停止をする。
「信じられないことだが……レッドが輝けば輝くほど、百合オーラが消失してゆくのを感じる」
「幼いからではないか？　テイルレッドは」

　トリケラトップギルディが「そろそろいいっすよね」と言わんばかりに意見を挟む。
「百ゆ合りに年齢など関係ない！　それは貴様もよく知っておろう、トリケラトップギルディ‼」
「いや、全く知らぬが」
　この副官は何な故ぜこうも、とりあえず大将のメンツを潰していくスタイルなのかは知らないが、一応これでちゃんと隊が成り立っているらしい。
　そういえば他の死の二菱ダー・イノ・ランヴアスのメンバーの姿が見えないが、突っ込んだ艦の中で未いまだに待機しているのだろうか。
「何故だ……何故、テイルレッドからは、微み塵じんも百合の息吹を感じぬのだ……⁉」
　ティラノギルディは用意された椅い子すに座り込んでしまった。
　あれほど見事なツインテールがそろい踏みしていながら、百合度が薄いとは……。
　期待が高かっただけに、その落差も激しい。
「ティラノギルディ様」
　あまりにもティラノギルディが無念そうなのを見かね、一体の戦士が映像に残っていない事実を伝えようとする。
「テイルブラックは……ダークグラスパー様であった折、テイルレッドとその……ちゅ、ちゅーをしたと……誇らしげに語り聞かせて下さいましたが」
　ぽっ、と頬ほおを紅潮させるように身をよじる戦士。
「ぬうう、ちゅーとな⁉」
　ガタッと大音を立てて椅子を倒し、勢いよく立ち上がるティラノギルディ。
「そ、その映像はないのか……⁉」

「は。残念ながら、ダークグラスパー様が撮影をお許しにならなかったとのことで……」
　本人はエレメリアンに裸を見られたくないためそうしたのだが、エレメリアンたちにすればそれは別にどうでもいいからレッドがちゅーされている映像だけ見せて欲しかっただろう。
「くっ……見たい！　見たいぞ！　貴様も見たかろう、トリケラトップギルディ!!」
「いや、そんなには……」
　副官のリアクションが芳かんばしくなくともめげないほど、ティラノギルディは願望に猛たけっている。
「ようし、我わが死の二菱ダー・イノ・ランヴアス、貴様等にその実力を見せるいいチャンスよ」
　ホールの戦士たちをぐるりと見回す。
　一度失った、この者たちの覇は気き。そして、不動のカリスマ。
　それをティラノギルディが与え、そして手にするチャンスがやってきた。
「テイルレッドと他のメンバーをちゅーさせる……それが我われら精鋭戦士の最初のミッションだ！　とくと見るがいい!!」
　何と！　まさか！
　驚きよう愕がくのざわめきがホールに広がる。確かにそれを見せつけることができれば、この未いまだ消沈が抜けきっていないメンバーたちと死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの繋つながりは、確固たるものとなろう。
　だが、戦士たちはツインテイルズの実力を知っているだけに、それがどれほど困難なものか考えるまでもなく理解している。
　特に、レッドにブラックがキスをしたのを目撃したブルーがその後どういう慈悲無き闘神と化したか、彼らは見ているのだから。

　そんな反応も想定内とばかりに、ティラノギルディはにんまりと笑った。
「トリケラトップギルディよ！　あの二体を呼べい！」
　マントを翻ひるがえして右腕を突き出す。
「奴やつらならば、この作戦、見事成し遂げよう─フッフッフ」
　電話というアナログな方法で、トリケラトップギルディは一応言われた通り部下を呼び出したのだが───。
「ティラノギルディ殿よ。伝えたが─買ったゲームがバグ山盛りで先に進めぬため、公式でパッチが配布されるまで一歩もＰＣの前から動くわけにはいかぬらしい。隊長の命とはいえ、どうかご理解をいただきたいと涙ながらに訴えてきたが」
「何な故ぜ与えられるのを待つ！　パッチなど己が手で作れい！　……もう一体はどうした!!」
「アニメが野球の延長で録画を失敗しないか心配なため、ずっと番組表を見つめていると……」
「追跡録画では不安だというのか、惰だ弱じゃくな!!」
　部下からの深き人望に肩を震ふるわせるティラノギルディ。
「……いいから今すぐ呼べい！　俺の命令が聞けぬはずがない!!」
　トリケラトップギルディは溜ため息いきをつくと、受話口を手で隠して小声でもう一度電話した。
「すまぬ……いや、だからな…………うむ、わかるが…………仕方がない、これは私からのお願いだ。…………そうか、行ってくれるか……」
　何か聞いてはいけないフォローが聞こえた気がするが、ひとまず、ミッション遂行のメンバーは確保できたようだ。
「待っておれ、ツインテイルズよ……!!」
　拳こぶしを握りしめるティラノギルディに、トリケラトップギルディが淡々と補足をした。

「だがティラノギルディ殿よ、出撃自体はやはり明日にしてくれと」

　これまででもっとも戦闘力が高く、もっとも不安度も高い部隊の合流に、現メンバーたちは玉砕していた方がましだったのではないかと思い始めていた。

第二章　ツインテールを奪い合うのですわ。

　体育祭を明日に控えた土曜日。陽よう月げつ学園高等部も、校門からグラウンドまでの飾り付けが賑やかになっている。土曜日に登校し、ツインテール部の部室にいるのは理由がある。
　本日は九月一五日。ツインテール部顧問、桜さくら川がわ尊みこと先生の誕生日だ。
「…………」
　皆、一様に押し黙っている。トゥアールと愛あい香かさえも、何と今日はまだ一度もボケツッコミ＆デストロイを見せていない。
　この空気……お経が聞こえるとまでは言わないが、木魚がポコーンと鳴る音ならぎりぎり聞こえてきそうだ。

　無音すぎる――……。
　誕生日って、友達に囲まれていても、ここまで厳げん粛しゅくな日だったっけ……。

　俺と愛香、トゥアール、慧え理り那なは長テーブルの椅い子すに腰掛け、虚こ空くうを見つめて心を宇宙と一体化させている桜川先生にかける言葉を探していた。
　まず、ハッピーバースデーは禁句。ハッピーではないから、という本人の意志に基づいた、とてつもなく簡単な理由だ。
　それが禁止されたということはつまり、誕生会も禁止。
　先月の愛香の誕生日のように、喫茶店を貸し切りにしてお祝いするなど以もつての外ほかだ。
「み、尊さん！」
　トゥアールが立ち上がり、白衣のポケットからにゅるんと立方体の箱

を取り出した。

　その箱は空気に触れると風船のように体積を増すらしく、最後には人間大の直方体の箱に変化した。

「別に特別な日ではない今日ですが、いつも年とし増まツインテールな尊さんに私から労ねぎらいのプレゼントです！」

　ラブソングのように耳を優しく撫なでる言葉を紡つむぎ、トゥアールは桜川先生に笑いかけた。

　箱が開くと……中からは、細身だがおそらく男性型であろうマネキンのようなロボットが姿を現した。

　さらにトゥアールは、桜川先生の前に自身のノートＰＣを置いて、画面に写真のカタログソフトのようなものを起動した。

　かっこいい男性や渋いおじさんの写真がずらっと並んでいる。

「さあ、好みの男性を選んでください！　顔を選んでクリックすると、あのロボットにデータが転送されて寸分違たがわず同じ顔になります！　その次はこちらの宣材写真一覧から男性声優さんの声を選んでください、若手から大御所まで各種取り揃そろえています」

「……するとどうなるんだ……？」

　ロボットよりロボットのようにぎこちない動きで、桜さくら川がわ先生がトゥアールに向き直る。

「尊みことさんの好きな台詞せりふを言わせられるんですよ！　それこそ『結婚しよう』とかプロポーズの言葉もよりどりみどりです!!」

「ありがとう……。だが、まだ法が整備されていないこの国では、ロボットとは結婚できないからな……」

「…………ソウデスネ……」

　トゥアールも「アホか！　なんだこの大がかりな悪ふざけは!!」といったツッコミこそ欲しかったのだろうが、砂漠のように乾いた笑顔の桜川先生に礼を言われ、それ以上何もできずに力尽きてしまった。

誕生日プレゼントも駄目めか……。
　というか、ロボットと結婚できる法律が可決されるのには、あと何世紀かかるのだろう。
　どうせ聞こえても聞こえなくても同じだと、小声とはいえ愛あい香かとトゥアールと慧理那は桜川先生の目の前で作戦会議を始めてしまった。
「すみません皆さん、わたくしも家で他のメイドの方々と色々話したしたのですが……素敵な案は思い浮かばなくて」
　愛香は覚悟を決めたように立ち上がり、
「あの、あたしたち、本当に桜川先生のために何かしたいんです。いつもお世話になっているお礼ですから、何でも言ってください」
　いつものお礼。さっきのトゥアールもそうだが、桜川先生が落ち込んでいるのを何とかしたいという気持ちは、みんな一緒だ。
「そーじはあたしのツインテールに触れば何とかなるから大丈夫ですけど、桜川先生はもっと色々と試していいと思います」
「愛香さんってほんっとあれですよね、私以上に自分の欲望に正直なメスですよね」
　メスのような切れ味の手刀をトゥアールに浴びせる愛香を見ながら、桜川先生はアンニュイに呟つぶやいた。
「…………私も観み束つかが婚こん姻いん届とどけにサインしてくれれば元気になるぞ、津つ辺べ……」
　話し合いが終わってしまった。
　いや、あえて婚姻届以外の別のアプローチを考えることが今日の話し合いの骨子か。
　むろん、俺はツインテールを見たり触る以外に体力を回復する方法がないのは議論の余地がないことだが。
「窮きゆう鼠そ猫を噛かむ、と言いますが……これは人間ならば、窮年

とし増ま童貞を喰くう、と置き換えることができます。尊みことさんがこのままマックスまで追い込まれるのは、私たちにとって相当な脅威となるのです」
　トゥアールが腕組みで愛あい香かに何か呟つぶやいている。
「男っ気がなかった年増が後天的に女好きになるパターンも多いですから、今の追いつめられている尊さんに女性的なアプローチは危険です」
「ふーん、よくわかってるんだ、トゥアール」
「何ですかその含みのある言い方は世間一般論じゃないですか女性的なアプローチとは無縁の愛香さんだからそう思えるだけで!!」
　愛香はトゥアールを吹き飛ばしざま、意を決したように桜さくら川がわ先生に問いかけた。
「あの、桜川先生は、どうしてそんなに結婚に焦るんですか？　あたしたちの年で言うのも説得力が無いかも知れないですけど、桜川先生はバリバリ働いているんですから、今の時代、そこまで焦らなくても……」
　桜川先生はやや表情を和やわらげて微笑ほほえみ、
「夢だったのだ」
「……夢？」
　全員を代表するように、俺が聞き返す。
「遅くとも、二十代中には結婚し、家庭を持っていると。小さな頃ころからの夢だった……子供っぽいか？」
「いいえ、素敵じゃないですか！」
　素直に共感する愛香。
　そこで終わっておけば俺たちも一層この人を笑顔にしてあげたい、と頑張れたはずなのだが……桜川先生は、見る見る間に暗黒フェイスに戻り始めた。
「だが夢とは、あの太陽のようだな……。遠くから眺めている分には温かく綺き麗れいだが、近づくにつれ身を焦こがしていき、やがて焼き尽

くされてしまう……」
　やばい。これはやばい。

「──話は聞かせてもらったぞ」
　暗黒の波動を放つメイドさんの後ろに、黒いフリフリ衣装の少女が立った。
「……イースナ⁉」
　善いい沙すな闇あん子こ状態のイースナがいつの間にか現れ、慈いつくしむような目で桜川先生を見ている。
「今日は一四時から大手眼め鏡がねメーカー社長との対談じゃが、それまで時間があったのでな、立ち寄ったのじゃ」
　……ドアも開かず、ロッカーの転送装置も使わず、どこから入ってきたというのか。
　床のリノリウムのパネルが数十センチ四方の正方形型に一か所ずれているのを発見してしまったが……横に控えていたメガ・ネが、「あ」と漏もらしてすかさず元に戻しにいった。
「あんた、またそーじにエロゲーやれとか言うんじゃないでしょうね……」
「それともまた三〇連発とかのエロメール攻撃ですか？」
　警戒心丸出しでにらむ愛あい香かとトゥアールに、不敵な笑いで返すイースナ。
　メールはエロくはなかったような気がするが……。
「違う。わらわはアイドルじゃ。ふさぎ込んだ者を元気にしてあげられる武器──歌がある‼　ちょうど新曲の完パケディスクを持ってきたゆえ、特別に先行公開してやろう‼」
　がしょんがしょんと歩いてきたメガ・ネが、腰のお道具箱……もとい、収納ケースをスライドさせてイースナのＣＤを探し始めた。

「えーっと、どこやったっけなあ。まったくイースナちゃん、何でもかんでもウチに押しつけるから……」
　メガ・ネの収納箱は異空間に繋つながっていて、収納スペースは理論上ほぼ無限大らしい。原理はトゥアールの白衣のポケットと同じだ。
　あれでもない、これでもない、と取り出しては戻す繰り返しの最中、俺の持っているものと全く同じ柄のトランクスが見えた気がするが……気のせいだろう。
「あった、これや」
　レーベルプリントもされていない白無地にサインペンでタイトルや収録日の情報だけが描かれたディスクが、不ふ織しょく布ふのケースに収まっている。
　メガ・ネはやれやれとばかりにそれを取り出し、ディスクだけをもう一度箱の中に戻した。どうやら、中にＣＤプレーヤーも入っているらしい。
「よいしょっと」
　さらに収納箱の中から、黒いイヤホンを引っ張り出すメガ・ネ。桜さくら川がわ先生に差し出した。
　続けて、一組、二組……部屋にいる人数分のイヤホンを収納箱の中から出していき、順番に俺たちに手渡してくれた。
「俺たちも一緒に聞くなら、スピーカーでよかったんじゃないか？　この部室、完全防音だぞ」
「鈍いのう総そう二じは、わらわたちがこうするためじゃ」
　俺が受け取ったイヤホンの片方を自分で持ち、右耳につけるイースナ。
「ほれ」
　そして、もう片方を差し出す。俺がそれを受け取ろうとした瞬間、
「愛香さん！　愛香チョップです!!」

　トゥアールの凛りんとした声の直後、ギロチンが落下してくるような風切り音が響き、愛香の手刀がイヤホンを切り落とした。
「ああっ……あんたがタイミング合わせて変なこと言ったせいで、あんたの命令であたしがやったみたいになってるじゃない!!」
「まさにその通りです!!」
　もはやトゥアールは愛あい香かの行動を先読みまでし始めたらしく、テーブルを飛び越えて愛香が振りかぶった瞬間にアテレコするまでに呼吸がピッタリだ。
「ぐぬぬ蛮族め、恋人イヤホンを邪魔するとは、何と無粋な!!」
「恋人じゃないでしょこのストーカーアイドル!!」
　相反する言葉のはずが、それを併せ持ったイースナにとってはプロフィールにも等しい造語だった。
　はっとして、愛香がイースナに耳打ちする。
「だ、大丈夫でしょうねあれ、失恋ソングとかだったら桜さくら川がわ先生余計に落ち込むわよ!?」
「たわけ、わらわは暗い歌はＮＧとしておる」
　俺に歌やそのタイトルで邪悪なメッセージを送ってきたりはしていたが……。
「あれは、お母さんへの感謝を歌った歌じゃ!!」
　胸を張って、新曲のコンセプトを簡潔にまとめるイースナ。
「なんやもー、照れるやないの」
「なぜ照れる!?　おかんか貴様!?」
　いつもと違い「おかんだったのか」に近いニュアンスで叫ばれたいつもの言葉。
「ち、違うぞ、若年層のファン獲得のため、初めからキッズソングとして制作したのじゃ！　ゆえに一番身近な存在であるお母さんへの感謝を歌って、あわよくば母親の票も狙ねらったのであってじゃな――」

　慌てて言い訳をするイースナを、メガ・ネはそれは嬉うれしそうに見つめていた。
「ウチはもー何回もリピートしたからなあ～。今回イースナちゃんが作詞したやろ？　ええ歌詞や、『銀色の頭をぽんぽん叩たたく、ありがとうのかわり』──」
「それは白髪の暗あん喩ゆじゃ!!」
　本当の親子のように戯たわむれる二人を見て、俺も嬉しくなる。
　桜川先生は、根は優しいアイドルの心こもった歌を体に染しみ渡らせ、元気に──。

「────私も、今いま頃ごろお母さんになっていたはずなのにな……」

　なっていなかった。
「一緒にお出かけ……シュリンクされたカラフルで肌色な箱がいっぱい、どれにしようかな……延期したから、思い入れがあるこれにしちゃうよ？　お母さん……」
　桜川先生は、歌詞にあったらしい、親子でお出かけする部分を口ずさんだ。
　キッズソングなのにイースナの好きなキッズお断りアイテムが歌詞に垣かい間ま見える気がするが、気のせいだろうか。
　お出かけか、と目を細める桜さくら川がわ先生。
「お嬢様は特撮番組の玩おも具ちやをかかさず買われるから、私も当然ついて行くわけだ。だいたい土曜日なんだな、新商品が発売されるのは……」
　確かに慧え理り那なは、土曜日の午前中は買い物だということが多いな。

「お父さんと子供……お母さんも一緒になって、川の字になって歩く家族が、土曜日のおもちゃ屋さんにはいっぱいなんだ……。子供は『お父さん、ありがとう』なんて言いながら満面の笑みさ」
　情感のこもった語り口で、俺もすぐに週末のおもちゃ屋さんを脳裏に描けた。
「そんな光景を毎週毎週見ながら、ふと思うんだ。『私は何のために生まれてきたのだろう』って……」
　何で誕生日に生まれてきた意味を問いかけているんだ、この人は──。
　歌を聴き終わり、イヤホンを外す桜川先生と慧理那。幸い、慧理那には今の慟どう哭こくは聞こえていなかったらしい。
「観み束つか、お前が私と結婚してくれればこの悲しみもなくなる。私とお嬢さまとお前で川の字になって歩いて、土曜日におもちゃ屋さんに行こう」
　またも変則的なプロポーズを受ける。
　そろそろプロポーズ語録がいっぱいになってきたんだが。
「わあ、それは素敵ですわね！　わたくし、観束君と　『大人の』　おもちゃ買いたいですわ!!」
　喜んでるけど慧理那……桜川先生はお前を、川の字の真ん中の棒にしようとしてるんだぞ。
　お父さんありがとう、のポジションだぞ。
　あと、途中でトゥアールの声がかぶった気がするけど、偶然だろうか。

「……つ、次は婚活ソングでも作るゆえ、元気を出せ……！」
　変身前のようなたどたどしい口調でフォローするイースナ。もっとも元気や覇は気きからはほど遠い少女に慰なぐさめられても、桜川先生の生気が戻る気配はない。

トゥアールが、自分の胸を叩たたいてぽよんと揺らす。
「尊みことさん、何か他に欲しいものがあったら、私作りますよ？」
「テイルブレスをくれ……。私も変身したい……。ツインテイルズになれば、きっと婚こん姻いん届とどけを受け取ってくれる者も現れる……」
俺とメガ・ネ以外の前例を鑑かんがみるに、世間に評価されようと張り切れば張り切るほど思わぬ方向に行ってしまうから、おすすめはできないのだが……。
桜さくら川がわ先生が変身できたらそりゃ頼もしいけれど、テイルブレスの核コアとなるツインテール属性がない現状では、これ以上テイルブレスを作ることはできないからな。こればっかりはトゥアールでもどうしようもないことだ。
「だが、ありがとう、みんな。こんな面倒な大人に付き合ってくれて、私は幸せだよ……」
これだけ沈んでいても俺たちのことを気遣ってくれる、やはり桜川先生は立派な大人だ。何とか、元気になる方法を見つけてあげたいが……。
もう、時間が解決するのを待つしかないのだろうか。それこそ、三〇歳になれば心境も変わるかも知れないし。一年ってかなり長いけど。

時間が解決……か。
絶望が伝でん播ぱするツインテール部部室で佇たたずみながら、明日の体育祭に思いを馳はせた。

◇

薄暗い洞どう穴けつ。

切り立った天井から、涙の一ひと雫しずくにも似た点滴が落ちる。反ひ響びく音はそれだけで、蝙こう蝠もりの羽音すらそこにはない。
　重々しく静せい寂じやくを守る洞穴に、悲痛な呻うめき声が反響し始めた。
「ううう、ううううう～」
　暗くら闇やみの中、もがくように蠢うごめく影。伸ばされた腕が、何かを求めるように宙を彷徨さまよう。
　そして──。

「お注射!!」

　縋すがるような叫び。
　顔面に滝のように汗をしたたらせ────スワンギルディは跳ね起きた。
「夢、か……」
　そして、すぐに我われに返る。
「……！　いや、そもそもなぜ私は……」
　息を整えながら、記憶の糸を手た繰ぐってゆく。
　自分は、テイルレッドに尋常なる決闘を申し込み──そして、敗北した。
　正々堂々、いささかの遺恨も残さぬ晴れやかな決着であった。
　しかし、地に伏した自分に、思いもよらぬ悪夢が襲おそいかかったのだ。
「あ、あああ……」
　両手で頭を抱かかえるスワンギルディ。天使の輪を模したような頭飾りが、小さく震ふるえる。
　テイルブルー。自分が最後に見た形相が脳裏にまざまざと蘇り、全身

を恐怖が包んだ。
　圧倒的な力に臆おくしたのではない。
　単純に、目が合って、あ、やべえ怖こええ、と思ってしまったのだ。
　人間からすれば異形の怪人。姿を見るや離散されるが運命さだめの自分たちエレメリアンが、よもや人間の形相に恐怖しようとは……。
　スワンギルディの背後で、弾けるような微音。
　声を上げんばかりに身体からだを震わせ、背後を見やる。点滴が地面を叩たたいただけのことだった。
「くうっ……」
　握り締めた拳こぶしをじっと見つめ、スワンギルディは力なく項うな垂だれた。
　敗残者ではなく、逃亡者の気分だ。
　今にもテイルブルーが、後ろから肩をポンと叩いてくるのではないか。
　そんな恐怖に支配され、些さ細さいな雫しず音ねにさえも居い竦すくまってしまう。
　小石が踏み擦こすれる音が響き、スワンギルディは洞どう穴けつの入り口を見やった。

「相当うなされてたみてえだな！」

　広がった翼のみならず、その存在そのものが、とてもこのような暗く狭い洞穴になどおさまらない、大きな戦士。スワンギルディは、その容か貌おを確かに一度見ていた。

　死を覚悟した瞬間、眼前を残影のごとく疾はしった紅あかき翼。
　ツインテイルズをも欺あざむく手て練れんによる、一瞬の救出劇──テ

イルブルーのエグゼキュートウェイブからスワンギルディを救ったのは、フェニックスギルディだった。
「……貴方あなたが、私を……。何な故ぜ、私を助けたのです……？」
　しごく冷静に問いかけるスワンギルディ。
「俺様は、正義の味方だからな」
　フェニックスギルディは、これ見よがしに誇るでもなく、当然のように応こたえた。
「何を……？」
「同族だからってわけじゃねえ。たまたまお前らの戦いを見つけて、さあどうしたもんかと思った時……青の姉ちゃんが乱入したのが見えたんでな！」
「ぐ、偶然の通りがかりであれほどの離れ業わざを⁉」
「いや、細かいのは苦手なんでよ、苦労したぜ。さすがにテイルレッドは誤ご魔ま化かしきれたか微妙なとこだがなあ。ま、俺様の性分だ‼」
　陽気な口調とは裏腹、炎のようにほとばしる闘とう気き。これほどの戦士が、自分のような駆け出しを助ける理由が見当たらなかったが……それで納得がいった。己が信念ゆえ、ならば。
「名を……教えていただけませぬか」
　待ってましたとばかりに、フェニックスギルディは全身大振りで見み栄えを切った。
「ポニーテールは世界を繋つなぐ架け橋！　俺様は──フェニックスギルディだ‼」
「フェニックスギルディ⁉　……まさか……ダークグラスパー様が征せい伐ばつされたという、裏切り者のエレメリアンか⁉」
　スワンギルディは咄とつ嗟さに立ち上がったが、すぐに力なくよろめき、壁に手をついた。
　裏切り……何を以もつてそう咎とがめるのか、自分にはもうわからな

い。尊敬するダークグラスパーもまた、今はテイルブラックとしてその立場にあるが、未いまだに彼女を憎むことなどできない。
「残念ながら、セーバツはされてなかったみてえだがな！　あの姉ちゃんとは、確かに顔見知りだぜ!!」
　飄ひよう々ひようとした佇たたずまいでスワンギルディの視線を受け止め、フェニックスギルディは軽く腕を回した。
「──どうする？　俺様と戦やるか？」
　視線の交錯は、長くは続かなかった。スワンギルディが、崩れ落ちるように再び岩の上に座したからだ。
「命の恩人に刃やいばを向けるわけにはいきません。貴方あなたの立場が何であれ……」
「ほおう、義理堅いな。ドラグギルディの弟で子しなだけはあるぜ!!」
　戦いの中で、テイルレッドに宣した宿因をも、しっかりと聞かれていたらしい。
「お前さん、まだツインテイルズに挑戦する気はあるかい？」
「……え……」
「ま、あってもなくてもいいぜ。一つだけ、アドバイスしてやるよ」
　圧倒的上位の強さを持つ戦士でありながら、兄貴分のように気さくに語りかけるフェニックスギルディ。
「ドラグギルディの仇あだ討うちで頑張ってきたんだろうがよ……並の相手ならともかく、テイルレッド相手にゃ復ふく讐しゆう心なんかじゃ太刀打ちできねえよ!!」
「わ、私は並の気持ちで修行をしてきたわけではありませぬ！」
　スワンギルディの弁明を遮さえぎり、フェニックスギルディは続けた。
「テイルレッドを見てみな！　ツインテールのこと以外、まるで考えちゃいねえ。強いはずだぜ!!」

「……確かに……」
　復讐心などでツインテールを見るな──。
　全く同じように自分を熱く叱しつ咤たした幼子の顔を思い返すスワンギルディ。あの可愛かわいさでありながら、何と熱く強き信念か。
「ドラグギルディが負ける相手ってのが、俄にわかには想像できなかったんだがよ。直接会ったら、なるほどなって思ったぜ。あいつは……テイルレッドは、ツインテールを出し切ったから勝てたんだろうってな」
「テイルレッドが……」
「技術とか能力とか、ちゃちな小細工は関係ねえ。あいつらはツインテールとツインテールをぶつけ合ったんだろうよ」
　フェニックスギルディ自身もまた、そのツインテールをぶつけられたからこその言葉だった。
「私は……ツインテールをぶつけてもらうまではいけませんでした」
　自じ嘲ちようするスワンギルディに、語気を強めるフェニックスギルディ。
「エレメリアンは精神生命体だ。心を強くするほどに強くなる。復ふく讐しゆう心だってもちろん支えにはなんだろうよ。だがよ、何よりも自分を強くすんのは……結局、属性力たましいだろう⁉」
　まさしく。駆け出しであろうとエレメリアンならば誰だれもが心得なければならないその心理を、しかし貫き通すことのなんと難しいことか。
　いつから自分は、看護服へ思い焦こがした、あの日の気持ちを薄れさせてしまったのか……。
「俺様も、五大修練なら二つっぱかし修了クリアはしたぜ‼」
　消沈するスワンギルディに、フェニックスギルディはテレビゲームでも終えた程度の気軽さで衝撃の事実を告げた。
「何と⁉」

「どうだ、教えてやれなくもねえが。やってみるか!?」
　スケテイル・アマ・ゾーンすら修了できない身でありながら、さらなる修羅業を加積する。もはや、血を吐く身を斬きるという次元ですら済まず、確実なる死の只ただ中なかに身を常在おくこととなろう。
　しかし、スワンギルディの返答には瞬きの逡しゅん巡じゅんをも要としなかった。
「――どうせ、一度死んだ身……！　むしろ、残りの五大修練全てまとめて修めてみせましょうぞ!!」
　フェニックスギルディは屈託なく笑うと、力任せにスワンギルディの手を取り、立ち上がらせた。
「よく言った！　そうだ、死ぬ気になりゃ何だってできらあ。俺様も、自慢じゃねえが死ぬほど死んでっしな!!」
　ともすれば卑ひ下げに聞こえる軽口の中には、信念を以もつて死に抗あらがう不滅の闘志が宿っていた。
　こう在りたい。ここまで到達したい。心の底からそう思わせる遥はるか高みの戦士。
「……一つだけ、お聞かせください。貴方あなたが私を助けたのは、本当に性分からだけなのですか……？」
　その先せん達たつに、スワンギルディはあえて本心からの疑問を投げかけた。
「……親ダ友チがな、白い翼の似合う綺麗イカした奴やつだった」
　薄暗い洞どう穴けつの中で、フェニックスギルディはその先にある遥はるか青空を振り仰いだ。
　そして、はぐらかさずに聞かれた問いに答える。
「偶然見かけただけのはずのお前さんにも、なんか白い翼が見えた気がしてな……。ちっとばかし、運命を感じちまったってわけよ」
　これだけの戦士が、親友と呼ぶ者と同じ翼を自分の背に見てくれた。

それだけで十分だ。目の錯覚であろうとなんだろうと、可能性を見て取ってくれたことに変わりはない。
　この先の荒行に身を投じる覚悟は、確かに決まった。

　多くの強者に師事し、そして見送ってきた戦士、スワンギルディ。最後の師を得て、最後の挑戦が始まろうとしていた。

◇

「宣誓。我われ々われ生徒一同は──」
　グラウンド正面の登壇台の上で小さな体をうんと伸ばし、慧え理り那ながが選手宣誓を行う。
　真っ白な体操着と赤い鉢はち巻まきで、いつもの幼くも凛り々りしい彼女のイメージはがらりと変わる。皆、背筋を伸ばしてその淀よどみない言葉に聞き入っていた。
「スポーツマンシップに則のつとり、正々堂々、最後まで全力で臨むことを誓います」
　まさしくスポーツマンシップに溢あふれた慧理那のツインテールが、凛々しい宣誓を音おん叉さのように響かせ、グラウンドに並ぶ生徒たちの五体へと活力を与える──。

　今日は、陽よう月げつ学園高等部の体育祭だ。
　赤・青・黄・白の四組に分けるのはオーソドックスだと思うが、全校生徒の人数が多いため、参加必須の競技は数種類で、あとは自己申告の自由参加式となっている。
　プログラムを時間通りに終わらせるために自由参加競技は当日応募の先着順だが、要するに率先して競技に参加する意欲のある生徒が多い組

ほど、総得点を多く獲得できる可能性が単純に大きく上がるわけだ。この方法は、自主性を重んじる校風がよく表れていると思う。
　俺たちのクラスは青組。慧理那は赤組だ。
　奇しくも、制服のタイやリボンの色と同じになったが、愛あい香かにとっては変身後のパーソナルカラーでもあるため、より馴な染じみは深いだろう。
　俺も愛香も、子供の頃ころから体育祭は燃えるタイプだ。
　クラス分けは三年間固定とは言え、初等部も中等部も俺と愛香は同じクラスだったため直接戦ったことはない。だが、この高等部では個人総合点で上位者を表彰する。これで、愛香と勝負してみるつもりだ。
　高校生になって初めての体育祭。燃えてきたぜ。

　慧え理り那なと入れ替わりで、そのお母さんである神しん堂どう慧え夢む理事長が登壇する。
　これまで危き惧ぐしていた、既知の仲である俺の母さんとの再会が先日行われてしまい、色々あったが……マジで、この波瀾に満ちた数か月の中でも最強レベルで色々あったが……全てを語り合い、慧理那と理事長の母娘仲は以前よりも良くなったという。
　理事長に自分がテイルイエローであるという事実を明かしたと、後で慧理那本人から知らされた時はさすがに仰天したが──結果的に、それがプラスに働いたのだろう。
「──ところで……」
　生徒への激励も一段落した折、理事長がより凛り々りしく声音を正した。
「家庭の事情で恐縮ですが……わたくし、娘の慧理那の婿むこを探しておりますの。さりげなく、この学園の生徒の皆さんの活躍も見させていただいておりますが……」

唐突な話題の切り出しに、俺は嫌な予感を隠しきれず身構える。
嫋たおやかに微笑ほほえむ理事長。やおらざわめき出した千人からの全校生徒の中、ピンポイントで俺を捜し出したかのようにこちらへと視線を向け、とんでもないことを言い放った。
「例えば、一年の観み束つか総そう二じ君……。とても誠実で、頼り甲が斐いのある殿方です。わたくし……彼ならば、と思っていますわ」
理事長オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!
俺は声こそ上げなかったものの、胸中であらん限りの絶叫を響かせた。
婿候補がいるという発言のみに収まらず、それが同じ学校の後輩生徒であるという大暴ばく露ろ。
男女入り交じっての絶叫がグラウンドを激震させた。
「何だってえええええええええ!? 見損なったぜ観束、てめえツインテールにしか興味がないと思って……あああああツインテールじゃねえか会長!!」
「登校中に怪しい場面何度か見たけど、まさか親公認だったなんて……そりゃないぜ!!」
「私の慧理那ちゃんが大人の階段昇っちゃったの!? いや、それはそれで妄想が捗はかどるんだけど……！ ねえ、ちょっと詳しく教え……」
「ちょっと愛あい香か何やってんのよ!!」
四方八方から罵ば声せいを浴びせられ、たまに何な故ぜか愛香がクラスの女子に責められ、件くだんの生徒が俺だと認識した他クラス他学年の生徒もこちらへと向き直り責め立ててくる。
やばい、こりゃ完全に全校生徒に顔と名前を覚えられちまったぞ……！
ただでさえソーラの編入の時に、ツインテルエンザって奇病で休んだ

生徒って、担任の樽たる井い先生が名指しで暴露しちまったから……覚えてる人は覚えてただろうに……!!
　訂正を求め懇願の視線を向けると、理事長は満足そうに微笑み、さらにだめ押しをした。
「今日の体育祭で、わたくしはその適正を改めて見定めさせてもらいます。婿むこ殿が最優秀選手になったその時は、候補から一気に二段階ほど格上げをするつもりですわ」
　ランク制度だったのか、婿って……。
　おかしい。これは絶対におかしい。俺の人生に関わる大事が、俺の意志とは関係なく、事前に同意確認もなく、周到な計画性と共に進行していく。
　登壇台の横でおろおろしている慧え理り那なを見れば、理事長の独断なことは一目瞭然だ。
　さすがに看過できることじゃない。俺だけならともかく、普段は真ま面じ目めで尊敬される生徒会長として頑張っている慧理那まで、皆の奇異の視線に晒さらされるような発言をするなんて。
　後で理事長に会って、あれは冗談だったと閉会式にでもしっかりと訂正してもらわないと。普段凜りんとした理事長の後出しジョークなら、皆も微笑ほほえましく思うだけで済むだろう。
　だが、そんな俺の思考を先読みしたかのように、理事長は大真面目に続けた。
「わたくしはふざけてこのようなことを言っているのではありません。婿選びには信念を懸けておりますの。ここまで言って観み束つか総そう二じ君が娘のために本気になってくれないのであれば、全てはわたくしの責。娘の貴重な青春時代に水を差した詫わびとして、このツインテールを美容室で切ってきますわ」
「何ッ……!?」

周囲の詰問など耳の産毛にも触れる前にはじき返し、俺は理事長の宣言に戦せん慄りつしていた。

……悪ふざけなんかじゃない、理事長は本気だ。その真しん摯しなツインテールから、俺は理事長の言葉の真意を悟った。

慧理那を助けるための方便だったとはいえ、理事長は俺を慧理那の婿と認めている。

それを今一度確かめようとする理由は、一つしか考えられない。

──ツインテイルズのことだ。

俺は理事長にかつて、慧理那が大切なことを為なそうとしていると訴え、それを支持してもらった。だが、その大切なことが、命を懸けて異形の怪物と戦うことなどと、想像がつくはずもない。先日地下基地で俺たちの戦いを見て初めてそれを知った理事長からすれば、俺はそんな危険な戦いに大切な娘さんを巻き込んだ許しがたい人間だ。

そして、慧理那の正体を知ったということは、俺が世間を騒がせるヒーロー・テイルレッドだとも知ったのだ。娘を任せるといった男がこれほどの大切な秘密を隠していたのだ……信用が揺らぐのも、当然のことだ。

ツインテールを重んじる神しん堂どう家の当主である自分が、改めて問う。

慧理那を戦いに導いた俺が、これからもそのツインテールを守り続けられるのかと。

娘を任せられるのかと──。

それが、理事長が自分のツインテールを懸けて投げかけてきた問いなんだ。

ならば俺は、全力でそのツインテールを受け止める。

理事長が本気を見せろというなら、俺は全力で優勝を狙ねらいに行く。

それで許されることではないとわかっているが、理事長に俺の誠意を伝えるには、それしかない。
媚むこ発言であれほど沸わいた生徒たちが、あ、理事長髪型変えるんだ、程度のささやかなリアクションしかしていない。
みんな、理事長の言葉を本気だと思っていないのだろうか……!?
後ろを振り向くと、愛あい香かとトゥアールが白目になっていた。さすがだ、二人とも本気を感じ取ったのだろう。
俺は覚悟を決め、拳こぶしを握りしめた。
「理事長！」
俺の渾こん身しんの叫びに、周囲のざわめきが完全に止まる。
「その挑戦、受けて立つ!!」
そして続けた俺のその宣言を起爆剤に、さらなるざわめきが再びグラウンドを包む。
「あなたほどのツインテールだ、気安い覚悟で言ったんじゃないってわかっています……。それでも、ツインテールを賭かけの対象にするなんて、俺は許せない！　あなたの思惑通り俺は全力を尽くし、そして勝つ！　二度と、あなた自身のツインテールを不安にさせないために!!」
理事長が、着物の袖そでで目から下を覆おおい、身体からだを震ふるわせている。俺の覚悟を受け取り、武者震いをしているのだろうか。ツインテールも喜んでいるのがわかる。



　やけに目が潤うるんでとろけているように見えるが、気のせいだろう。
　俺ははっと我われに返る。勢いに乗って大声で言い返してしまったから、さらに悪目立ちしてしまった。もっとも、名指しであんなことを言われたんだ、黙っていたって変わらないだろう。
　そう思ったのだが、ついさっきまで一斉にさすまたで突いてくる寸前だった回りの生徒たちが俺に向ける目が、今はやけに優しい。
「…………本物だったか……」
「やべえ勝てねえ」
「愛あい香か……体育祭終わったらすぐ押し倒した方がいいよ……一刻の猶ゆう予よもないよ……」
　たまにそうでないものも混じっているが、基本的にはみんなから祝福されてしまった。
　ど、どうしたんだみんな……今から競い合うというのに、まるで覇は気きがない!?
「優勝して、会長を幸せにしてやれ……。俺たちには、テイルレッドたんがいる。俺たちみんなが、テイルレッドたんの婿むこ候補だ」
　いや、本人を目の前にしてそんな曇くもりない瞳ひとみで宣言されても……。
　ほんわかした空気になりかけたが、俺の後ろで並んでいた愛香が抗議するように叫んだ。
「理事長！　いくら何でも私情を挟みすぎです！　みんなの体育祭なんですよ!!」
「ですから、その罪はわたくしのツインテールが負いますわ」
　愛香に呼こ応おうするように、トゥアールも猛然と異議を唱える。
「そもそも慧え理り那なさんと慧え夢むさん以外の誰だれにもメリットがないんですから、あんな宣言無効です！　おとなしくトゥアールちゃ

んを全校生徒の前でおすすめして、謎なぞの美少女転校生ヒロインとして再始動リブートさせてください!!」
　二人の不服申し立ても、着物の袖そでで軽く払うかのような優雅さで受け流す理事長。
「お母様！　もう降りてくださいまし！　……皆さん!!」
　無言のまま立ち尽くす理事長が、慧理那の指示で現れたメイドさんたちに連れられて降壇していく。
　入れ替わりで桜さくら川がわ先生が、無人となった登壇台へと向かった。
「そうそう。観み束つかばかりにメリットがあっては、皆もやる気が出ないだろう。もし観束が最優秀選手になっても、二位以下の全校男子生徒は抽選で一名様に私の婿になれる魔法の紙を差し上げよう」
　婚こん姻いん届とどけをかざす桜川先生。またか、と苦笑する生徒たちだが──
「───私は昨日、二九歳になった」
　スピーカーを通じて伝達された何気なくもめでたいはずの宣言に、全校生徒の居住まいがピリっと引き締まる。
「これから私が渡すこの魔法の紙には、昨日までの数百倍の念が込められているので、覚えておくとよい」
　魔法は魔法でも、悪魔の法律・略して魔法、の顕けん現げんしたペーパーだった。
　昨日御年二九歳を迎え、むしろ逆に声に張りが出て怖い桜さくら川がわ先生。
　さらっと登壇してさらっと爆弾発言をし、さらっと去って行った。
　そして、男子たちの気迫が目に見えて変化する。
「───負けねえぞ観束」
「テイルレッドたんに捧げたこの操、女教師に奪われるわけにはいかね

え!!」
「つーかやっぱ会長はお前にはもったいねえ！　二位以下になって桜川先生と結婚しろよ、お前の大好きなツインテールだろ！　誰もが幸せな世界の誕生じゃねえか!!」
　周囲でさんざめいていた祝詞のりとが、怨おん嗟さのユニゾンに変わっていく……!!
　馬ば鹿か野郎……その世界では、理事長がツインテールを切っているんだぞ……!!
　負けられない理由を胸に秘め、俺たちは相対する。
　元より、温情で手加減してもらうつもりは毛頭ない。
　どんな理由があろうと、とにかく全力で体育祭を楽しむ。それで十分だ。
　それが、慧え理り那なや理事長、桜川先生のツインテールを守ることにつながる——。

◇

「お母様！　あれは一体どういうことですの!?」
　競技準備時間、慧理那は慧え夢むを連れて校舎の近くにやってきていた。
　お付きのメイドたちが離れた位置でガードしており、会話を通りがかった生徒に聞かれる心配もない。忌き憚たんのない、親子の話し合いができる。
「では、母も聞きましょう。昨日あなたは婿むこ殿と何回まぐわいましたか？」
　唐突すぎるマザークエスチョンに、慧理那はたじろぐ。質問に質問で返すどころか、質問という名のブーメランを投げたら空気清浄機になっ

て戻ってきたぐらい脈絡がない。
　さすがは大財閥の専属メイドたち。当主の爆弾発言にも眉まゆ一つ動かさずガードを堅持し、各々、耳が巨大化する錯覚を周囲に振りまく程に力強く聞き耳を立てるだけで済んでいる。
「……で、ですからご主人さ……観み束つか君……ご主人様とはまだ……」
　二度言い直し、慧理那はしゅんとしながら答えた。もちろん、それに対する母の叱しつ責せきは厳しい。
「まったく情けない！　昨日は土曜日ではないですか！　ならば七回は必要!!」
「な、ななかい？」
「平日は三回、土日は七回、祝日は字のごとくめでたい日なのですから一〇回は殿方を床とこに誘いなさい！　若いのですからたやすいはずですわ!!」
　おめでたすぎるスーパーノルマをさらりと娘に課すも、当然慧理那は回数と言われてもぴんとこず、床とこに誘うという意味だけをぎりぎり把握して赤面している。
「で、でも……」
「特に昨日は尊みことの誕生日！　あの子も交ぜてあげたのですか!?昨日は尊も一緒だったのでしょう!?」
　慧え夢むはかっと目を見開いた。
「誕生日ならばバースデーケーキの蠟ろう燭そくの数だけ、婿むこ殿には頑張ってもらわなくては！　慧え理り那な、貴女あなた自らアシストに徹するという刺激を味わえるのが、貴女たち三人の関係の強みではありませんか!!」
「ええ、尊を元気づけてあげようと思って、昨日は観み束つか君と色々しましたわ……」

　周囲のメイドたちのスカートが、僅わずかにふわっと持ち上がる。不意のそよ風だろうか。間違っても、昂たかぶった闘とう気きで立ち上がったわけではないだろう。
「ですが、結局尊は落ち込んだままで……」
　慧理那はしゅんとして、自分を恥じるように肩を竦すくめた。
　要するに、答えは「何もなかった」だ。メイドたちのスカートが、へにゃっと下がった。
「あの、お母様……秘密にしていたこと、怒っていますの……？」
　周囲のメイドたちを意識し、最小限の問いに留める慧理那。もちろん、ツインテイルズなのを隠していたことについてだ。
「……まさか。むしろ婿殿には感謝していますわ。慧理那を選んでくれたことを」
　麗うるわしい微笑ほほえみが、偽りなき母心。返す言葉と共に、慧夢は遠くにいる誰かに視線を向けた。
「以前、神しん堂どうの女のツインテールは、殿方に尽くすためのものだと言ったのを覚えていますか？」
「ええ……津つ辺べさんが、それを極められていると」
「そう。そして、婿殿はあの子の内なるツインテールを引き出し、わたくしたちとの家族としての絆きずなをも深めてくださった……。本当に感謝していますわ」
「……あの子……？」
　青空へ吸い込まれていく慧夢の慈いつくしみの言葉。その意味は理解できなかったが、慧理那は焦しよう燥そうのままに念を押した。
「とにかくお母様……わたくし、観束君とは少しずつ仲良くなっていますから、見守って欲しいですわ……」
「母が待ち切れないのです！　孫の顔を見せろとは言いません、まぐわいなさい!!」

「そんな!?」
「確かに……婿殿はわたくしの裸体にも動じず素晴らしい説おし教おきをもたらしてくださる雄々しき大和男子。奥手だということは母も理解しておりますが……」
　総そう二じに絶叫ツッコミされた時の悦楽を思い出したのか、慧夢が表情をとろけさせる。
　その顔は、先ほど登壇時に総そう二じに宣言を受け、着物の袖そでで何とか全校生徒から隠し切った、陽よう月げつ学園理事長のもう一つの顔だった。
「……お母様……」
　慧え理り那なは珍しくジト目になり、母を厳しく射い竦すくめる。温和さと女帝の如き苛か烈れつさを兼ね備えた母親の、血とツインテールを紛まぎれもなく受け継いだ凄すごみの片へん鱗りんを立ち昇らせて。
「はあうっ！　え、慧理那……今の表情は!!」
　突然母がビクリと身を震ふるわせたのを見て、慧理那は後ずさった。
「ふぇぇっ……!?　わたくし、そんなに変な顔しましたか!?」
　慧え夢むはこくりと頷うなずき、優しい母の顔となった。
「フフ……貴女あなたが母を蔑さげすみの目で見やる日が来ようとは……これも婿むこ殿のおかげですわね」
「わたくしお母様を蔑んでなどいませんわ!!」
「未熟者！　黙って蔑みなさい!!」
「えええええええええええ!?」
　一六になって初めて訪れる母の容赦なきしつけに、慧理那は戦せん慄りつする。
「尊敬だけで成り立つ親子関係など砂上の楼閣！　慧理那、貴女が母を愛しているのなら、時に蔑むこともまた愛!!　尊敬と蔑みは表裏一体なのですわ!!」

母は敬愛している。しかし、反対側に蔑みがあるとは。根限りの力で自分の心の畳を裏返しても、慧理那はその事実を確認できない。
競技開始のアナウンスが遠く聞こえ、慧理那はグラウンドを見やった。
「み、観み束つか君……とにかく、頑張ってくださいませ……」
今の慧理那にできるのは、総二の個人優勝を願うことだけ。
それによって全校生徒に自分たちの関係が認められることになってしまうのだが……想像した慧理那は、優等生としての危機感より先んじて、身体からだを駆け巡る痺しびれに酔いしれた。

◇

爽さわやかに青春の汗をきらめかせるはずの体育祭が、色々事情が込み入ってきたが……俺はとにかく参加できる限り全ての競技に参加し、個人優勝を目指す。理事長の挑戦に勝つんだ。
そして、慧理那の仲間としての資格を今度は本当の意味で認めてもらう。
『放送席～放送席～マイクテストで～す』
体育祭実行委員の行動拠点であるテントは、グラウンド正面、校舎側に設置されている。
グラウンド全体をカバーしている外部スピーカーから聞こえてきたマイクテストの声に、何か聞き覚えがあるように思えた。
『体育祭の放送席からは私、前生徒会長の妹、牧もく須す都と波なみがお届けしまーす』
牧もく須す……夏休みにコミケで会ったあの前生徒会長の妹さんか……。
失礼な話ではあるが、彼女を思い出すともれなくセットで彼女の作っ

た同人誌の内容が過よぎる。色々克明に書き込まれた女性向けの一八禁本が……。
　彼女のツインテールに集中して、記憶を改かい竄ざんしよう。
　こちらの方が長さはかなり短いが、ウェイビーにパーマのかかったツインテールはお姉さんと同じだ。熟練の技を感じさせる。いや、同じというのは失礼だろう。長さがかなり違うのに同じ印象を受けるほど、姉し妹まいで錬れん磨ましてきたのだということが窺うかがえる。
　放送席には、桜さくら川がわ先生の姿もあった。陽よう月げつ学園高等部では体育教師でもある桜川先生は、実行委員に協力しているようだ。
　徒競走に参加すべくトラックに向かう途中、愛あい香かに声をかけられた。
「理事長との約束とか関係なく頑張りなよ、そーじ。あんたはやればできるんだからさ。武術だって、本当はあたしより才能あるはずなんだから。そーじが本気出すのは楽しみだよ」
「そういう愛香こそ、中学までに個人別の順位があったとしたら、毎年ぶっちぎりで優勝じゃないか。もちろん今年は個人優勝狙ねらってんだろ？」
「とーぜん。理事長には悪いけど、そーじに負けるつもりないから」
　あと、褒ほめてくれるのは嬉うれしいが、武術に関してはそれは絶対にない……すまん、愛香。俺は野生のＫＵＭＡとか倒せない。
　トラックに並ぶと、陽気なアナウンスが響いてきた。
『第一種目はシンプルな徒競走ですが……注目はやはり理事長の衝撃の宣戦布告を真っ向から受けた、校内でも有名なツインテール好き、〝ツインテルエンザの観み束つか〟こと観束総そう二じ君です!!』
　いやあああああああああああ何か二つ名みたいになってるうううううううううううううう!!

　悲しみを振り切るようにトラックを全力疾走し、俺は一着でゴールした。

　背に追い迫ってくる過去がある時、人はどこまでも速くなれる。俺は身を以もつてそれを証明したのだ。

『続いて二組目、その観束君の親しん戚せきだという銀髪巨乳、校内でよく頭から壁に刺さっている姿を目撃されるトゥアールさんが注目です！　今、スタート位置につきましたー！　体操着の上から白衣を羽は織おってます!!』

「銀髪巨乳のあたりをもう少し膨ふくらませてくれませんか!?　私このポテンシャルで全然目立ってないんですけど!?」

　生徒が少し近寄りがたい理由も、牧須さんがさっきの実況でやんわり言ったようだけど……。

『あーっとトゥアールさん速い！　めっちゃおっぱい揺れてる！　アスリートというより逃走術を磨いた末の走行速度に見えるのは私の気のせいでしょうか!?』

　気のせいじゃありません……。トゥアールもまた、戦友との死の追いかけっこの末にあの健脚を獲得したんだな……。

　一位のフラッグを勝ち取り、トゥアールは俺の元に駆け寄ってきた。

「総そう二じ様、見てくださいました？　体操服と揺れるおっぱい、一〇〇％計算して揺らしました！　もちろんクーパー靭じん帯たいちゃんにダメージはありません!!」

「い、一位になったのは見てたから……」

　男女交互に行われるため、徒競走三組目の男子を終え──四組目には、愛あい香かが並んでいる。

『先ほどの銀髪巨乳さんをよく校内に突き刺す姿が目撃されている、津つ辺べ愛香さん！　身体能力は折り紙付きでしょう！　いやーそれにしてもびっくりするぐらい胸小さいですね!!』

完全に、トゥアールとセットで校内名物にされてしまっているようだが……さすがは愛香だ。完かん璧ぺきなフォームでのスタートと同時に、ツインテールが風を受けてしなやかに躍動する。

ほれぼれするほど美しくツインテールをなびかせ、そのまま後続とトラック半周並の大差をつけてゴールし……愛香は放送席のテントへとノーブレーキで曲がっていった。

『嘘うそ々うそ！　ごめん愛香調子乗ってました助けて――――――っ!!』

どうやら、違うクラスなだけで牧もく須すさんは愛香の知り合いだったらしい。……コミケでお姉さんと会わないでよかったな……。

一際高い歓声が上がった。徒競走は二年へと移り、その六組目が慧え理り那なの番だったからだ。

俺と愛香、トゥアールは、ゴールの後ろから彼女が懸命に走る姿を見守る。

普段何物にも追われず堂々としている慧理那は、背に何かを感じて足を速めることはない。

かなり差をつけられているが、その健けな気げに揺れるツインテールが、勝敗に頓とん着ちやくしないスポーツマンシップの体現だった。

作業が一段落したのか放送席に着席した桜さくら川がわ先生が、そんな慧理那を見て感極まっている。

『お嬢様、ご立派になられて……』

『神しん堂どう先輩可愛い～！　そしてその可愛い神堂先輩を独占しようとしている男子をどう思いますか、桜川先生！』

『奥様とお嬢様が認めた男だ、周りがとやかく言うことではない。観み束つかがお嬢様を独占しても、私も観束に婚こん姻いん届とどけを渡せることに変わりはないしな！』

体育祭って、法をガン無視していいレベルの無礼講だったっけ……。

それはそうと、最終コーナーに差しかかって慧理那もかなり辛つらそうだ。
「総二様、総二様」
トゥアールに首輪を渡される。まさか、と思ったら、慧理那が遠くで手を振る主人を見つけた犬のように加速し、ビリから一位に浮上してゴール。そのまま俺に突っ込んできた──。

続いて障害物競走──コースに設置されている障害物は、テイルレッドがプリントされた等身大パネル、大小様々なテイルレッド人形、テイルレッドがプリントされた目の細かいネット、テイルレッドのイラストの口部分から垂れた糸の先に繫つながったあんパン──。
およそテイルレッド尽くしで、俺の心にとってはこれ以上のものは無い障害物だった。
今回は俺も愛あい香かたちも後の組なので、存分に他の生徒がやっているのを見ることになる。
『ランナー全員、障害物を……避けない！　突っ込みました！　テイルレッドたん人形が転んだフリした女子たちに次々と押し倒されていきます!!』
女子はテイルレッドに遠慮がなく自らトラップに突っ込み、男子は「お、お前が先に行けよ」的な牽けん制せいのし合いで膠こう着ちゃくする。正しく走行を阻害する障害物競走だった。
当然俺は自分の番には全てを無我の境地でクリアし、今回も一位でゴールを勝ち取った。
しかし、数組後の愛香の組が走り出した途端、思わぬハプニングがグラウンドに到来する。
もこっとしてだぼっとしてぼへーっとした巨大な着ぐるみが、コース上に立ちはだかったのだ。今や世間で大人気の、善いい沙すな闇あん子

このマスコットキャラ・メガネドンだ。
『あーっとメガネドン乱入ーっ！　ハイクオリティな着ぐるみです、演劇部作でしょうか!?』
　放送席では生徒の仕込みとして受け容れ、実況しているが……あの動きのキレ、モノマネでできるものではない。俺は中の人を知っているからわかる。明らかに本物だ……!!
　メガネドンは小刻みなサイドステップで、全ての女子生徒を通せんぼする。
　三メートル近くの巨体が横軸までも制すれば、もはやそれは生きた壁。何人も通ることはできない。立ちふさがるサプライズの挑戦を受けて立ったのは、もちろん愛香だ。
「何で来てるのか知らないけど、勝負するなら受けて立つわよ、メガ・ネ！　……ドン!!」
　繰り出された正拳を、だぼっとしたヒレでいなすメガネドン。それで愛香の勝負根性に火がついてしまったようだ。着ぐるみＶＳ女子高生の、目にも止まらぬ組み手が始まった。
　エキシビジョンマッチをこれ幸いにと、他の女子たちは横を通り抜けていく。
　着ぐるみ着用というハンデがあっても、メガネドンはエレメリアンやギア装着者と変わらない戦闘力を持っているのだ。それに生身で挑んでいくのだから、愛香も怖いもの知らずというか……テイルギアがなくても戦えるようになるんじゃないかという頼もしさすら感じる。
　もちろんビリになることに気づかないわけではなかったのだろうが、メガネドンとの戦いに愛香は満足したようだ。メガネドンも、着ぐるみの奥で笑っていたような気がする。
　その後も、レッドを押し倒したまま離れようとしない女子が人形ごと片付けられるなど、波瀾尽くしの障害物競走だった。

しかし、メガ・ネが来ているなら、間違いなくどこかにイースナもいるはずだ。注意深くツインテールの気配を探ると、グラウンドから少し離れた植林歩道の木陰に座る、小さな着ぐるみを発見した。メガネドンの子供のような、フォルムをそのままに小さくした着ぐるみだ。
　足早に向かい、他の生徒の視線に注意しながら、ぐったりした着ぐるみの頭を外す。
「ぜい、ぜい……あ、総そう二じ、さん……」
　やっぱりイースナか……。学園ではツインテール部部室以外の場所に姿を見せることはなかったが、体育祭なので目立たないと踏んだのだろう。
「こ、これ……コメガネドン……。メガネドンの派生キャラ、で、今、中の人制作中です……」
　聞くと、着ぐるみの中の人を選考するわけにもいかないので簡易ロボを自作するらしい。ロボ用だからこの着ぐるみは通気性を考慮していないのだろう、中のイースナは汗だくだ。
「それはそうと、二人して何で体育祭に？」
　高等部で体育祭の父兄観戦はないので、変装してきたのだろうが、理由がわからない。
「し、下見……です……」
「下見？」
「今は内緒、です……。あの、それより、総そう二じさん……」
　イースナは眼め鏡がねを軽く湯気で曇くもらせながら、にたりと笑った。
「ちょ、ちょっと隙すき間まあるから、一緒にこの、着ぐるみの中、入りませんか……。な、何か頭がぼーっとして、気持ちいいんです……」
　俺は大慌てで背中のジッパーを下ろし、イースナを引きずり出した。完全にのぼせている。虚弱体質なのに着ぐるみで動いたりするか

ら……！
「ぬ、脱がされる……恋人っぽいですね……。慧え理り那なさんに、勝利です……」
　俺はタクシーを呼ぶように腕を上げ、遠く離れたおかんへと速やかな回収を要請した。

　自陣の席に戻ると、クラスの男子たちに訝いぶかしげな視線を向けられた。
「……観み束つかって、ツインテール好き好き言ってる割りに、テイルレッドたんには妙に淡泊なんだよなあ」
　障害物競走で一人、レッドを回避して怪しまれたのだろう。笑って誤ご魔ま化かしつつ、疑われないためには俺もそろそろレッドに対して好意を見せた方がいいのだろうか、と悩む。
　けど、普段戦ってばかりだから、こういう純粋な競い合いはやっぱり楽しい。負けん気が刺激されるというか……愛あい香かに負けまいとして武術を習いだした、昔を思い出す。全然変わってないってことだよな、子供の頃から。俺と愛香は、いつも競い合ってきたんだ。
　何な故ぜか不意に、「変わりたい」と呟つぶやいた愛香の横顔を思い出した。
『そして目玉の一つ、男女対抗大綱引きが始まっていますが……女子が圧倒！　先頭にいるのはやっぱり津つ辺べ愛香選手です!!』
　女子の方が人数を多く配分されているとはいえ、男女対抗での綱引きで女子が一度も引かれることなくストレート勝ちするのは異例だろう。

　午後になり、種目も終盤に近づいてきた。さすがに全種目フル出場はきつい。しかし、俺にも意地がある。理事長に勝つと宣言した以上は、最後の最後まで全力だ。

リレーを除くラスーの種目は、借り物競走。
先の組で、障害物競走の時のテイルレッド人形を抱いて走っている女子がいるのを見ると、かなり無茶な内容が書いてあるのだろう。
俺の組の番となり、ピストルの合図と共に絶好のスタートを切る。
横一列に一〇枚並んだ紙から、最短距離という理由で一番左の紙を選び取って広げた。

〝巨乳〟

シンプルかつダイレクトすぎる題目に、一瞬思考が止まりかける。
「うわあああああトラップだあ！　お題の紙と思って開いたら婚こん姻いん届とどけだ!!」
しかし、後続の男子が次々に追いついて紙をめくり始め、俺ははっと我われに返って自陣へと目を向ける。愛あい香かとトゥアールが二人組み体操に勤いそしんでいた。躊躇ためらっている暇ひまはない、俺は自陣へと急ぐ。
「……悪い、来てくれ！」
「えっ!?　借り物競走!?　わかった、一緒にいこ！」
俺に向かって手を差し出してくる愛香。
「まーたこのエロ蛮族は狙ねらってそういうエロ台詞せりふを……」
やれやれと半笑いで肩を竦すくめるトゥアールの肩を、がっしりと摑つかむ。
「トゥアール、頼む！」
「はひ!?」
俺は返事を待たずにトゥアールを抱かかえ上げた。
「────ひゃうっ!?」
トゥアールが聞いたこともないような声を上げたので、

「悪い、借り物の条件に合ってるのがお前なんだ、協力してくれ!!」
「あ、う、わ」
　ぽかーんとしている愛香の顔が印象的だったが……とにかく、急がないと。
　幸いトゥアールは驚くほど軽く、ちゃんと俺にしがみついてくれているので、バランスを崩すこともなくゴールできた。

　熱を帯びたトゥアールの柔らかな感触は、できるだけ意識しないようにした。

◇

　総そう二じがアンカーを務めた最終種目のリレーが終わり、生徒たちの歓声が響く。
　自陣から離れた校舎裏でもじもじしているトゥアールを発見し、愛香は苦笑した。
「………………よかったわね、お姫様抱っこ」
　愛あい香かに気づくと、トゥアールは涙目で詰め寄る。
「いきなりひょいって抱かかえられるなんて……不意打ち過ぎて余裕が無くなっちゃいました……!!」
「別に普通じゃない、何でそんなに悔しそうにしてんのよ。嬉うれしくないの？」
「嬉しいですよ！　だからこそ悔しいんです、ゴールするまで私ノーリアクションですよ!?　完全に思考が飛んじゃったんです!!」
　実況にも褒ほめられた自慢の銀髪と巨乳を振り乱し、悶もだえるトゥアール。
「お姫様抱っこなんてされたら恥ずかしくてそりゃ思考停止しちゃいま

すって！　総そう二じ様にいきなりされるなら、おもむろに股またを開かれる方がまだ冷静でいられますよ!!」
「あんたのハプニング耐性は地球の基準とずれてんのよ!!」
「ああ、総二様に動揺してるのが伝わってしまいました……！　今までずっと総二様の前では『簡単にヤらせてくれそうな女』として振る舞ってきたのに……！　台無しです!!」
　愛香がにやにやしながら自分を見ているのに気づき、トゥアールはわざと咳せき払ばらいをして余裕を取り戻す。
「トゥアールってさ、もしかして……無理して痴ち女じよ作ってんじゃない？」
「んなああああああああああああああああああああああああああああああ!!」
　屈辱的な一言に、負けじと言い返すトゥアール。
「毎日毎日エロ妄想でベッドを軋きしませているくせによくも言いましたね！」
「だからそんなことしてないっての!!」
　そんなことを言っていていいんですか、とトゥアールは思わせぶりに指を突きつける。
「愛香さん、今まで総二様に先っぽ摘つままれて、ちゃんと気持ちいいって誉ほめてました？」
「ツインテールのね!?　妙な略し方してんじゃないわよ！　誉めるはずないでしょ、それが今何の関係があるのよ!!」
「……テイルレッドに変身して自給自足できるだけじゃない、今の総二様には、周囲にツインテールの女の子……年とし増まもいますが……が、たくさんいるんです。ツインテールを触らせてあげるであろう人たちが。私のような超絶美少女や、愛香さんのような幼おさな馴な染じみがアドバンテージになる次元ではないということです」

「……会長とか、ね……」
　ツインテールのカールを総二に絡ませていた慧え理り那なは──総二の喜ぶことを、スポンジが水を吸うように、ドＭがいくらでも鞭むちを受けるように、ぐんぐんと習得していく。
「総二様……今日も、普通に女子に歓声受けてましたよ。マジなやつ。かっこよかったですもんね……一生懸命で」
「そ、そりゃ、そーじはやればできるやつなのよ！　……だから……」
　理事長に悪目立ちさせられてしまったとはいえ、一生懸命頑張る男子がモテない道理はない。特に、総そう二じの趣味が普通に受け入れられてしまう今の世の中では、それに対する女子の抵抗もないに等しいのだから。
「……だから……どうしよ……」
　これからに不安を覚えたのか、言いながらどんどん愛あい香かのテンションが落ちていく。トゥアールはやれやれ、と頭をかき、
「ああもう、わかりました、盗み録どりした総二様の音声を愛香さんのトゥアルフォンのアラームにしておいてあげますから！　ソロプレイのお供にお使い下さい!!」
「余計なお世話じゃあああああああああああああああああああ!!」
　体育祭最後の実況が聞こえる。男子総合優勝を果たした総二を讃たたえる……ものではなく、慧え理り那なとの仲を存分にひやかすものと、それに対する生徒たちの怨えん嗟さの声だ。
『まず二人の出会いからインタビューしましょう！　もしかして、エロ本事件の頃ころから!?』
「婿むこ殿……しかと見届けましたわ！　見事な活躍でした！　やはり貴方あなたにならば慧理那を任せられます！　この通り、全校生徒の皆さんも認めて下さっていますわ!!」
「俺が認めてもらおうと思ったのはそれじゃなくて……とにかく理事

長、これでもう二度と、ツインテールを賭かけに使うのは無しですからね!!」
「ええ、慧理那のツインテールもわたくしのツインテールも、婿殿にお預けしますわ!!」
　……理事長が全校生徒の前で素を出し始めているように聞こえるが、大丈夫だろうか。
　総二は見事個人総合優勝を果たし、慧え夢むとの約束を守った。愛香が及ばなかったのは、メガネドンとの一幕での減点に限ったことではない。ツインテールを守るという、総二の実直な気迫に及ばなかった。全力の総二に負け、愛香は清々しい……以上のときめきを感じていた。
　その一方で、愛香とトゥアールは、大きな危機感を募つのらせていた。
　総二と慧理那は校内公認カップルとなった。まるで、少女漫画の世界だ。いや、神しん堂どう親子と何かをする時総二は、いつだって少女漫画の主人公のようだったのだから。
「愛香さん。二人で総二様に夜這ばいをかけようといういつかの約束、覚えていますか？」
「……覚えてるし……イースナや会長見て意識しない日なんてなかったけど、あんた特訓の時会長と二人でしようとしてたじゃない……!!」
　総二を胴上げし、地面に落としている歓声を遠くに聞きながら、愛香は口を尖とがらせた。
「ヤキモチですかあ？　誰だれとセットでも最初はわた…………あら？」
　トゥアールが白衣のポケットから小型端末を取り出した。
「エレメリアンですね」
「――――マジで？　こんな疲れた日に……」
「行ってらっしゃ～い、ぐふふ、私はさっき総二様に抱かれた感触をあ

らゆる媒体に記憶し最後に私の脳に接着しておくつもりです」

　表彰式が終わってからなのは幸いだった。愛香は踵きびすを返し、総二の元へと急いだ。

第三章　立ち上がれ、アラサー。

「球技大会か……」
　同日に別の市で開催されていた球技大会。その会場が、エレメリアンの出現場所だ。
　体育祭でかいた汗を流す間もなく、現場へと急行する俺、ブルー、イエロー。
　さらに、戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネに搭乗し俺たちと並へい翔しようするブラック。
　着ぐるみでのぼせたイースナも、メガ・ネの献身的な介護で回復したようで何よりだ。
「あんた、今日は最初から戦闘に参加するの？」
　いつも通り、髪紐属性リボンを発動し俺たちを抱かかえて飛んでいるブルーが尋ねる。
「世間にマッチョ使いなどと誤解を受けたままじゃからな、ギャラリーの多い市街地の戦いには率先して参加せねば。今度こそわらわの勇姿を、夕方のニュースでお茶の間に届けさせるのじゃ!!」
「頑張るんやでブラックちゃん!!」
　大丈夫だろうか、空回りしないといいが……。
『エレメリアンは二体……屋内球技場の出入り口を戦闘員アルティロイドに封鎖させ、未いまだに観客と選手が中に閉じ込められたままです』
　トゥアールの通信でもたらされた追加情報に驚きよう愕がくする。
「エレメリアンが人間を監禁したっていうのか!?」
「急ぎましょうレッド、計画的な襲撃に思えますわ！」
「ああ！」
　きりっと真ま面じ目めな声こわ音ねで注意を促うながしてきたイエローに頼もしさを覚えたが、その手にはすでにアブソリュートリングが

握られていた。
「……駄だ目めだぞ、初っぱなから使っちゃ」
　イエローはにこりと微笑ほほえみ、お姉さんぽく人差し指をぴんと立てた。
「ヒーローのパワーアップにはリスクがつきものですわ。事実、レッドの形態変化チエインカスタムは防御力低下や時間制限など、わかりやすいリスクが伴います」
「確かにそうだな」
　加えて、ツインテールを結び直すという僅わずかな隙すきが不可避だ。
　並の相手なら問題ないが、美の四心ビー・テイフル・ハートの隊長が進化したヘラクレスギルディには、その弱点を突かれパワーアップそのものを封じられた。
「ですがそのリスクが、テイルイエローのアブソリュートチェインにはないのです！　これは活用しない手はありませんわ!!」
「いや、弾数制限ができるわ、そのチャージで俺が死ぬほど疲労するわ、十分目に見えてリスクがあるだろ!?　あと今日は屋内球技場だからな！　そんな場所であの火力を発揮したら、ドームが更地のテニスコートになっちまうぞ!?」
　思いつく限りのリスクを言い切ると、イエローはしょんぼりとしてしまった。悪いとは思うが、それほど今のイエローは強力になってしまったんだ。力の使いどころを見誤らせるわけにはいかない。屋内ならば多少の建物への被害はやむを得ないが、それも一般人を避難させたあとだ。
「……そうですわね、ありがとうございます、ご主人様に待てをされるなら本望ですわ」
「ああ」

　条件反射で頷うなずいてしまい、ブルーに揺すられる。
　程なく目的地の球技場につき、入り口の前に着地する。かなり大きめだ。
「モケケッ!?」
　見張りをしていた戦闘員アルティロイドをブルーが引っ摑つかみ、ミサイルのように投げ放った。
　通路に並んでいた戦闘員アルティロイドがボウリングのように巻き込まれて、あっという間に全滅。俺たちは五人揃そろって中に突入した。
「……蒸気……!?」
　扉を開けた瞬間、むわっとした熱気が漏もれ出てきた。いくら球技大会中とはいえ、この季節にこの熱さは異常だ。中で一体何が──。
「あまり暑すぎてはいかんぞ！　しっかり加湿するのだ!!」
「モケー!!」
「肌が透すけるギリギリを狙ねらっておくれよ」
「モケー!!」
　戦闘員アルティロイドたちが巨大な加湿器を操作し、熱帯さながらの湿度を人工的に作り上げている……。
　俺とブルーとイエローは三人揃って元気よくずっこけ、ヘッドスライディングで室内に突入。ブラックも慌てて真似をしたが、メガ・ネはさすがに無理だったようだ。
「テイルレッドが来てくれたー!!」
　派手な登場のせいで、すぐにギャラリーに気づかれてしまう。幸いみんな属性力エレメーラを奪われてはいないようだが、この暑さで汗だくだ。
「……女子の球技大会ってわけね……！　これ見よがしに体操着からブラ透けさせて、何様のつもりよ……!!」
　確かに下着が透けている子もいて恥ずかしいが、それ以上にブルーの

心の怒りが透けて出てしまっているので、完全に発散される前にみんなを逃がさなければという使命感に駆られた。
「みんな、早く逃げて！」
「はい!!」
　はい、と快こころよく答えたのに、選手まで二階の観覧席に移動してしまって、ばっちり観戦モードだ。焦る俺を、ブラックがむしろポーズを取って見せつける余裕を持って制止した。
「好きなだけ撮影させておけ、わらわの誤解を解かせる絶好のチャンスじゃ」
「あんまり人目を意識するなよ、失敗するぞ……!?」
　二体のエレメリアン……一体は、三葉虫のような蛇じや腹ばらの甲こう殻かくを持つエレメリアン。もう一体は、頭の上に大きな巻き貝を乗せたエレメリアンだ。
「待っていたぞツインテイルズ、俺は死の二菱ダー・イノ・ランヴアスよりの戦士、濡れ透け属性クリアウエツトのアンモナギルディ！　いざ、貴様たちの属性力エレメーラをもらおう！　あと、濡ぬれてもらう!!」
　きゃー、とギャラリーから嬌きよう声せいが。な、何だ!?　一体……。
　にしても、アンモナイトのエレメリアンか……。でかい巻き貝だと思った。
「同じくその兄弟で子し、汗属性スウエツトのトリロバギルディ！　さあ今日は存分に汗をかいてもらうぞ、ツインテイルズ!!」
　そして三葉虫型のエレメリアンだ。絶滅生物や生きた化石のオンパレードだな。
「悪いけど今日はもう汗をかき疲れたんだよ!!」
　フォースリヴォンを叩たたき、ブレイザーブレイドを出現させる。ブ

ルーはランス、イエローはブラスター、ブラックはグレイブ。四人同時に武器を構え、臨戦態勢を取る。
「死の二菱ダー・イノ・ランヴアス……ついに本隊が来たか……!!」
　ブラックが不敵に笑う。少し前、彼女の公式デビュー戦で戦ったメガネウラギルディは自分を先せん鋒ぽうと称していた。その割りにそこから死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの兵士が全くやってこないから、逆に警戒していたんだが……やはり、今までのように本隊が補充部隊として時間差で合流したのか。
「これで死の二菱ダー・イノ・ランヴアスとの三回目の戦いだ……油断するなみんな、こいつら強いぞ……!!」
　仲間への檄げきを耳ざとく聞き取り、トリロバギルディは首をかしげた。
「……何？　貴様たち、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士とはプテラギルディ様含め三度みたび対戦しておろう？」
　プテラギルディとメガネウラギルディの他に、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士がこの世界に……？
　俺たちが何も反応できないため、トリロバギルディはまあよい、と話題を切り上げた。
　何な故ぜか俺は、その食い違いの最中、鳳ほう凰おうの翼を持つ戦士を脳裏に描いてしまっていた。
「ところでお主たち、ちゅーはするのか？」
　トリロバギルディの唐突な問いかけに、俺たちは思わず顔を見合わせた。ブラックだけが、ああ、と何かに気づいたように頷うなずいていた。
「何のことだ？」
「いや、別によい！　しないならばよい！　こちらの事情だ、任務は果たした!!」

　義理立てでとりあえず曲解してノルマを果たした、というような適当さを感じる。こちらの戸惑いなどどこ吹く風、アンモナギルディが進み出た。
「トリロバギルディさん！　まず俺に行かせてください！　実に濡ぬれ透すけの映はえそうな鎧よろいばかりで気合いが入ってます!!」
「ふふ、張りきっておるなアンモナギルディ……！」
「その……実は俺、この世界で、生涯を共にしたいと思えるヒロインと出会いまして……」
　アンモナギルディは、手に携帯ゲーム機を持っている。ちらっと画面が見えたが、いわゆるギャルゲー的なものが映っていた。ギャルゲーならまだいいか……。
「この戦いが終わったら、彼女と結婚しようと思ってるんです」
「わははは、ならばいよいよ負けられぬなあ。いずれ生まれてくる子にも、子守歌代わりに聞かせてやる武勇伝も必要であろう！」
「ははは」
　トリロバギルディにはやし立てられ、照れくさそうに頭を掻かくアンモナギルディ。
　球技場体育館のど真ん中で急に始まった舞台劇を、俺たちはただ見ていることしかできない。
　というか、何か凄すさまじく嫌な予感が……二体のやりとりを聞いていると言い知れぬ不安に襲おそわれるのは、気のせいだろうか。死の二菱ダー・イノ・ランヴアスっていうけど、名に恥じないフラグまで立ててんじゃないのかこいつら。
「なかなかの審美眼じゃ。やつが持っているあのゲーム、コンシューマ向けとはいえギリギリを狙ねらった意欲作。特に、ヒロインの透け姿立ち絵に定評があった!!」
　一瞬でタイトルまで看かん破ぱしたブラックの解説に、さらにどうす

ることもできなくなる俺たち。
『……生まれてくる子供……エレメリアンに……うーん……生しょ……』
　トゥアールが悲哀に満ちた呟つぶやきを漏もらす。よく、愛があればどんな障害も乗り越えられると言うが、文字通り次元が違うその恋は成じよう就じゆするのだろうか。
　みんなに油断するなと言った俺が、雰囲気に呑のまれ油断したのが痛恨だった。
「隙すきあり！　くらえ我わが兄弟で子し直伝の技！　情熱の弾丸――〝汗玉〟!!」
　アンモナギルディの頭にある巻き貝の入り口の穴から砲口が飛び出し、透き通った弾丸が勢いよく発射された。
　初動が遅れた俺は、そのバランスボール大の玉をもろに喰くらってしまう。
「ぷあっ……」
　まるで水風船をぶつけられたかのように着弾と同時に弾け、俺は水浸しになった。
『ああっレッドが敵の汗でぬるぬるに――――――――――っ!!』
　通信で聞こえるトゥアールの声は、気遣うというより何な故ぜか歓喜しているように感じられた。
「だ、大丈夫……何ともない……。でも、何で濡れてるんだ、俺……？」
　逆に言うと、それだけだった。この攻撃に一体何の意味があるんだ？
『これは久々に良素材ですよお母様!!』
『そろそろ完成するかしら!?』
　盗録はもう諦あきらめたから、できればオペレーターとして、疑問に答えて欲しい……。

『レッドちゃんが濡ぬれちゃったのはですね……レッドちゃんが濡れちゃったのはですね』
　ことさらもったいぶってその部分を強調するトゥアール。
『要するにその攻撃、本当にただの水なんです……。空気とかと同じで、無害なのでフォトンアブソーバーが防ぐまでもないんですね』
　宇宙空間や有害な気体で満たされた場所など、人体に影響のある場合にはフォトンアブソーバーが最大展開しテイルギアの装着者を防護しある程度の時間呼吸も可能となるが、普段から宇宙服のようにガチガチに何でもシャットアウトしているわけではないということだ。
「く、テイルレッドの小さき身体からだに放つ量を見誤った！　ずぶ濡れは美しくない！　髪も衣服も適度に張り付くからこそ美しいというのに……!!」
　びしょびしょになった俺を見て、アンモナギルディはゲーム機片手に猛然と突っ込んできた。
「しかたない！　濡れ具合を調節するため、この俺がふきふきしてやるぞ、テイルレッドよ!!」
　慌てて剣を拾おうとした俺は、三色の影が凄すさまじい勢いで突っ込んでいくのを目撃する。
「！　危ない！　アンモナギルディ!!」
「はっ!?」
　憤ふん怒ぬの表情のブルー、若干はあはあしているイエロー、明らかにギャラリーの視線を意識したブラックが、奇跡的なコンビネーションを生み出した。



「エグゼキュートウェイブ！」
「ダークネスバニッシャー！」
「ヴォルティックジャッジメントクレセント――――ッ!!」
　範囲と威力を絞ったブルーとブラックの技の後、使い勝手のよい簡易キックでイエローが合わせ、アンモナギルディはツインテイルズ三人分の必殺技をその身に受けてドームの天井高く舞い上がった。
「がはあっ……!!」
　携帯ゲーム機が羽毛のようにゆっくりとアンモナギルディの手を離れ、画面にヒビが入る。そして瞳ひとみを閉じるように静かに電源が落ち、真っ暗になる。なんと象徴的な光景か。
　トリロバギルディは、それを悲痛な面おも持もちで目撃し――走り出す。だが一歩及ばず、アンモナギルディは地面に叩たたきつけられた。続けて、ゲーム機が力なく落下した。
　それらはまるでスローモーションのようで……。
「おい」
　ブルーが雄々しく突っ込む。
　俺たちツインテイルズはスポットライトからはじき出され、二体のエレメリアンとのちょうど中心を境に、明らかに空気が異なっていた。
　虫の息のアンモナギルディを抱き起こすトリロバギルディ。後ろに点てん描びようトーンの幻覚が見える。
「トリロバギルディさん……ど、どうやら、俺、ここまでみたいです……」
「馬ば鹿かを言うな!!　こ、これしきの掠かすり傷が何だ……!!」
　しかし、トリロバギルディの手の震ふるえが如によ実じつに語っていた。アンモナギルディはもはや手遅れだと――。
　トリロバギルディはことさらに明るく励ましをかける。
「フ、フフ……まったくお前は、たまにそうして怠なまけ癖ぐせを出し

よる……変わらんなあ。いかんぞ、子は親を見て育つからな」
　地面に落ちた、携帯ゲーム機が切ない。
「まあいい、少し休んでおるがよい。俺が決着をつけてくる」
「いえ、自分の身体からだは自分が一番よくわかります……俺はもう、助かりません……」
「何を！」
「トリロバギルディさん……俺、もう、目が見えません……。代わりに、どうか……。見えますか、濡ぬれ透すけが……トリロバギルディさんの愛した汗とのコラボが……」
「目が見えずとも、まだ耳は聞こえるようだ……。耳を澄ませてみるがよい。聞こえてこぬか……？　優しい潮しお騒さいの音が……」
「き、聞こえます、確かに……寄せては返す、汗の音が……!!」
　勘弁してください……。
「そう──それが、流れる汗の音だ……。一面に広がっておるぞ、濡ぬれ透すけが……!!」
　男泣きしながら、世にも嫌すぎる優しき嘘うそをつくトリロバギルディ。
「だ、だから……死ぬな！　これほどの光景、その目に焼き付けずして逝いく気か、愚おろか者め!!」
「ああ……見えます……俺にも、見えます……汗……」
　ゆっくりと、力を失った手が落ちる。安らかな顔で、アンモナギルディは逝った。
「ウオオオオオオオオオオオ──、アンモナギルディよ────────────ッッ!!」
　自らの愛する汗ではなく……友に贈り、最後にその頰ほおを濡らしたのは、涙だったのだ。
　トリロバギルディの涙を共に舞い上げ連れ立つように、アンモナギル

ディの身体からだは優しく爆発し、風となり光となり天へと消えていった……。
「……」
　背中に静せい寂じやくをまとい、ゆっくりと立ち上がると、トリロバギルディは真剣な面おも持もちで俺たちを見据えてきた。

「───待たせたな。戦いを再開するとしようか」

「「できるかあああああああああああああああああああああああああああああ!!」」
　ようやくで解放された反動もあり、俺とブルーは口を揃そろえてあらん限りの声でツッコんだ。
　まずい。足に来た。爆撃のような攻撃よりも、今の寸劇の方が遥はるかにダメージが大きい。
「礼を言うぞ。死にゆく弟弟で子しのため、手を止め黙して待ってくれるとは……敵ながらその深き義に感謝する、ツインテイルズよ!!」
　目の前の展開についていけず、呆ぼう然ぜんとしていただけなのだが、厚意的に解釈されているようだった。……いや、お約束を重んじるイエローとブラックは、どうも奴やつが感謝した通りのリアクションだった節があるが。
「だが勝負は別！　我わが生涯の盟友・アンモナギルディが今いま際わの際に見た理想郷を現実のものとするために、私は負けるわけにはいかんのだああああああああああああああ!!」
　フェンシングの疆きよう条じよう剣けん型の武器を取り出し、斬きりかかってくるトリロバギルディ。
「ぬおおおおー！　汗をかけ、テイルブル───────────────────ッ!!」

「ぎゃ――――――――――――――――っ!?」
　迫り来る渾こん身しんの一撃を、ブルーは怒号に近い喚声とともにウェイブランスで受け止めた。
　こちらに仕草がまざまざと伝わるほどの震ふるえ笑いで、トゥアールが通信する。
『なぁるほど、これは同じ水の力の使い手として、ブルーを矢面に立たせるのが最善策ですねぇ！　愛あい香かさんも色々ウェッティーな方ですしねえウプププププ』
「帰ったら今日はマジで強めにいくからね！　あんたでも当分回復できないレベルで!!」
　明後日あさつての方向に怒りを飛ばすブルーへ、トリロバギルディは必勝の気迫で突貫する。
「いや――――――――――――――――っ!!」
「いや――――――――――――――――っ!?」
　交錯する同音異義語。
　裂れつ帛ぱくの気合いと共にほとばしる掛け声と、生理的嫌悪から湧わき出た悲鳴が、大気を奮わせる。

　アンモナギルディ……。
　すまない。
　門出を目の前にしていたお前を守れなかった事、悔やんでも悔やみ切れん……。
　思えば、初めてお前と出会った頃ころは、そのお調子者ぶりを疎うとましく感じていたものだ。
　だがそのひたむきさ、これと決めた物に打ち込む時の集中力……次第に見直していったよ。
　いつしか、見所があるヤツだと考えを改めた。

　私もお前に影響されたのか、自分の若い頃を思い出し、発奮していてな……。
　本当の……弟のように思っていたよ──。
　ツインテイルズは本当に強いな。
　恐らく、私も勝つことはできまい……。
　だが、せめて我われらの生きた証は残してみせるぞ。
　あの世でまた、汗と濡ぬれ透すけについて笑い、語り合いながら、酒を酌くみ交わそうぞ──!!

「って、何よこれ───!!　何か聞こえる──!!」
　トリロバギルディのモノローグが、空に拡散し耳にはっきりと届いていた。
　観客たちをちらっと見ると、共感したかのように涙をにじませている子までいる。……あなたたちを閉じ込めた敵ですよ……。
　俺の視線に気づいた観客の女の子が、何な故ぜか透けた下着を強調して見せてきたので、慌てて目をそらした。
「レッド！　ブルーを援護しませんと！」
「あっ!?」
　イエローに嗜たしなめられて気がついたが、ブルーが押され続けていた。
　哀愁誘うＢＧＭが今にも聞こえてきそうな、一人の戦士が放つ最期の闘志。
　何と崇高なことか。
　何と美しいことか。
「俺の命を賭とした一撃一撃が、テイルブルー！　貴様の珠たまの汗一滴へと変か化わってゆくのだ!!」
「最悪こいつ最悪────────────────────ッ!!」

　生命の輝きと涙を煌きらめかせながら、トリロバギルディが走る。
　まさしく自分達の生きた証を世界に刻みつけるように、強く、気け高だかく……。
「このままじゃブルーが危ない！　チェンジ──フォーラー!!」
　プログレスバレッターをフォースリヴォンに合体させ、下結びの超速形態──フォーラーチェインへと形態変化チエインカスタムする。高速で飛ひ翔しようし、ブルーからトリロバギルディを引きはがした。
　着地した瞬間、会場を歓声が包む。
「下結びのレッドちゃんよー！」
　めっちゃ写真撮られてる……。
　ブラックが必死に自分を指さしアピールしているが、会場中のカメラと携帯が俺に向いているのを肌で感じた。
「一気に決着をつける！　完全解放ブレイクレリーズ!!」
　会場の中心に転がり、すかさず立ち上がったトリロバギルディへ、最大加速で肉薄する。
　観客席に被害が及ばないよう、炎の旋せん回かいを何重にも重ね、強固なオーラピラーを完成させた。
「ライジングブレイザ──────────────ッ!!」
　ブレイザーブレイドツインによる二に刀とう斬ぎりを受け、よろめくトリロバギルディ。
「や、優しい汗の匂いがする…………可愛かわいいぞ、テイルレッド……」
　世にも気持ち悪い賛辞を俺に送りながら、放電するトリロバギルディ。
「ぐ、おおおおおおおおおおお……アンモナギルディよ、俺も、お前の……元……へ……」
　両手を天に広げ、爆発する。トリロバギルディが生んだ爆炎の中、俺

たちは見た。
　トリロバギルディとアンモナギルディの幻影が、空へと浮かび上がっていくのを。
「あれは──」
　全てを終えた安らかな表情で向かい合って微笑ほほえみ、天に昇っていく光景は、おとぎ話の世界のように幻想的で────は、当然なかった。
　要するにむさ苦しい男二人が『いやー、濡ぬれて透すけるのっていいっすよね』と声こわ高だかに語らい合いながら昇天したということだ。
「やりましたわね、レッド！」
「つーかイエロー、貴様何でいつも技を最後に出そうとするのじゃ、あれではわらわがお前のアシストをしたようではないか!!」
「連係時は蹴けり技は最後でないと誤爆してしまいますわ!!」
　終始トリロバギルディには押されっぱなしだったためか放心するブルー、先ほどのコンビネーションに駄だ目め出しをしあうイエローとブラック。
　そして俺は、斬きりつけざまに汗の匂いをかがれてしまったのかと、思わず自分の腕を鼻に寄せた。以前、匂い属性フレグランスの敵と戦った時愛あい香かが気にしていたことが、ようやく少し理解できた。何か嫌だな、匂いのことを言われるのって。
　雪崩なだれを打って駆け寄ってくるギャラリーたち。考え事をしていたせいで、俺は一気に取り囲まれてしまった。
「汗の匂い気にするレッドちゃん可愛かわいい────────────っ」
「全然いい匂いだよ！」
「お姉さんと一緒にお風呂入りましょ!?　いつまでも!!」

　ロック歌手のライブパフォーマンスのように、体操着女子たちに胴上げされ、連行される俺。
「わ────離して──────っ!!」
　か弱い声を上げたのが逆効果だった。ベルトコンベアのように淀よどみなく流されていく。
「ああっ……レッドが輸送されていきますわ─────っ!!」
　イエローの声が、遠い……。
「待て！　今日はマッチョを召喚しておらぬだろう!!　何な故ぜわらわに注目せぬ!?」
「……ファーストインプレッションを覆くつがえすのって、半はん端ぱな難易度じゃないのよ？」
　ブラックと違ってセカンドもサードも世間へのインプレッションが全く同じだったブルーが、優しく慰なぐさめている。どうも、ブラックに対しては一日の長があるという変な余裕を持ってしまっているらしい。
　とりあえず、早く助けてください、お願いします……。

◇

「これが、テイルレッドの守っている世界か……」
　風にたなびく、美しいポニーテールの少女が歩いていた。微風でなお、きめ細やかに揺れ、無風であっても堂々とした足運びが髪に動きを与える。
　道行く人々は誰だれもが振り返り、彼女に嘱しよく目もくする。
　結いわ翼ばね唯ゆ乃の。
　反逆のエレメリアン・フェニックスギルディの最終闘体であり、憧あこがれと愛がもたらしたポニーテール属性の終着点。それがこの、ポニーテールの少女の姿だった。

今も自分がアルティメギルにとって一級の討とう伐ばつ対象であること。しかも、今自分のいるこの世界がアルティメギルの増援が逐ちく次じ投入されてくる激戦区であること。
そのどちらをも理解していながら、彼女は堂々と市政を練り歩いていた。
幸い人間の姿なら、ツインテイルズ、アルティメギルどちらも彼女の存在を感知することはできない。こうして人間の姿に変身しているおかげで、この世界の現状も飲み込めてきた。
フェニックスギルディの目標とした少女、結翼唯乃は、元々アルティメギルの侵攻を受けていた世界にいた一般人の少女だ。今その少女の名を名乗っているのも、目指したポニーテールに到達したという自負からでもある。
無論、そのポニーテールは彼女の世界でも存分に衆目を集める美しさだったが……この世界では、美しいポニーテールそのものが希まれな存在となりつつある。
「───この世界、ツインテールが幅をきかせ過ぎてんだな」
宿命を背負った戦士の目に変わる。
フェニックスギルディが、リスクを背負ってまでこの世界に逗とう留りゆうしている理由は大きく三つある。ライバルであるツインテイルズの、特にテイルレッドの力を見極めるため。
親友ペガサスギルディが讃たたえた少女─まだ名前は知らないが─トゥアールと会うため。
そして、テイルレッドが戦い守る、この世界そのものもまた、しかと見極めるためだ。
親友の忘れ形見からテイルギアＴＹＰＥ-Ｐを発現させ、それがこの世界へと導いてくれた。この世界に辿たどり着いてから数日……助けたスワンギルディに試練を教えて別れてからは、フェニックスギルディは唯

ゆ乃のの姿で、マイペースな散策を続けていた。

　日この本くにがツインテイルズの拠点であることは間違いないが、別に唯乃はツインテイルズの基地や隠れ家などには興味が無い。

　テイルレッドの存在が、この世界にどう影響し、ツインテールがどう扱われているのか。のんびりと自分の目で確かめていくつもりだった。

　しかし、どこに行ってもどこを歩いても、やたらと人目を集めてしまう。

「うーん、やっぱパーティー会場でもねえ街中でドレス姿なのがいけねえのか。やたらじろじろ見られるぜ……!!」

　唯乃は、この人間体すがたの普段着ともいえる炎を編み込んだドレス姿だ。炎を抑えきって見た目は普通のドレスだが、そもそもドレス姿そのものが、街中を一人歩くには目立ちすぎる。

　足を止めて目を閉じ、風をポニーテールに受ける。数日の散策の末に辿り着いたこの街で、唯乃は妙な安らぎを感じていた。

「ひとまず、この辺で一休みすっか」

　一軒の喫茶店の前で、足を止める。

　侵略する人間世界の通貨を趣味のためにごく当然に得るエレメリアンではあるが、特筆すべきは人間体となったフェニックスギルディが、飲食までもを人間のように行える点だ。

　ドアを開けカウベルが鳴ると同時に、唯乃は店内の特殊な雰囲気を即座に察知した。

（ほおう、できるな──!!）

　己おのれの趣味を錬れん磨まし、大人になっても子供心を忘れない猛も者さが店内にひしめき合っている。正義の味方を自称する彼女は、情熱に敏感なのだ。

　席を探す唯乃の前に、鮮やかな足運びで人影が躍り出た。

「──フッ、君のような美しい女性が今回の任務のパートナーだとは。辺へん鄙ぴな国までやってきた甲か斐いがあったよ」
「おっ、何だ何だ？」
　スーツ姿の渋みある中年が、唯ゆ乃のの手を取って踊り始める。
「では、一曲踊る間に情報交換といこうか。おねしょの回数以外なら、何でも教えるよ」
　別にナンパをしているのではない。唐突なエチュードに巻き込まれる、この喫茶店ではよくあることだ。
　赤いドレス姿の唯乃は、スパイ活動のパートナーとして選ばれてしまったらしい。
　もちろん、常連客も無差別に新規客を巻き込むのではなく、彼らなりに空気を読み、人となりを見極めてから行動している。
　背中が大胆に開いたドレスを纏まとった少女が日も沈まないうちから喫茶店にやってきたら、自分たちと同じ人種だと即断されるのも無理からぬことだった。
　踊り終えた後も二、三人の別のお客さんに巻き込まれ、その挑戦全てを見事に受けきった後、唯乃はカウンター席に座った。
「なかなかの手並みね。あなたとは初めて会った気がしないわ──」
　カウンターの奥から話しかけてくる女性を見て、唯乃はさらに感心したように頷うなずいた。
「一目でわかるぜ。あんた、ただもんじゃねえ……正義の味方を目指した者だけがまとえるオーラをびんびんに感じるぜ‼」
「あらぁ駄だ目めよ、女の子がびんびんに感じるなんて言っちゃあ。──よく見抜いたわね」



緩急つけての切り返しに、店内の客たちも見み惚とれる。
喫茶店の店長マスターであり、彼らにとっては偉大なる〝マスター〟とも言える女性……観み束つか未み春はるは、唯ゆ乃のの眼め鏡がねにも適かなったようだ。
唯乃が何か注文しようとしたのを遮さえぎるように、カウンターの右奥からコーヒーカップが滑ってきた。溢こぼさないように指でクッションを作り、カップを受け止める唯乃。
数席離れたカウンター席で、シルクハットのダンディなおじさまがそっとウインクした。
「……やるな……。実際、難しいだろう、溢さずにこれやるの……!!」
コーヒーカップにはなみなみと熱いコーヒーが注がれている。素直にその技量を賞賛する唯乃。
映画を見て「あのカウンターをシャーって滑らすやつかっこいいな」と思った少年の頃ころのときめきを忘れない大人だけが会え得とくできる、いぶし銀な技だ。
ありがたくコーヒーをいただきながら、唯乃は未春の顔と、そして髪をじっと見つめた。
「店長マスター、今でも結構それっぽいけど、もっとしっかり結んで完全にポニーテールにしたら、すごく似合うと思うぜ！　俺様が保証する!!」
「あら、ありがと。でも息子がツインテール大好きだからね～」
この時ばかりはキャラを作らず、いい母として答える未春。だからこそ、唯乃も嬉うれしくなり、口滑りをよくした。
「息子さんに義理立てる必要はねえだろ！　その人がする髪型はその人自身が好きになって自分で決めるもんだ!!」
「うふふ、覚えておくわ」

　常連に気に入られ、何杯もコーヒーを奢おごられたあと、唯乃は席を立った。
「また来るぜ。この店、何か居い心ごこ地ちがいいんだ」
「嬉うれしいわ。いつでも来てね」
「ああ！」
　来た時よりも元気に鳴るカウベル。
「フッ……。若いのに、なかなかの逸材ですな……」
「僕っ娘こを超越し、俺様っ娘とは、トレンドを数十年先取りしていると見ました」
　喫茶アドレシェンツァの名だたる常連たちが、頼もしげにその背中を見送る。彼らに才覚を見抜かれるのは、果たして名誉なことなのだろうか。

　数分後、再びカウベルが鳴り、総そう二じたちが帰宅した。
「お帰り総ちゃん、みんな」
　いつも以上に店内に熱気が渦巻いているような気がする、と総二に指摘され、苦笑する未春。
　そのまま小走りにトゥアールへと近づき、総そう二じたちに聞こえないよう、耳元で囁ささやいた。
「ねえトゥアールちゃん。確か……エレメリアンが出現しても、基地の装置で探知できない場合があったわよね？」
「はい、属性力エレメーラが活性化していない時などは……どうかしましたか？　未み春はる将軍」
　ううん、とはぐらかし、未春は奥の通路へ向かう総二やトゥアールたちを見送る。
「……どっちだったのかなあ……。やっぱり、悪い子には見えなかったけど」

　真っ先に総二たちに連絡しなかったのは、この店が戦闘場になるのを避けたい、というのが一番の理由だが、彼女自身、人となりを見極めたいという欲求を懐いだいていた。そうさせてしまう、不思議な魅力があったのだ。
　見間違いではない。未春は彼女の姿を一度見ていた。──地下基地のモニターで。

　テイルギアＴＹＰＥ-Ｐを装着した、ポニーテールの少女を。

　　　◇

「あたしも強くならなくちゃ!!」
　珍しく熱弁する愛あい香か。今日、放課後部室に立ち寄るのもそこそこにみんなを基地へと集めたのは、他ほかならぬ愛香だった。
　先ほど店でどことなく機嫌が良さそうに見えた母さんも、遅れてやってきた。
　テーブルが撓たわむほど勢いよく両手をつき、立ち上がる愛香。
「よくよく考えてみたら、ツインテイルズの中でパワーアップしてないの、テイルブルーだけじゃない」
　俺は体育祭にほぼ全種目出場したことで一日経たってもくたくたなのだが、愛香はこの通り元気が有り余っている。しかし、そんなことを気にしていたのか。
「してないっていうか、する必要がないってだけじゃないのか？　今でも十分強いだろ、テイルブルーは」
　俺の意見に首を振り、愛香は強い意志を湛たたえた目で見据えてきた。
「不十分だって痛感したの。昨日みたいなザコ相手に苦戦してたら、こ

の先思いやられるわ」
　ザコっていっても直属軍の兵士なんだから、普通に強いと思うんだけどな……。
「だんだん、相手の変態性にも気け圧おされるようになってきたし……。あたしも変態に慣れないと駄だ目めなのかもね……。会長がトゥアールに弟で子し入りしたみたいに」
「何な故ぜ自分が変態上場企業の筆頭株主と自覚してないんですかこの人!?」
　桜さくら川がわ先生が淹いれてくれたお茶を優雅に飲んでいたトゥアールが、自発的に噴き出しかける。
　あくまで自分を常識人だと信じてはばからない愛香は、アンニュイな表情で続けた。
「それに、今まではトゥアールのお下がりだったからあんな胸の目立つデザインだったけど、パワーアップすればみんなみたいに装甲の面積が増えるんでしょ？　胸が隠れて一石二鳥だわ」
　しかし、武装を外したイエローのアブソリュートチェインみたいに、根本的には露出度がむしろ上がってる例もあるわけだから、あまり希望的観測もしてられないとは思うが……。
　トゥアールが、カップを置いて頷うなずいた。
「飽くなき力への渇望は蛮族の習性かもしれませんが、私もその意見には賛成です」
　トゥアールは立ち上がってメインモニターに歩み寄ると、コンソールパネルを操作。
　モニターにウィンドウを一つ出し、ブルーのテイルギアを表示させた。
「テイルブルーのものは、私が一番最初に開発し、私がまとったテイルギアです」

　続けて順番に俺たちのテイルギアを表示させていく。
「……それをまとって戦っていた私の戦闘経験を活いかし、さらにブラッシュアップされたレッド、イエローのギア……そしてイースナが作り、私が改良したグラスギア……これらと比べると、旧式感は否めません」
　確かに作られた時期は一番古いだろうけど、テイルギアってそもそもそこまで細かい改良が必要だろうか？
　俺の疑問を感じ取ったのか、トゥアールがフォローするように言った。
「もちろん、テイルギアは属性力エレメーラが高まればどんどん出力を上げていきますが、それにも限度があります。すでに愛あい香かさんはギアの力を限界まで使いこなしている状態。これ以上無茶をさせては、愛香さんの負担が大きくなってしまいますから」
「トゥアール……」
　理解を得られて感激したような愛香に、トゥアールも笑みを送る。
　いつからだろうか……最近、トゥアールの愛香を見る目が優しい。
　いや、今まで優しくなかったわけではないのだが、何だろう、こう……見る目が変わった、というのはこういう時に使うのか、というような……明確な変化が見て取れた。
「というわけで、ブルーのブレスを貸してください、愛香さん」
「ん……」
　ブレスを外してトゥアールに手渡す愛香。
　最初の頃ころはトゥアールに取り返されるのを警戒してメンテナンスの時にも外すのを拒否した愛香だったが、それから時が経たち、信頼関係が生まれ、今では言われれば素直にブレスを外すまでになった。
「私に任せてください。レッドのテイルギアにもたらされた奇跡、必ずブルーのギアにも付加させてみせますから」

……理由が見えてきた気がする……。
慌ててトゥアールからブレスを取り戻す愛あい香か。
「あんた、あたしを幼くする気!?」
「小ちっちゃくなれば、貧乳をいじられることもなくなりますよ、愛香さん。テイルレッドを貧乳という人なんか、いないでしょう？」
「…………」
あ、ちょっと悩んでるな、愛香……。
「や、やっぱり駄だ目め！　手足が縮んだら殴なぐったり蹴けったりしづらいでしょ!!」
テイルブルーのバトルスタイルからして、子供になるのは致命的だろう。
「小っちゃい子にぽかぽか殴られたら喜びますってエレメリアンなんて！」
「喜ばせてどうすんのよ!!」
「愛香さんは結構エレメリアンを喜ばせてきたじゃないですか！　特殊な連中の!!」
トゥアールと話していても埒らちが明かないと悟ったのか、愛香は俺や慧え理り那なに意見を求めてきた。
「ねえ、そーじ。パワーアップってどうやってすればいいの？」
「そう言われてもな……」
子供の頃ころ野生の熊くまを倒すにはどうすればいいの？　と愛香にクエスチョンしても、納得のいくアンサーは得られなかっただろう。やったらできた、なんてファジーな回答じゃあ、納得してもらえないだろうし。
「俺は、自分の中のツインテールと腹を割って話し合ったのがきっかけだったな。その後にトゥアールの思いを感じたから、プログレスバレッターを生み出すことができて……」

「ツインテールと話す、と……」
　よほど思い詰めているのか、前に話した時は呆あきれていた愛香も、今はノートにメモを取るほどに熱心に聞いてくれている。トゥアールの項は書いていないようだが、何な故ぜだろうか。
「会長は？　きっかけって何だったの？」
「……ふぇ、は、はい……」
　八時を過ぎたので少し眠たそうにしていた慧理那だったが、その質問でびくりと肩を震ふるわせ、目をこすった。
「わ、わたくしは、観み束つか君に全てを受け入れてもらえたことで自分の殻からを破ることができました……。観束君のおかげですわ」
「具体的には……？」
　何故か声のトーンが下がる愛香。
「く、口にするのは恥ずかしいのですが……その、観束君が裸で、わたくしも裸で、観束君がわたくしに首輪をくださって……」
　寒っ……九月なのに寒波が到来したぞ……!?　俺のすぐ隣から……!!
「慧え理り那な、眠いのはわかるけどもっと修飾語増やしてくれ！　誤解されるだろ!!」
「……ですが、誤解も何も全て事実ですし……」
　俺は、慧理那の心の中で起きた出来事をよおく思い出した。
　……………………ほんとだ、全部事実だ……。
　トランクスの切れ端がぎりぎり残ってたことを話せば、俺の罪状は軽減されるだろうか。
「へえ、否定しないんだ、そーじ……」
　愛あい香かの超絶の筆圧で、シャープペンが鉛筆削りで延々削られる鉛筆のように砕けて短くなっていく。
　何とか気分を落ち着け、愛香は、席一つ離れた場所に座るイースナにも尋ねる。

「……イースナ、あんたにも聞いていい？」
　未いまだにイースナのストーカー行為を警戒しているトゥアールによって基地への生体認証が個別登録されておらず、俺たちが基地へと向かう際こっそりついてくるしかないイースナ。彼女は、今日もエレベーター前で俺たちと合流してこの地下基地へとやってきていた。
「わ、私は……総そう二じさんがエロゲーを一緒にやろうって言ってくれて……ベッドに無理矢理引きずり込まれて、私を、乱暴に抱きしめて……」
　たどたどしい口調だが、どこか誇らしげに語るイースナ。
　すかさず俺は弁明する。
「お前は逆に脚色が過ぎるぞイースナ！　しかもその辺全然関係ないだろ、絶対!!」
「知ってんのよあんたがしょっちゅうそーじのパンツ盗んでってるの！　返しなさいよ!!」
　やっぱり、最近俺のトランクスが日に日に減ってるのって……。
「その代わり、私のパンツを、置いていっています……」
「差し引きゼロみたいに言ってんじゃないわよ全くの別物でしょうが!!」
　自分用の大型の椅い子すを作ってもらい、コンソールルームでも座れるようになったメガ・ネが、やんわりと説明する。
「……えーとな総二君、サッカー選手も健闘を讃たたえ合ってユニフォーム交換とかするやんか、これもイースナちゃんなりの友情の証なんや」
　メガ・ネに謝られると何も言えなくなっちゃうんだよなあ……。そのせいでイースナの行動に歯止めがきかなくなっているのかもしれないが。
　シャープペンを失い砕くものを探している愛香へ、今日も今日とて女

幹部コスの母さんが自信満々に言った。
「共通項ならあるじゃない」
「えっ？」
　全員の視線が母さんに向く。
「総ちゃんはトゥアールちゃんからもらった思い出のバレッタ。慧理那ちゃんは総ちゃんからもらった首輪。イースナちゃんは合体だからメガ・ネちゃんそのもの……」
　一つ一つビジョンを手た繰ぐるように、指折り説明していく母さん。
「みんな、思い入れの強い何かがパワーアップの鍵かぎになっているわけでしょう。愛あい香かちゃんもこれからは戦う度たびにそういうのを持っておけば、ある日それがパワーアップアイテムになるかもしれないわよ？」
「なるほど……」
　愛香も思わず納得する。
　俺の母さんは何でこう毎度毎度大局的に俺たちのことを分析できているんだ……。
　思い入れの強いものがキーになる……言われてみればその通りだ。
「テイルギアは心が力になるんですもの、強い心のこもった何かが鍵になるのは、理に適かなっていますわね！」
　眠気も大分収まったのか、慧え理り那なが興奮気味に同調する。
「あとは、そのパワーアップアイテムの出現を誘発するきっかけですね!!」
　皆の意見をまとめるべく、トゥアールが胸の谷間を協調した前傾姿勢でテーブルに手をついた。
「仲間の死で目覚めることにしましょう！　退場イベントがあるだけありがたいって思えってくらいのちょうどいい人材が、一人いるんですよ。育った愛香さんを途中退場させて、新たな仲間・ロリ愛香さんを迎

え入れましょう!!」
　ついに隠しもせず恐ろしい野望を声こわ高だかに語るトゥアール。
「奇遇ね、あたしにも退場要員に心当たりがあるわ……!!」
「いだあああああああああああああああああああああああああああああああ……うふふ」
「ひいっ!?　何笑ってんのよ、ごめん!!」
　技をかけている最中トゥアールが満面の笑みになり、愛香は反射的に謝っていた。
「いいえぇ……この子にされていると思えば、別に大した攻撃じゃないですから」
　白衣のポケットからこの前恋れん香かさんにもらった愛香の写真を取り出し、うっとりと眺めるトゥアール。愛香はすかさず手を伸ばしたが──。
「あ、奪っても無駄ですよ、スキャンして解像度上げて色調補正もして量産しましたから」
　ドヤ顔でトゥアールが語ったのを聞いて無駄だと悟り、愛香は途中で手を止めた。
　どんだけ気に入ったんだ、その写真……。
「ああ、この世でテイルレッドの次にかわいいですよ！　愛香さんがこの頃ころの姿に変身できたら、二大アイドル爆誕ですね……!!」
「そろそろ一回黙りなさいド変態が!!」
「ろりんっ!!」
　予備動作無しの流麗な踵かかと落としで、バウンド気味に床に叩たたきつけられるトゥアール。
　俺の位置からでは愛あい香かのパンツが丸見えだったが、やっぱり色気の欠片かけらも感じなかった。
「何な故ぜ……何故なんですか愛香さん、もう少しだけでも、この可愛

かわいさを維持したまま成長しようと努力しなかったんですか！　これだけブラボーな女の子なら、別に一線越えてもよかったんですよ⁉」
「今このあたしに成長できたことを嬉うれしく思うわ‼」
「過ぎ去った時間は戻らないからこそ美しい……そう考えて、今までタイムマシンの開発には興味なかったんですが、意欲が沸わいてきました！　過去の愛香さんを連れてきて、今の愛香さんを置いてくればもう大団円です‼」
　愛香が攻撃をせずにただむすっとしているのは、攻撃しても無駄だと思っているからか、それとも冗談でも少し寂しいからなのか……。
　トゥアールは揉もみ手も忙せわしなく、女幹部コスの母さんに擦すり寄る。
「お義か母あさま、総そう二じ様の写真はないんですか⁉　ショタ総二様の写真！　すっぽんぽんでビニールプールに入ってる写真とかトゥアー塁るいホームランなんですけど‼」
「それがねえ、総ちゃん小さい頃ころ写真撮られるのすごく嫌がって……ほら、こんな風に後ろ向きのしかないのよ」
　マントの隠しポケットから写真を取り出す母さん。何で持ってる……。
　愛香と一緒に映っている写真で、俺は全部後ろ向きだ。
　母さんたちも意地になって不意打ち気味に撮ったようなものがあるが、それでも手で覆おおい隠すあたり、俺もムキになっていたんだろう。
「きっとお父さんに似たのね……父さんも、『俺を撮っても無駄だ、この世界の記録媒体には映らないからな』って、学校の集合写真とかも全部拒否してたし」
「一緒にすんじゃねえええええええええええ俺は恥ずかしかっただけだ‼」
　俺はどっと疲れ、椅い子すに深く背をもたれる。イースナはという

と、さっきのトゥアールと愛香の会話を聞いてからずっと、ぐふぐふと笑いながら二人を見つめていた。

　あまりにも特徴的な含み笑いに、愛香とトゥアールは同時にイースナを見やる。

「な、何よ」

「お似合いだな、って思って……。そ、総二さんは、私に、任せてください……」

「任せるかあああああああああああああああ!!」

　ツッコミを入れようとしても、メガ・ネが「まあまあ」と愛香の攻撃をおかんディフェンスするため、イースナまで届かない。愛香といえども戦闘意志がないメガ・ネにはそうそう攻撃できないという心理を利用した、イースナの防御術なのかもしれない。

　母さんは愛香へと向き直ると、思わせぶりにウインクをした。

「愛香ちゃんも何か思い入れの強いものを探して、常時持っておくのがいいと思うわ。総ちゃんが昔あげたおもちゃの指輪とか、あるでしょ？」

　そんなのあげたっけな、と俺が首をかしげる一方、愛あい香かが何度も頷うなずいた。

「あります！　小箱にしまってます！　そっかあ、それにします！　指輪がパワーアップアイテムなんて、何か素敵!!」

「はい、わたくしの首輪とお揃そろいですわね津つ辺べさん!!」

　慧え理り那なも嬉うれしそうだ。……お揃いかなあ……。

　トゥアールとイースナが、愛香を見て小声で話している。

「……お、重い……たまに愛香さんって、イースナを遥はるかに上回る重さですよね……」

「わ、私は、重くありません……一途なだけです……」

「ストーカーはみんなそう言うんです！」

　何だかんだで会議は盛り上がったし、愛香も何かを摑つかめたようでよかったけど……パワーアップそのものは、必要とされないに越したことはないんだよな。
　それだけ、強力な敵が出てくるってことだから……。

　　　◇

　その日━出撃する時、胸騒ぎのようなものを感じた。ツインテールが疼うずくのだ。
　放課後だが慧理那はどうしても外せない生徒会の仕事があったことと、イースナも同じく生放送の仕事中ですぐには動けないということで、俺とブルーでだけの出撃だ。
　日にちを置かず、エレメリアンが強襲してくるとは。本格的な死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの侵攻が始まったのだと痛感する。
「二人だけで出撃って何か、最初の頃ころみたいだね～」
　こころなしか、ブルーが嬉しそうに見える。
『ブルー、陽よう月げつ学園の大学部が近いですから……気をつけてください！　お姉さんが通ってらっしゃるんでしょう？』
「マジ!?　そうだよ、お姉ちゃんこの時間だったらまだ大学にいるかも……!!」
　転送無しの方が早い、と言われたが、納得だ。今日は久々に生活圏内に出現しやがったな……。
　まさか、と思った。さすがにピンポイントで狙ねらわれるはずはないだろうと。
　しかし━現実はいつも、想定を簡単に上回る。
　眼下に広がる、信じられない光景。路上でエレメリアンににじり寄られていたのは、トートバッグを抱かかえた恋れん香かさんだった。

　恋香さんが、エレメリアンの標的に……⁉　本人がツインテールじゃなくても、周囲に巻き込まれる形で十分狙われることはある、今まで何度も経験してきたことじゃないか！

「あいつっ……人のお姉ちゃんを路上キャッチみたいにっ……‼」

　ブルーが空中で手を離し、俺たちは着地体勢を取る。

「待て、落ち着け！」

　感情にまかせて突っ込んでいかないか心配だったが、肉親の危機を目の当たりにしたブルーは、逆に頼もしいほどに冷静だった。

　恋れん香かさんを助けるべく、瞬時に最善の判断を下す。

　男の娘属性ガールズボーイを発動し、追加装備、属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを左腕に装着した。

「属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨン──腋属性アームピツト！　汗属性スウエツト‼」

　腋属性アームピツトと汗属性スウエツト、考えようにとっては大分嫌な組み合わせの属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンだが、ブルーはこのように互いの関連性が連想しやすい属性同士の同時発動が得意なようだ。

「むおっ、これは⁉」

　エレメリアンの周囲をトンネルが覆おおい、強制的に対象者から引きはがす。

　今のように密着された状態だと、かなり有効な効果だ。

「エグゼキュートウェ──────────────イブ‼」

　返す刀でウェイブランスを完全解放ブレイクレリーズ。オーラピラーで駄だ目め押しに拘束バインドを強め、徹底した周囲への被害を出さないようにとの考慮のもと、必殺技が放たれた。

　大爆発するエレメリアン。名前すらわからなかった。

　爆発したエレメリアンの属性玉エレメーラオーブには目もくれず、ブ

ルーはへたりこんでいる恋香さんの元へと向かう。
『総そう二じ様！　急いで属性玉エレメーラオーブを回収してください！　愛あい香かさんに見られないうちに!!』
「え？　あ、ああ……」
　トゥアールは何な故ぜあそこまで焦っているのだろう。
　回収した属性玉エレメーラオーブから、あのエレメリアンの属性を初めて知る。
「ヘアバンドの属性だって」
　すげーピンポイントだな。まあ、リボンがあるならこういうのもあるか。
『え、ああ、そ、そうですか……何だ……寝取……な、何でもないです！』
　とりあえずトゥアールも安あん堵どしたようでよかった。一体、何の属性だと思ったんだろうか。
　ブルーも、恋香さんを逃がせただろうし……って、まだ向かい合ってる。
　俺は二人に駆け寄った。恋香さんはブルーをじっと見つめ、そして━━。
「……あの……どこかで会ったこと……ありません？」
「えっ……!!」
　恋香さんは怪人に襲おそわれた直後とは思えないほどそのほんわかとした雰囲気を崩さず、ブルーの頭から胸までを何度も見返し、うーん、と可愛かわいらしく声を上げた。
「ツインテール……控えめな、胸……」
　嫌な予感のする連想ワードを口にする恋香さん。
「ッ……!!」
　ブルーは脱だつ兎とのごとく逃げ出した。焦しよう燥そうに揺れるツ

インテールを、俺は黙って見送る。
「あっ……助けてもらって、ありがとうございます～」
　恋れん香かさんの感謝はその背に届いただろうか。
　ともかく、恋香さんを守れたのはよかったが少々困ったことになりそうだ。ジャンプで建物を飛び越えながら、俺もブルーの後を追って帰還した。

◇

「あ、危なかった……！　何かお姉ちゃんに正体バレそうだった!!」
　基地に駆け込むや、冷や汗交じりにストンと胸をなで下ろす愛あい香か。
　後を追い帰ってきた俺も、変身を解除しながら頷うなずく。
　コンソールルームを見ると、それぞれ仕事を急いで終わらせて来てくれたのだろう、慧え理り那なとイースナ、メガ・ネもやってきていた。
「正しい判断だったと思う。明らかにブルーに違和感持ってたもんな、恋香さん……」
　自分を見ている者の認識を攪かく乱らんするという特性上、認識攪乱装置イマジンチヤフは変身前の姿をよく知っている人間には見破られる危険性を持つ。その両方の姿を知り明確に変身前後のビジョンを重ね合わせることができてしまう人間には、認識を書き換えるという特性自体が脆もろいからだ。
「そうですね……。私が必要としなかっただけで、実際こうして事例を見ると親近者に対しては想像以上に効果が心こころ許もとないようですからね、認識攪乱装置イマジンチヤフは……」
　普通に聞き流すふりをしたが、今のトゥアールの発言が意味するのは、やっぱりトゥアールはイースナと同じで家族が――。

トゥアールは意を決したように愛香に告げた。
「パワーアップを望んでいる時に真逆ですが、愛香さんはしばらく出撃を控えた方がいいかもしれません」
「わかった……。未み春はるおばさんや理事長はすんなり受け入れたみたいだけど、お姉ちゃん、あたしが戦ってるって知ったら、絶対心配してやめさせようとするだろうから……正体はバレるわけにはいかないし」
愛香には悪いが、最近パワーアップへの熱意が空回りして悪い方向に行きそうなのを危き惧ぐしていたので、今回の件はリフレッシュするにはむしろいい機会かもしれない。
「しばらくブレスは外して、簡易の認識攪乱装置イマジンチヤフの方でツインテール属性を守ってください」
そう言って、まだ変身前の俺たちや異世界に行った時に役立った、携帯式の認識攪乱装置イマジンチヤフを手渡すトゥアール。
「……そうだな。慧理那は昔俺のブレスそのものが見えてしまっていたし、一度正体を疑われた以上、そこまで徹底しておくのはむしろ当然だ」
同じことを思い返したのか、愛あい香かはすぐに納得してブレスを外した。
すると、テーブルの上に置いたブルーのテイルブレスを、すかさず横から伸びた小さな手がひょいと摘つまみ上げた。
「わ、私が預かります……」
イースナが昏くらい微笑ほほえみを浮かべる。
「私なら、このブレスで変身できるかもしれません……」
「あんた、グラスギアはどうするのよ！　だいたいブルーのテイルギアは胸が小さいと似合わないのよ？」
この数か月、その胸が小さいと似合わないとされるブルーのテイルギ

アをまとい戦っていたからこそのとてつもない説得力だ。
「私、愛香さんより胸、大きい……」
　愛香の追及にもそれはそれ、これはこれ、とさらりと流すイースナ。
　そして受け入れがたい事実までをもだめ押しされ、愛香の両目バストサーチヤーが憎々しげにイースナの胸を走査する。
「トゥアールさんのおさがりのテイルギア、一度着てみたかった……。トゥアールさんの胸とか、股またが触れた、アンダースーツ……」
「やめてよ考えないようにしてたのに!!」
　今回ばかりはトゥアールの方が冷静に愛香に突っ込む。
「変身解除時に一回一回分子分解されるんですから、触れた事実そのものが消えてます！　私だって願い下げですよ愛香さんと貝あ──」
　コークスクリュー気味のアッパーで吹き飛ばされ、まさにコルク抜きのように回転し天井を抉えぐりながら刺さるトゥアール。
「……そうだ」
　何かを思いついたように、桜さくら川がわ先生に歩み寄る愛香。後ろ手に持ったブレスを、そっと桜川先生へと差し出した。
「これ、桜川先生に預けてもいいですか？」
「え？」
　よほど意外だったのか、自分を指さす桜川先生。
「誕生日の時に、テイルブレスが欲しいって言ってたじゃないですか。預けるだけですけど、少し遅い誕生日プレゼントに」
「そうか……すまんな、津つ辺べ」
　愛香の厚意に甘え、ブレスを手にする桜川先生。
「愛香さん……本当によろしいんですね？」
「え？　もちろん……。何でよ？」
　天井から帰還したトゥアールが、どこか神妙な顔つきで桜さくら川がわ先生に歩み寄った。

「……では尊みことさん、以前お渡ししていたあれは一旦返してください」
「え？　ああ、異世界で渡された……さっきのと同じやつか。言われた通り、あれからずっと持ち歩いているぞ」
　メイド服のスカートのポケットから桜川先生が取り出したのは、先ほど愛あい香かに渡したものと同じ、携帯式の認識攪乱装置イマジンチヤフだった。慧理那が不思議そうにそれを見つめる。
「尊にも携帯式の認識攪乱装置イマジンチヤフを渡してたのですか？　何な故ぜ……」
「そうしないと、エレメリアンに狙われるからです」
　トゥアールの意味深な言葉に皆が首をかしげているのを余よ所そに、桜川先生はごく自然に、右腕にテイルブレスを装着してしまった。
「えーと……」
　しげしげと見つめた後、桜川先生は初見の人の名前を呼ぶかのように遠慮気味に、変身機構起動略語スタートアツプワードを呟つぶやいた。
「テイルオン」
　お姉さん気質が刺激されたのか、子供がごっこ遊びをするのを見つめる大人の優しい目でそれを見ていた慧理那だが……その目が点になる。
　再び桜川先生に向き直ると──ブレスから、青い光条が放たれているところだった。
「なっ……!?」
　テイルギアの変身は、常人には視覚も知覚も慮りよ外がいの一瞬だ。
　青い光が爆裂し、粉雪のように降り注ぐサファイアブルーを周囲に舞わせながら姿を現したのは──テイルブルーだった。
「……おお」
　幾分か興奮気味に、眼前に上げた自分の両腕を見つめながら溢こぼす、いつもより大人アダルトなテイルブルー。

「「──桜川先生が変身した────────────────っ!?」」
　ユニゾンした俺と愛香の絶叫は、間違いなく皆の総意だったと思う。
「あ、あ、あ、に、似合ってる……!!」
　愛香にとっては、桜川先生が変身できてしまった驚きを、自分よりもテイルギアを着こなしている悔しさが追い抜いてしまったのだろう。
　装甲部分の形状は僅わずかに違うものの、大きく開かれ胸元を強調するアンダースーツのデザインは健在だ。桜川先生の胸は、長らく壁だったブルーのアンダースーツを、見事に押し上げ、自己主張している。
「わあ、尊……本当に変身できたんですのね……!!」
　驚きの直後、きらきらと目を輝かせる慧え理り那な。
「すごいわ！」
　自動ドアなので自分で「バン！」と開閉音を口にし、母さんがホバー走行を思わせる流麗な歩法でコンソールルームに入ってきた。
　すかさず、変身した桜さくら川がわ先生の周囲を小刻みに旋せん回かいし、全身を睨ねめ回していく。
「テイルギアって、本当に変身年齢制限がないのね……！」
「あったとしても私は全然大丈夫だと思うのですが……」
「尊みことさんまで変身できるとなると、私も学生の頃ころの変身願望が再び鎌かま首くびをもたげるわね……」
「学生の頃の願望って、それだと大人になって変身するのが非常識のようでは……」
　大人二人が息ぴったりに話している。やめてくれ、母さんまでテイルギアに興味を持って、まかり間違って実は強力なツインテール属性に開花して、そして変身できてしまったら……。あり得ないと言い切れないのが、怖すぎる。
「あ、あなた……一緒に、戦うんですか……？　私たちと……」
　一番最初に現実的な意見を述べたのは、さして感慨を見せないイース

ナだった。
「そりゃ、変身できてしまったんだから、津つ辺べが復帰するまでは代打として戦うさ」
「ええっ⁉」
　当然のように肯定する桜川先生。愛あい香かは血相を変えた。



「津つ辺べ、私だってあの変態共には頭にきているんだ。一度くらい、借りを返してやりたくてな。お前ならわかるだろう。使えないならともかく、使えるのだから使わせてくれ」
「それは、そうですね……」
　拳こぶしで借りを返すという女子力溢あふれる願いに共感したのだろう、愛あい香かはあっさりと納得してしまった。慧え理り那なは喜んで、桜さくら川がわ先生の手を取っている。
　いわば三代目テイルブルー……アナザーテイルブルーが、一時的にツインテイルズの仲間となった瞬間だった。

　　　◇

　皆が基地を出ていった後、愛香はばれないようにすぐに逆戻りし、コンソールルームでトゥアールを捕まえた。
「説明してもらうわよ、トゥアール」
「愛香さんを幼くする計画の全容についてですか!?」
　いよいよ欲望を隠さなくなってきたトゥアールだが、今はそれよりも重要なことがある。
「とぼけないで！　桜川先生がテイルギアを使えるって、どういうこと!?　あんたいよいよ一番大切な部分まで嘘うそついてたってことね!!」
　観念したように神妙な顔つきになるトゥアール。
「一番大切な、とは？」
「強力なツインテール属性がなきゃ、テイルギアを使えないって……トゥアールが最初に念押ししたことでしょ!?」
　それで自分の変身時に、適格者は悪魔だなどとミスリードされ、一杯食わされたので、愛香もよく覚えている。

「イエローのブレスを受け取った時も、止めなきゃ変身できてたってこと!?　桜川先生、ツインテール属性はほとんど無いってあんた言ってたじゃない！」
　トゥアールは足を組み、きりっとした面おも差ざしで愛香に向き直った。
「尊みことさんが変身できなかったのは事実です。少なくとも、あの時はそうでした」
　はたと気づく愛香。
「いつから……そういえば桜川先生、異世界であんたに認識攪乱装置イマジンチヤフ渡されたって……」
「ええ。いい機会だと思ったので、あの時から尊さんのツインテール属性を隠してもらっていました」
　ロエルたちの異世界で尊を守るために手渡した認識攪乱装置イマジンチヤフ。その時もうすでに、ツインテール属性は育っていたのだ。
「出会って数か月……ツインテール属性が育つには十分すぎる時間です。特に尊さんは、ツインテール自体は見事なものをすでにお持ちだったのですから、きっかけさえあれば」
「きっかけってまさか!!」
「そうです！　あの年とし増まは……総そう二じ様がツインテールを褒ほめてくれることが嬉うれしくて、ツインテールを好きになった……！　最初から好きだったけど嫌いだと思い込んでいた慧え理り那なさんと、ある意味職業意識の産物で、特にツインテールに対して思い入れのなかった尊みことさん、二人の差はそこです!!」
　複雑そうに頭を抱かかえるトゥアール。愛あい香かも心境は同じだった。
「変化に気づけるとしたら総二様ですが……総二様は属性力エレメーラ自体は感じることはできませんから、尊さんのツインテールが輝きを増

した、などのように思われていただけでしょう」
　ツインテール属性……人間の属性力エレメーラを調べる術を持つのは、トゥアールだけだ。
「愛香さんにブレスをお渡しした時ならまだしも、今やこの世界には数多くのツインテール属性が芽め吹ぶいています。そのほとんどが、テイルレッドに憧あこがれてのものですが──」
　一度愛香に視線を送りつつ、観念したようにトゥアールは続けた。
「尊さんは違います。おわかりでしょう愛香さん、尊さんのツインテール属性が芽吹いた原因は──総二様です。愛香さん、あなたと同じに」
　かあっと頰ほおを赤らめる愛香。
「それと、これは私の仮説ですが……世界最強のツインテール属性を持つ総そう二じ様は、周囲にも多大な影響を与えるのではないでしょうか。太陽に導かれるかのように、強力なツインテール属性を持つ人間が一堂に会していることといい──」
「それで、そこに桜さくら川がわ先生が続いたっていうの⁉　そんな出来過ぎな話……‼」
「結婚を焦っている割りに、本当にピュアですからね、あの人は……。でも、いい機会です愛香さん、戦闘をお休みしている間、ゆっくり考えてください。どう強くなりたいのかを」
「…………わかったわ」
　総二を想ってツインテールを磨く。そんな酔狂な人間、自分一人だけだと思っていた……。
　他にもいたのだ。彼のために、ツインテールを磨こうとする女性が。
　奇しくも、自分に代わって青のテイルギアをまとうこととなって……。
「ねえ、トゥアール。あたしだから変身できるって……あたしだからそーじを守れるって思ってたのに……。最高のツインテール属性を持つ

のって、そんなに簡単なことなの……？」

　変わりたいと願い、その実停滞している自分を余所に、目まぐるしく変化していく周囲。

　大切な人のためのツインテール。自分だけの矜きよう持じが、冷えた食器に熱湯を注ぐかのように危うくひび割れるのを感じる愛香。

「体育祭で人気を博す総二の横顔を思い出し、愛香の全くない胸が、ちくりと痛んだ──」

　的確なナレーションを勝手にアフレコするトゥアールの心む臓ねが痛むどころか停止しちゃうぞなちくりをしつつ、愛香は思い悩んだ──。

第四章　ツインテール・ラビリンス。

　エレメリアンに借りを返したいと意気込んではいたものの、桜さくら川がわ先生はブルーに変身できたことでテンションが上がっているようには見えない。むしろ、喜んでいるのは慧え理り那なの方だ。

　ここ数日、しきりに変身をせがみ、その度に桜川先生に丁てい重ちように断られ、しょんぼりするというパターンだった。一方、愛あい香かは最近何となく元気がない。恋れん香かさんに正体がばれることを気にしているのと、相棒であるテイルブレスを手放したことで、落ち着かないのかもしれない。

　今日の昼休みも俺と愛香、トゥアールと慧理那、桜川先生がツインテール部部室に揃そろっていたが──桜川先生に一生懸命身振り手振りを踏まえてテイルギアの説明をする慧理那に比べ、愛香とトゥアールのやりとりにはいつものキレがない。

　愛香の投げを受けながら、トゥアールは華麗な空中遊泳で元の席へと帰還した。

「観念してください愛香さん。テイルブレスを失ったあなたの攻撃など、もはや恐るるに足りません。ロリ愛香たん爆誕への想いが、私の防御力を遥はるかに高めているのです!!」

「桜川先生やっぱりブレス返してください！　このままじゃあたしの貞操が……!!」

　愛香が言い終える前に、狙ねらったようなタイミングでエレメリアン出現のアラートが鳴った。

「残念ながらブレス返却はまだ先になりそうですね……！　さあ、ついに三代目テイルブルー……アナザーテイルブルーとなったあなたの出番ですよ、尊みことさん！」

　桜川先生の反応を窺うかがい、どことなく嬉うれしそうにそう告げる

トゥアール。
「尊！　行きましょう!!」
　慧理那に嬉き々きとして手を取られては、桜川先生も覚悟を決めるしかない。
「……テイルオン」
　先だってテイルレッドに変身していた俺に続き、桜川先生がブレスを掲げる。
　ふわりとした上結びのツインテールがフォースリヴォンに包まれ、桜川先生は蒼あおきテイルギアを装着した。視線が集中しているのを感じたのか、身をよじる桜川先生。
「……変身できたのは喜ぶべきことなのだが……やはり慣れん。津つ辺べも……トゥアールもだが、よくこんな恥ずかしい格好で戦えるな……」
　おほほほほ、と乾いた笑いを浮かべながら、トゥアールは腰に手を当てて桜川先生を振り仰いだ。
「若いですからねえ私たちは！　露出度の高い格好を恥ずかしがるのは年老いた証拠ですよ尊さん！」
「何い!?　ふざけるな、恥ずかしいだけで私だってまだまだこのくらい全然いけるぞ!!」
　印象が全然違うとはいえ、桜さくら川がわ先生がブルーのギアをしっかりと着こなしているのは事実だ。俺は初変身の時言いそびれた感想を、素直に言った。
「似合いますよ桜川先生！　その姿は、桜川先生のツインテールが成長した証なんですから、恥ずかしがらないで誇るべきです!!」
　上結びだとブルーのフォースリヴォンも装着のされ方も変わって、新鮮だ。
「そ、そうか？　ふふ、褒ほめてもツインテールしか出んぞ」

十分じゃないか……!!
転送ロッカーを潜くぐる直前、振り向き見た愛あい香かが、寂しそうにしているのが気になった。

◇

できるなら昼休みの間に決着をつけたい。特に慧え理り那なは、授業に遅れるだけで心配されるだろう。本人の希望で、珍しくイエローが髪紐属性リボンの属性玉エレメーラオーブを発動して俺たちの手を摑つかみ、現場へと急行した。お姉さん気質の慧理那のことだから、先輩として桜川先生にテイルギアのことを色々と教えてあげたいのだろう。
今日現れたのは、どうも見た目的に死の二菱ダー・イノ・ランヴアスのエレメリアンではないらしい。昼の帯番組に出演するイースナは当然合流できないし、初戦闘でギアの扱いが不慣れであろう桜川先生がいる以上、強力な直属軍の戦士ではないのはありがたい。
「場所は……ホテルのビュッフェ……食事に関わる属性でしょうか？」
イエローが指定された場所を確認する。眼下に見えるのは、高層の高級ホテルだ。
『食事を邪魔するなんて以もつての外ほかよ！　桜川先生、ガツンとやっちゃって！』
基地からの通信越しに愛香の声が聞こえてくるのは、一人で戦っていた頃ころを思い出すな。
しばらく戦闘がお休みの愛香だが、オペレーターに留とどまっていてはフラストレーションがかなり溜たまっていそうなのが心配だ……。
一旦ホテルの屋上に降り立ち、飛び降りた先に人がいないか気をつけながら、正面エントランス付近へと着地する。
緊急用に開いた状態で固定された入り口の自動ドアから、未いまだ多

くの人々が逃げ出ていた。
　食事中という安らぎの時間を狙ねらわれたんだ、逃げるに逃げられず今にもエレメリアンの魔の手に晒さらされようとしている人たちがいるかもしれない……！　急がないと!!
　入り口にいた数体のモケーを走りざまに蹴け散ちらし、俺たちは一階の大ホールへと向かう。

「え、エレメリアンがいるけど、とりあえず元は取らなくちゃ……！」
「ケーキ！　こっちのケーキだけ……」
　──大分人が残っていた。自らの意志で。
　若い主婦や女学生を中心に、自分たちをじっと見ているエレメリアンを気にしつつも、とりあえず食事を優先している。……今日も世界は平和だ……。
　もこもこと丸いフォルムに、大きめのこれまた丸い瞳ひとみ、頭と胸からそれぞれ突き出した、鋭いひれのようなパーツ。エレメリアンが闘とう気きを迸ほとばしらせ、ビュッフェを楽しむ女性たちをうんうんと頷うなずきながら見つめていた。
「そこまでだエレメリアン！」
　注意を引きつけたことで、俺たちが来たことに気づき、ギクリとして女性たちがそっぽを向く。口いっぱいにケーキを頰ほお張ばった姿を見られたくないらしい。
「おのれ、至福の時を……！」
「あなたは、食事属性ですの!?」
　イエローの質問にエレメリアンは首を振った。
「私は頰属性パフのモウラギルディ……！　ぷにぷにのほっぺが大好きだが、特にたくさんご飯を頰張った時の限界ほっぺがたまらぬ！　見よ、勇ましく食事を摂る女性たちの頰の美しさを!!」

　モウラギルディ……マンボウ、で合っているのか？　やつが見つめるその中の何人かはツインテールだ。むしゃむしゃとスイーツを頬張りながら、その膨ふくらんだ頬に咀そ嚼しやくで揺れるツインテールが跳ねている。なるほど、バウンドツインテールか……。
『桜さくら川がわ先生、そーじがまた妙な好み追加しようとしてる！　顔見ればわかる！　突っ込んで！　それが青のギアを着る者の役目よ!!』
　桜川先生……アナザーブルーも隣に並び、女性たちを何か羨うらやましそうに見つめた。
「見ろ、何人かは結婚指輪つけてるぞ……。ああ、結婚したい……」
「ああ、わたくしもあのように無防備なご飯姿をご主人様に晒さらしたいですわ……」
　そして、無防備な姿ならしょっちゅう晒しているイエローも、自分に重ねる。
『……トゥアール……あたしやっぱり復帰する……』
『我慢してください愛あい香かさん、私が突っ込みたくなるって相当な組み合わせですよあの三人!!　私は突っ込まれたいのに!!』
「死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの方々だけには任せておけぬ！　私には、ビートルギルディ様の教えが……」
　モウラギルディは不意に横を向き──テイルブルーを見るや、腰を抜かして驚きよう愕がくした。
「ぬおわあああああああああああああテイルブルーに胸があるううううううううううう!!」
　エレメリアンには珍しいストレートな絶叫ツッコミ。それほど衝撃的な光景なのだろう。
「あれっ……よく見ると、若干年老いてる!?　さては別人か、テイルブルー!!」

『何で顔の前に胸で判断してんのよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』
　やはり、絶叫ツッコミのキレにかけては、エレメリアンなど愛香の足下にも及ばない。
　アナザーブルーの方は、こめかみをひくつかせて静かに怒りを溜めているが……モウラギルディが怯ひるんだのは好都合だ。今暴れられると、ホテルがめちゃくちゃだからな。
「とりあえず、外に出ろ!!」
　食事に夢中で率先してギャラリーが寄ってこないのはありがたい。
　俺とイエローは両側からモウラギルディを引っ摑つかむと、ホテルの外へと強制連行した。身体からだが丸っこいので、最後には自ら転がり始め、変にノリのいいやつだ。
　都心ではないため、ホテルのほど近くに大型駐車場があったのは幸いだった。
「フッ、何な故ぜかは知らぬがテイルブルーが代替わりしたというなら、もはや恐るるに足らぬ！　あのような人智を超えた獣、二度と現れることはあるまい！」
　人智を超えた怪人にどんな認識をされてしまっていたんだ愛あい香かは……。
　モウラギルディは手でひれのパーツを引っ搔かき、ぎゃりんぎゃりんと威い嚇かく的な音を発する。
　不意にその手を止め、俺の顔をじーっと見つめてきた。大きく息を吸い込むように胸を反そらし、
「やーいやーいちびっ子！」
　渋いナイスミドル声で、俺に向け不慣れな罵ば倒とうをしてくるモウラギルディ。
　まあ、ちびっ子なことは否定できない事実なので、俺は特に反応もせ

ずにいた。
「……ぬぐぐ、そこは俺の罵ば詈り雑ぞう言ごんに頬ほおをぷうっと膨ふくらませて怒って欲しいところなのだが……その包容力、さすがは噂うわさに聞く地上に舞い降りた天使・テイルレッド……!!」
　俺のツインテールを、天使の翼とかけての褒ほめ言葉だろうか？　そう思うと、悪い気はしない。
　すかさずモウラギルディはアナザーブルーへとターゲッティングを切り替えた。
「やーいやーい年とし増ま！　年mおごああああああああああああああああ!!」
　二度目の年増コールが完了する前に、アナザーブルーの鉄てつ拳けんがモウラギルディの頬にめり込む。
「おい、テイルギアを着ていると正体がばれないんじゃなかったのか！　何故、私の実年齢が見抜かれる!!」
『外見年齢まで認識の攪かく乱らんをする意味が無いでしょうが！　テイルレッドちゃんの幼な可愛かわいさまで阻害されちゃうんですよ!!』
　トァウールに説明を求めるも、返ってきたのは無慈悲な現実だった。
　アナザーブルーも条件反射で手が出るらしい。
　頬をぷうっと膨らませたいがために放った罵詈雑言で、自らの頬がぷうっと膨れてしまうとは皮肉な因いん果が応おう報ほうだ。
「な、なるほどな……。どうやら蛮性は引き続き継承しているようだ……」
　僅わずかな希望から急転直下、やっぱりブルーはこうだった、と思い知り、モウラギルディは一気にテンションが下がってしまった。
「む、テイルイエロー……お前も意外と、膨らみ甲が斐いのありそうな頬をしているな！　よし、単刀直入にぷうっとしてくれい!!」
「ええっ!?」

　良くも悪くもエレメリアンにしょっちゅういじられるブルーに対して、イエローは話題を振られること自体が少ない。突然の無茶ぶりにイエローが固まるのも当然だ。
　確かに、変身前の慧え理り那なはよく頰ほおをぷうっと膨ふくらませていた。変身して身体からだは成長しても、その癖くせが頰に何らかの痕跡を残してしまっているというのか。
　イエローはアナザーブルーの隣へと移動し、にこりと微笑ほほえんだ。
「今日はアナザーブルーにお任せしますわ！　サポートはお任せを！」
　考えてみれば、アナザーブルーはイエローにとって初めての後輩だ。家族のように思っている桜さくら川がわ先生なのも相まって、慧理那の世話焼き気質が刺激されるのだろう。
　アナザーブルーはモウラギルディと相対し……すぐに俺たちを振り返った。
「観み束つか、武器はどうやって出すんだ⁉」
　俺は必死に「しーっ」とやって訴えた。
「だから名前！　戦闘中はみんな個々のカラーで呼んでくださいって‼　……フォースリヴォン……ツインテールを結んでいるリボン型のパーツに触れて意識を集中させてください！」
「うむ、すまんすまん……こうか‼」
　ブルーのフォースリヴォンから出現したのは、いつもよりやや寸の詰まった長物武器だった。
　腕一本分より少し長いくらいの柄えの先に、まるで箒ほうきのような形の打撃部分が自己主張している。
「ウェイブメイス……？　おお、何か頭に文字が浮かんだぞ。テイルギアの機能か」
　ようやく、桜川先生もテイルギアに慣れてきたようだ。

「あれ、でも津つ辺べはいつも槍やりを使ってなかったか？」
　しかしうっかりは変わらず、またしてもアナザーブルーは変身前の名前を呼んでしまった。
『名前────────────ッ!!』
　…………愛あい香かの通信は気持ちいいくらい耳を突き抜けるなあ……。できれば、トゥアールの方で調整して音量均一化ノーマライズしてほしい。
「うう、すまん、慣れてなくて。……まあいい！　これはこれで使い勝手が良さそうだ!!」
　とてつもなくまあよくないのだが……。元々ツインテイルズ関係者の中で一番うっかり口を滑らす桜川先生が変身し、前線に来たという事実がもたらすリスクに、ようやく俺は気づいてしまった。
「腐っても頬属性パフのモウラギルディ、ほうれい線がちょっと気になるお年とし頃ごろの頬の戦士になど負けぬ!!」
「年とし増ま、か……。おい貴様」
　モウラギルディの挑発に、桜川先生のツインテールが逆立つ。
「……お嬢様を警護している時から……何度も年とし増ま年増とほざいてきたな……」
　ウェイブメイスを手に、アナザーブルーは地面を蹴けり砕いてダッシュした。
「一度でいいから貴様たちをブッ飛ばしてやりたいと思っていたのだああああああああああああああああああああああああああ!!」
　打撃。打撃。打撃。
　打突武器による容赦のない直打に、モウラギルディが悶もだえる。
「ぐわああああああああああああ年増強つええええええええええええええええええええええ!!」
　しかも、奴やつの望む頬ほおは膨ふくれるどころか怒りで引きつって

いるのが現実だ。
「アナザーブルー！　フィニッシュですわ!!」
　頼もしい後輩の活躍……か、活躍に、イエローがエールを送る。
「イエロー様……二九になってオーラピラーとか叫ぶのはちょっと……!!」
　個人情報をなぜ積極的に喧けん伝でんするんだ、桜さくら川がわ先生……!!
　人の気配を感じ、俺は後ろを振り向いた。さすがに屋外にあるホテルの駐車場は目立つ、さっそく野次馬に発見され、報道陣も駆けつけてきた……！　危ない、あと少し早く来られてたら、桜川先生が口を滑らせた俺たちの名前が知れてしまうところだった。
　……ボコボコにするところは、完全に激写されてしまったようだが……。
「えーと、完全解放ブレイクレリーズ……」
　小声でぼそっと呟つぶやき、ウェイブメイスを完全解放ブレイクレリーズさせるアナザーブルー。
　メイスの先端の箒ほうきが、笠が開くように展開した。
　必殺技名が浮かばなかったのか、浮かんでも口にしなかったのか、そのまま無言でモウラギルディへと光り輝く蒼そう棍こんを叩たたきつけ、爆散させてしまった。
「やりましたわ、アナザーブルー!!」
「はい、これなら何とか代打が務まりそうです」
　いい汗かいた、とばかりに武装を仕舞うアナザーブルー。
「よ、よし、とっとと帰ろう！」
　二人の背中を押し、フラッシュから逃のがれるように現場を立ち去る。
　もう遅いとは思うが、素材は少ない方がいい。

『桜川先生、普通に戦えてるじゃない！　何なのよ、何なのよトゥアールうがーっ!!』
『ごあああああああああ基地に愛あい香かさんが残っているという危険性に気づかなかった私!!』

　もちろん、夕方のニュースで報じられたのは、箒でベシンベシン怪人を叩く、新たな謎のテイルブルーを危き惧ぐする映像だった。

◇

「……ぐわっはっはっはっは！　またしても敗れたか、不ふ甲が斐いないやつ！　どいつもこいつも、ツインテイルズ同士でちゅーさせよというミッションをガン無視し、我欲に走るとは……いっそ清すが々すがしいわ!!」
　敗れた部下たちの映像を確認し、他愛たわいなく豪笑して大ホールをこれ見よがしの大おお股またで出ていくティラノギルディ。
　部下への悼いたみなど欠片かけらもないその豪ごう放ほう磊らい落らくぶりに、残存兵士たちは言葉を失う。
　遅れてホールを出た副将・トリケラトップギルディを廊下の半なかばで呼び止めたのは、残存部隊の代表たるスパロウギルディだった。
　彼は美の四心ビー・テイフル・ハートのイラスト修行などのように、首領直属部隊と残存部隊とを繋つなぐきっかけが必要だと考えている。
「……ティラノギルディ殿のことか」
　言葉を探しあぐねるスパロウギルディを見かね、トリケラトップギルディが本題をストレートに言い当てる。
「……おわかりでございますか……」
「遠慮せず、不満は私に言うがよい。副官とはそういうものだ。大将は

先ほどの彼のように偉そうに笑うのが仕事なのだ。そうでなければ、兵がついてこぬ」

　できた副官だった。それだけに、その心遣いが空回りしているのが痛ましい。

「そのティラノギルディ様の笑いに、兵はついてきておりますか……。私には、何な故ぜかあなた方の間には溝があるように……」

　スパロウギルディも、それは重罰を覚悟しての無礼な言葉だったが、まるで聞き慣れた言葉であるかのように、トリケラトップギルディは寂しそうに微笑ほほえんだ。

　そして、感情なき言葉を紡つむぐ。

「五大修練……ナニイー・テモス・ヴェイル」

「……はっ？」

　聞き間違いだと……聞き間違いであって欲しいと、スパロウギルディは狼ろう狽ばいを見せた。

「――ティラノギルディ殿は、その試練を乗り越えたお方なのだ」

　スパロウギルディの全身を、稲妻が打ち抜く。

「未いまだ修めた者はいないとされる……アルティメギル五大修練においてもっとも孤独にて過酷とされるあの、ナニイー・テモス・ヴェイルを!?」

「そうだ。言うことなすこと全てをあえて滑り、周囲をただひたすらに白けさせる悪魔の修練……。最強の力と引き替えに、同胞との繋がりを失う。好き好んで修めようとするものなどおらぬ」

　恐るべきはティラノギルディ。その事実を知った今、スパロウギルディにもはや二の句はなかった。

　義と団結を重んじる悪の組織・アルティメギルにおいて、これ程つらいことが他にあろうか。

　時に反発しながらも、笑い、語り、己が愛するものを誇り合う。

　仲間を信じ、友情を尊ぶ──そんな、異形の怪人としての矜きよう持じが、孤独という名の刃やいばによってずたずたに切り裂かれてしまうのだ。
「だが、悲劇はそれだけではない」
　ごくりと喉のどを鳴らすスパロウギルディ。
「──実は……ティラノギルディ殿は、修行に関係なく元々天性の資質でだいぶ滑っておられたのだ……。幸い、気づいたのは修行を終えた後ゆえ、今でも我われらがつれぬのは修行のせいだと思っておられる……」
　スパロウギルディは、巨大にて小さき、あの寂しげな背中を思い返す。
「しかし、それを知ってしまった時、彼の自我は崩壊してしまうだろう……。彼には必要なのだ。修練のせいで人徳がないという事実がな……。誰だれよりも優しい心を持ちながら、力を渇望するあまり力以外の全てを失った……。それが死の二菱ダー・イノ・ランヴアス隊長・ティラノギルディ殿なのだ」
「まさに孤高の帝王……というわけですな」
　トリケラトップギルディは虚こ空くうを睨にらみ据え、決断した。
「……これ以上敗戦が続いては、ティラノギルディ殿が言外に望む、この部隊と仲良くするという野望が達成できぬであろう……。大将の笑顔のためにも、ここは一つ、私が出撃するとしよう」
「何と！　トリケラトップギルディ様が⁉」
　はやまらせてはならないと、スパロウギルディは制止するが……。
「実力とツインテールを見るだけだ。私は、ちゅーをさせよという命令に興味はない……」
　決断した戦士を止めることができないのは、もはや誰よりもわかっている。

「……あなたは何な故ぜ……ティラノギルディ殿にそこまで尽くすのです？」
　トリケラトップギルディは、誇るような声こわ音ねで返答した。

「同期の桜おさななじみなのだ。彼と私はな──」

　　　◇

「最近、総そうくんと何かあった？」
　帰宅後、津つ辺べ家のリビングでくつろいでいた愛あい香かは、背後から急に姉の恋れん香かにそう尋ねられ、飲んでいた牛乳を吹き出しそうになった。
「ええっ⁉　な、何にもないよ。どうして？」
「……ううん。愛香、何かここ数日で雰囲気変わったなあ、と思って」
　愛あい香かは苦笑して手を振り、平静を装った。内心では、先日倒した汗属性スウエットのエレメリアンが大喜びしそうなほど冷や汗をしたたらせている。
　ここ数日──恋れん香かは確かにそう言った。愛香がこの数日で変化したことなど、テイルブレスを外したこと以外に考えられない。
　恋香に違和感を持たせないために万全を期してブレスまで一時返却したというのに、それがかえって徒あだになっては元も子もない。認識攪乱装置イマジンチヤフは、一度疑念を懐いだかれてしまったら対策を立てなければずるずる正体がばれるまで進行するのは、総そう二じと慧え理り那なの例で実証済みだ。
　恋香はソファの愛香の横に座り、頰ほおに手を添え気遣いの言葉をかけた。
「ちょっと心配になっちゃって。総くんのお友達の慧理那ちゃんとか、

すごく素敵なツインテールじゃない。一緒にいるメイドさんも。総くんが目移りしちゃわないかなあって」
　恋香は、自分が愛香に持った違和感を「総二と何かあった」と仮定している。これはチャンスではないだろうか。疑念をそこで留とどめてしまえば、テイルブルーに会った時感じた違和感を愛香に重ねる確率は、ぐんと低くなる。
　姉相手に企てごとをするのは気が引けるが、戦いに巻き込まないためだ。
「──じ、実はね、お姉ちゃん。あたし……そーじと、その……」
　愛香は深呼吸をして息を整え、一世一代の決意とばかりに姉に勢いよく向き直った。
「そーじと、こ、恋人になったから!!」
「────え？」
　姉が、見たこともないような驚き顔をしている。
「しばらく秘密にしようって、そーじと約束したの。だから、みんなには内緒にしてね!?」
「本当に……？」
　さすがの恋香も疑っているようだ。だが、こうして恋香の疑念の意識が自分と総二との関係に強く向く方が、テイルブルーの正体を隠したい愛香にとってはむしろ好都合だ。
「本当」
「本当なのね!?」
　今度は、花の咲いたような笑顔で恋香は手を組んだ。
「うん。……つい、この前……その、そーじの部屋で……初めて……」
　そこでやめておけばいいのに、愛香はつい舞い上がって、余計な情報を付加してしまった。
「……そっかあ……」

咲いた花が、一瞬おどろおどろしい斑まだら模様になったように見えたが、気のせいだったようだ。
恋香は目元に涙まで浮かべながら、愛香の手を握った。
「おめでとう、愛香！　ついにやったのね！」
やったのね、のイントネーションがトゥアールに近かったように聞こえたが、気のせいだろうか。
「う、うん。ありがとうお姉ちゃん。ずっと応援してくれて……。実は、お姉ちゃんの言う通り、周りに可愛かわいい子が増えてきて、焦っちゃって……」
信頼している姉を騙だましているという後ろめたさからか。ツインテイルズのメンバーの中でもっとも慎重を期して行動する愛あい香かが、ドツボにはまってどんどん墓穴を掘っていっている。
「あ、あとそーじにも『恋人になってよかったね』とか言わないでね!?　みんなに秘密だから！　じゃないとあいつ、嘘うそつくのヘタだからバレちゃうし！」
「うふふ、はいはい」
まさか、その見み栄えも含んだ他愛たわいのない冗談がパンドラの箱を開けてしまうなど、愛香は想像もできなかっただろう。
しかも……めちゃくちゃすぐに。

◇

放課後、愛香とトゥアールと談笑しながら帰途につく。
「――――愛香さん、今日一緒にお風呂入りませんか？」
トゥアールの唐突な提案に、愛香は即座に両腕を胸の前で構え、臨戦態勢を取った。
「いきなり何言ってんの!?　嫌よ、　あんただってあたしの裸なんて見

たくないでしょ!?」
「……………………見たいですよ？」
　真顔でトゥアールにとんでもない返しをされ、愛香は尻餅をついて後あと退ずさった。
「ちょ、え、な、あんたそういう……!!」
　湯気が出そうなほど赤面し、身体を守るように両腕で抱き締める愛香。
「違います！　何を発情しているんですかこのエロ蛮族は!!　……私の大いなる計画ＬラＡツＰプのために、一度今の愛香さんの全裸を見て、採寸しておく必要があるだけです!!」
　トゥアールの目が割りと本気なので、愛香はツッコミもままならないようだ。
「何よおＬＡＰって!!」
　ＬＡＰ……。Ｌ、Ａ、Ｐ……。
　アンチアイカシステムみたいな頭文字合わせと考えれば──
　Ｌ ＯＲＩ
　Ａ ＩＫＡ
　Ｐ ＲＯＪＥＣＴ
　……とか。まさかな。考え過ぎだよな。
　トゥアールの白衣のポケットに今も入っているであろう、恋れん香かさんが渡した写真の存在を必死に頭の隅に追いやりながら、俺はこんなことばかり妙に勘が冴えてしまうようになった自分を呪のろった。
　家の前にさしかかった俺は、圧倒的なツインテールの気配に足を止めた。つ……、と冷や汗が頰ほおを伝う。
　左右に立つ二人に心配そうに見つめられる。
「そーじ？」
「総そう二じ様？」

　で、できる――!!

　すぐには振り向けなかった。

　あまりにも攻撃的なツインテール。油断すれば即座に切り伏せられてしまいそうな、剣を正眼に構えた達人が背後に立っているイメージだ。

　意を決し、真剣白刃取りをする気構えで神経を研ぎ澄ませて振り向くと―。

「そ～うくんっ」

　意外な人が、意外な姿ツインテールで立っていた。

「――――れ、恋れん香か……さん……？」

　恋香さんが……愛あい香かのお姉さんが、ツインテールにしていた。



俺の知る限り、一度もツインテールにしたことがない……だが、ツインテールが似合うとずっと思っていた、年上のお姉さんが。
「な、あ、お姉ちゃ……な、なん、で……」
アスファルトにヒビが入りそうなほど身体からだを震ふるわせながら、愛あい香かが恋れん香かさんを指差す。
恋香さんはツインテールの片方の房を摘つまむと、照れくさそうに笑った。
……照れくさそう……だよな、何か今、愛香を見てすごく嬉うれしそうにしたような……。
「区切りがついたから、私もツインテールにしようって思って。うふふ、似合う？　総そうくん」
「似合います！　めちゃくちゃ似合ってますよ、恋香さん‼」
そんな疑念はツインテールの一揺れで彼方へと消え去り、俺は全力で新たに降臨したツインテールを讃たたえた。
「ありがと。でもどうかな、久しぶりにしたから、うまくいってないかも。触ってみて総くん、ツインテールのプロでしょ？」
「そんな、ソムリエみたいに……」
そりゃあ、目を瞑つぶってても香りとか感触とかで判別はつくし、これまで視界に入ったツインテールはだいたい全部記憶しているし、ツインテールの気配や感情がわかったりはするけど、そのぐらいでソムリエなんて言ったら、本職の人に笑われてしまう。もっともっと腕を磨きたいところだ。
時間差で、先ほどの恋香さんの言葉に疑問を持った。
「……え？　恋香さん、今久しぶりって……」
「覚えてない？　私、子供の頃ころ一度だけツインテールにしたことがあるんだよ」
「えっ……それって、そーじの前で⁉」

「うん。ごめんね、でも愛香が『ツインテールにしちゃやだ』って死ぬほど可愛かわいい笑顔で言ってくる前のことだから……」
「わ――――――――し―――！　し―――――――っ‼」
　トゥアールが、二人の会話を聞いて顔を手で押さえて「あちゃー」というような表情をしている。何な故ぜだ。微笑ほほえましい姉し妹まいのやりとりに見えるが……。
「え……俺、恋香さんのツインテール、子供の頃に見てるんですか……？」
「そうだよっ」
　完かん璧ぺきだ。だからこそ、俺がそれを一度でも見ていながら忘れたことが信じられない。
　恋香さんのツインテールの動きは、戻っては進むブランコの滑らかで力強い揺れを思わせる。
　理事長もそうだが、常にツインテールを意識していなければできない所作だ。
　久しぶりに……実に一〇年ぶりにツインテールにしたというが、それでこの時間を感じさせない動き、いったい恋香さんはどれだけのポテンシャルを秘めていたというんだ。
　愛香はばたばたと手足を振りながら、恋香さんに詰め寄った。
「お、お姉ちゃん！　どうして……ツインテールにしないでって言ったじゃない‼」
　小声で何か恋れん香かさんに訴える愛あい香か。
「だって……もういいでしょ？　私、ずっとツインテールにしてみたかったの。私がツインテールにしたって、総そうくんは愛香に夢ちゅ……」
「わ―――――――――――――っ‼」
　慌てて恋香さんの口を手で塞ふさぐ愛香。

「た、確かに、してみたいってお姉ちゃん言ってたけど、まだ早いよ！」
「……うふふふ……」
　今一瞬、ぎゅっと唇くちびるをかみしめた愛香を見て、恋香さんが舌なめずりをしたように見えた。
　やっぱり、恋香さんの様子がいつもと違う気がする。久しぶりのツインテールで気分が高揚しているのだろうか。
「お、お姉ちゃん……でも、まだ……ツインテールにしないで、お姉ちゃん！」
「あはぁ……」
　突如としてその美貌をとろけさせ、恋香さんは頬ほおに手を添えてびくびくと震ふるえ始めた。
「恋香さん⁉」
　さすがに驚いて駆け寄ろうとするも、恋香さんはどんどんびくびくし始めた。
　俺……なんか知ってる、このリアクション……。知り合いに二人いる。母娘で……。
「──だから言ったんです、身内でもちゃんと索敵レーダー働かせた方がいいって……」
　全てを知っていたように見えるトゥアールは、溜ため息いきをついた。
「で、でも恋香さん、本当に子供の頃ころに見てます、俺？」
「すごく印象に残ってて、逆に思い出せないことって、よくあるじゃない？　もしかして、総くんが初めて好きになったツインテールって、私だったのかな？」
　きゃっ、と子供っぽい仕草ではしゃぐ恋香さん。
　横を向くと、愛香が埴はに輪わのような顔で立ち尽くしていた。

　いや、しかし……ツインテールの記憶力ならちょっとしたものの俺が、恋香さんのツインテールだけはどうしてもアーカイブから索引ができない。
　俺が一番最初に好きになったツインテール……。
　そう言われて初めて、俺はそのツインテールを思い出せないことに気づいた。
　何でわからなかったんだ、こんな大切なことなのに。
「は、はつこ、い……お姉ちゃんが、そーじの、はつこい……」
　何な故ぜか頭を抱かかえる愛香を見て、恋香さんははあはあと息を荒らげ始めた。
「最近は愛香を見ていると、バターでこんがりきつね色に焼けてきたタマネギを見るような気持ちになってきていたの……おいしそうで、おいしそうで……やっと、願いが叶かなったわ……」
　もはや、表情を戻そうともせず、恋香さんは愛香の肩を摑つかんだ。
「お願い、あの時と同じように言って！　『恋香お姉ちゃん、ツインテールにしちゃ、やだ……』って！　一〇年待ったの！　愛あい香かのその言葉を、一番最高の、一番可愛かわいい状態で聞きたくて、私は一〇年！　ワインの栓せんを開けるのを待ったの!!」
　何が起こっているんだ……。
　何が起こってしまったんだ。
　俺は、ツインテールの誕生がもたらしたハプニングに、頭がついていっていなかった。

「お店の前で何やってるの？　別に大丈夫だけど……」
　母さんが喫茶店のドアを開けて、歩道に出てきた。そういえば、道のど真ん中だった……。確かに、ここの客層には影響しない……マジで大丈夫だから困る。

　恋れん香かさんは、ツインテールを揺らしながらお辞じ儀ぎをした。
「おばさん。こんにちわ」
「あら恋香ちゃん、ツインテールにしたの？　似合ってるじゃない」
「はい。ちょっと、総そうくんと愛香に見てもらいたくて」
　な、何で愛香はあんなに機嫌が悪いんだ、身内がツインテールにしてくれたんだから、むしろ喜ぶべきことじゃないのか？　姉し妹まいでツインテールって、素敵なことじゃないか。
「それじゃ、また明日も見てね、総くん」
　テレビ番組の次回予告の締めのような言葉を残し、恋香さんは津つ辺べ家に帰って行った。
　愛香は一人佇たたずみ、拳こぶしを震ふるわせる。
「何で……何でお姉ちゃんまであんなことに！　ツインテルズって、呪のろわれてるんじゃないの!?　ツインテイルズの家族、みんな、何か……アレよ、えーと!!」
　愛香はやり場のない感情をぶつけるように、アスファルトを見つめる。
　清すが々すがしいほどの間抜けな鳴き声で、カラスがカーカーと空を飛んでいた。
　とりあえず母さんは愛香を慰なぐさめていた。
「愛香ちゃん……。辛つらいのはわかるけど、たまたま息子や娘にバレてなかっただけで、私もえむぴーも元々こんな感じよ……？」
　本当だよ。トゥアールが来たその日まで、俺は母さんの本性なんて全くわからなかったからな。慧え理り那なだって、つい先日まで理事長の真の姿をまるで知らなかったんだ。
「あと、恋香ちゃんがどういう目で愛香ちゃんを見てるか、おばさん一〇年前から一撃で感づいてたし……」
「おばさん気づいてたんですかあああああああああああああああ

あ!?」
〝どういう目〟って、本当、どういう目なんだ……!?　とにかく愛香の狼ろう狽ばいぶりが半はん端ぱではない。
「き、気づいてたなら……教えてくれてもっ……！　もーやだ!!」
　俺に鞄かばんを放り投げ、愛香は来た道を走って行ってしまった。
「ああ、ちょっと愛あい香かさん！　認識攪乱装置、鞄かばんの中に入れてるでしょ！」
　トゥアールの声にも耳を貸さず、長い影を地面に落としながら、夕暮れの道を走る。
「そっとしておいてやろう。恋れん香かさんのお茶目な部分を見て、ショックみたいだし」
「さすが総そう二じ様、もう変人耐性がつきすぎてあのぐらいじゃビクともしませんね」
　変人って……ちょっと、妹をからかうくらいじゃないか。
　服を脱いでフリスビーをくわえて走る友達の親御さんを見た後だし、全然微笑ほほえましいよ。

　喫茶店を通り抜け、奥の通路へ。またもや店をセルフ状態で放置している母さんも一緒に、俺とトゥアールはエレベーターに乗った。
　動き出した途端、トゥアールのおっぱい、と、いつもの俺の音声が流れる。よりによって、トゥアールの胸の谷間から。
　端末を胸の谷間から取り出し、俺と母さんに展開してみせる。
「……まずいです、エレメリアンが出現しました」
　なぜまずいのか、と問う前に俺は、認識攪乱装置イマジンチヤフを持たず走って行った愛香のことをすぐに脳裏に思い描いていた。

◇

　全力で走り続け、辿たどり着いた先は近所の公園だった。
　ブランコに乗って黄たそ昏がれるなど、自分のキャラではないが……。
　まだ夕方なので、子供たちも何人か姿が見える。遠くから、楽しげな声も聞こえる。
　今まで、総二が他のツインテールに目移りすることなど、日常だった。
　特段気にすることではない。肉親だから、少しいつもより気になっているだけだ。
　姉にツインテールにしないで欲しいと泣いた、あの頃ころの自分ではない。
　今の自分には、総二も認めてくれるツインテールがあるのだから。
　けれど……本当に、それは誇れるものなのだろうか。尊みことがテイルブルーとして戦う姿。姉がツインテールにした姿。それが、螺ら旋せんのように愛香の脳裏を周り、支配していく。

「――素晴らしいツインテール属性だ……！」

　ずん、という地響きと共に、目の前に壁が出現した。
　悲鳴が上がり、親たちが子供を連れて逃げている。
（エ、エレメリアン……!!）
　三本角の巨漢を前に、咄とっ嗟さに愛香は右腕をかざすが……そこにブレスはない。
　しかも、ポケットに入れるのを面倒がって、トゥアールから渡された簡易の認識攪乱装置イマジンチャフは鞄かばんに入れたままだ。
　初めて自分に向けられる、これは……敵意、なのだろうか。

アルティメギルの襲来と同時にトゥアールの科ち学か力らで守られてきた自分は、一度もこのような状況に遭遇せずにここまで来たのだ。

そう……変身前の無力な少女。

津つ辺べ愛あい香かのツインテール属性を、エレメリアンに狙ねらわれるという状況に。

「現場に赴おもむくなど久方ぶりだが……運命を信じる気になったぞ。そなた、幼おさな馴な染じみだな──‼」

ツインテールだけではなく、もう一つの大切なものまでもを標的にされたと悟った時、愛香は反射的にエレメリアン目掛けて拳こぶしを繰り出していた。

「うぐっ……」

金属よりもなお凶悪な硬度を誇る皮ひ膚ふの前では、鍛きたえた拳も全くの無力だ。あっさりと弾き返され、痛めた手を押さえて後退る愛香。隙すきを作ることさえできなかった。

「……何と野蛮な……。大丈夫か、怪け我がをしておらぬか？」

間違いなく幹部級のエレメリアンだ。怪我を気遣うのは本心だろうが、属性力エレメーラに対する執着が生身の今ですら肌はだを刺すようにひしひしと感じる。

伸ばされた大きな腕が、今まさにツインテールに触れようとした時。

絶叫が、大気を震ふるわせた。

◇

「その子から離れろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお‼」

「むっ⁉」

　大上段からの斬きりつけを躱かわすエレメリアン。注意を引きつけるためなので、これでいい。
　転送ポイントからの移動ももどかしく、俺はフォーラーチェインにチェンジし、高速飛行で現場に駆けつけた。
　おかげで、愛香は無事だった。まさか、本当に認識攪乱装置イマジンチヤフを手放した一瞬の隙を狙われるとは……。すかさず基本中結形態ノーマルチエインに戻り、エレメリアンの前に立ちふさがる。
「お前がテイルレッドか……。部下たちが世話になった」
「お前、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスか！」
「いかにも。死の二菱ダー・イノ・ランヴアス・左牙の副将レフトフアング・トリケラトップギルディ！」
　穏やかな草食動物でありながら、外敵を容赦なく屠ほふりさる三本角、堅けん牢ろうな皮膚……まさに太古の大地を悠然と闊かつ歩ぽしていたトリケラトプスそのものだ。
「この少女から離れるわけにはいかんな。偶然発見した、とてつもない逸材だ。類たぐい希まれなるツインテール属性に加え……この少女は、気け高だかき幼馴染属性チヤイルドフツドを備えておる。私が求める希少なる属性をな」
「幼おさな馴な染じみが希少……!?」
　愛にまで昇華させるのは難しくても、幼馴染なんて人の数ほどいてもおかしくはない。それほど希少な属性なのだろうか……。
「なぜなら、幼馴染とは、敗北者だからだ。属性力エレメーラが芽め吹ぶくには、確固たる克こつ己き心が必要!!」
「は、敗北者ですって!?」
　まだ避難していない愛あい香かが、その一言にくってかかる。
「逃げてください!!」
　一般人に接するように装った俺の忠告にも、愛香は引き下がろうとし

ない。
「幼馴染が敗北者って、どういうことよ!!」
「よかろう、少女よ、そなたには聞く権利がある」
トリケラトップギルディは俺への警戒も怠おこたらず、語り始めた。
「幼馴染とは……諦あきらめ、敗北したからこそ続く関係！　幼馴染という関係を受け入れることそれすなわち、前進を放棄し足を止めた降参の証あかし！」
「な……!!」
驚きよう愕がくする愛香。
「だが、だからこそ健けな気げで美しい！　そんな幼馴染としての関係を享受し、日々を生きる少女にこそ、幼馴染属性チヤイルドフツドは宿る！　私はそれを愛するのだ!!」
俺に言うならともかく、愛香を敗北者と貶おとしめる言い分に、ツインテールがかっと熱くなった。
「黙って聞いてれば……幼馴染を悪く言うんじゃねえ!!」
「エレメリアンの私が人間の心持ちを密に理解できるはずもない……しかし、これは幼馴染チヤイルド属性フツドを持つ私だからこそ到達できる真理!!」
トリケラトップギルディは拳こぶしを握りしめ、叫んだ。
「テイルレッド、純粋な幼子よ。負けをマイナスと捉えるからいかん。敵かなわぬと分かっていても尽くす！　そのいじましい姿こそ、幼馴染の真骨頂ではないか!!」
「少なくとも俺の幼馴染は、諦めずにいつも前進してる、すげえやつだぜ!!」
ブレイザーブレイドで斬きりかかる。
両腕をクロスさせブロックしたものの、トリケラトップギルディは吹っ飛び、ジャングルジムに激突してひしゃげさせた。

「うぬぬ……」
「……何だ……？」
　同じ死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの副将でありながら、トリケラトップギルディはプテラギルディと比べて圧倒的に弱い。
「レッド────────────っ!!」
　イエロー、そしてアナザーブルーに変身した桜さくら川がわ先生も駆けつける。
「ヴォルティックブラスター！」
　イエローが銃撃し、トリケラトップギルディに命中した瞬間、奴やつの姿が忽こつ然ぜんとかき消えた。
「え？」
「イエロー様、危ない!!」
　イエローの頭上に出現したトリケラトップギルディを、アナザーブルーがウェイブメイスの横よこ薙なぎで迎撃する。しかし今度は、命中した後で姿を消し、イエローとアナザーブルーから距離を取った場所に出現した。
　ウェイブメイスの痛打を浴びていながら、全くダメージの跡が見えない。そういえば、俺の最初の一撃で受けた傷も、すでに腕から消えてしまっている。
『皆さん、トリケラトップギルディは短距離ですが連続してテレポートを行えるようです、連携して出現点直後の隙すきを狙ねらいながら戦ってください！』
「了解ですわ！」
「さきほどのようにやればいいわけだな!!」
　主従コンビの息の合った連係で、トリケラトップギルディはどちらかの攻撃を躱かわしては、出現直後の隙を狙われ攻撃を受けていく。
　二人の戦いを見ながら、俺は疑問を懐いだいていた。

　あいつの能力……本当に、テレポートだけなのか？　傷がすぐに消えるのは、瞬間回復能力も同時に備えているということなんだろうか……。
　トリケラトップギルディは大きく距離を取る。
「……なるほど、確かにこの強さでは、ちゅーをさせよというミッションは困難なわけだ」
　俺たちを値踏みするように観察した。ちゅーをしろとか言う敵、最近やけに多いな。
「今日のところはひとまず引くが──その幼馴染属性チヤイルドフツド……いずれ必ず手に入れてみせよう」
　トリケラトップギルディが天に両手をかざすと、極彩色の渦が出現した。
　基地などの出撃ゲートや、異世界に移動する時に周囲を覆おおっていたものとそっくりの光だ。
「まずい……！　みんな！」
　愛あい香かに狙いを定めた敵を、おめおめと逃がすわけにはいかない……！
　イエロー、アナザーブルーと瞬時にアイコンタクトで意志疎通し、一斉に飛びかかった。
　テレポートを繰り返すトリケラトップギルディにダメージを与えていくが、離れた場所に出現したゲートは依然として健在だ。
「うおおおおおおおおおおおお！」
　ブレイザーブレイドが、トリケラトップギルディの鼻上の短い角つのを斬きりつける。
　角が放電し、トリケラトップギルディが悶もだえ始めた。
「うぐああっ……しまった!!」
　角が弱点なのか!?　一いち縷るの望みを託し、追撃を加えようとした

瞬間。
「いかん……コントロールが!!」
　トリケラトップギルディの悔恨めいた声に気を取られると、ゲートが放電し始めていた。
　普段は自発的に入らなければ何も起こらない穏やかな光が、ブラックホールのように強烈な吸引力を有し始める。俺たちは慌てて踏ん張り、嵐が収まるのを待つ。
『いけない、総そう二じ様、敵の出したゲートが不安定になっています!!』
　トゥアールの焦しよう燥そう交じりの通信と同時に、背後から悲鳴が上がった。
「きゃあっ！」
　物陰に隠れている愛あい香かに視線をやった。あいつ、まだ逃げてなかったのか……！
　いくら愛香でも、生身で耐えられる吸引力ではない。摑つかまっていた柵さくから手が引きはがれ、愛香はゲートの中に吸い込まれていった。
「くっ……少女よ、心を強く持つのだ！」
　角つのを抑えながら、必死に手を伸ばすトリケラトップギルディ。
　圧力に耐えるのを放棄して跳躍し、手を延ばす俺。
　そのどちらも届かず、愛香は光の中に消えていく。
「愛香ああああああああああああああああああああああああ!!」
　敵の目など構わず、俺はあらん限りの声で叫んだ。ゲートに呑まれる瞬間……愛香の周囲を、同じような薄い極彩色の光が球体状に展開されて覆おおっていたように見えた。
　ゲートは自然に穴がふさがっていくのではなく、爆発するように霧む散さんしてしまった。

　嘘うそのように静かになった公園で、俺たち三人だけが立ち尽くす。
　トリケラトップギルディの姿は、いつの間にか忽こつ然ぜんと消えてしまっていた。

◇

　地下基地へと帰還した俺とアナザーブルー、イエローは、走りながら変身解除し、トゥアールの周りに集まった。母さんと、合流したイースナ、メガ・ネがすでにトゥアールの隣に立ち、緊迫した面おも持もちで画面を見つめている。
「トゥアール……愛香はどうなっちまったんだ!?　まさか、アルティメギルの基地に!?」
　敵が退却しようとして出現させたゲートなのだから、その可能性が一番高い。最悪の事態が頭を過よぎり、俺は血の気を引かせて狼ろう狽ばいする。
　踊るように叩たたかれるキーボード。トゥアールは冷静に状況を見極めていた。
「いいえ、発動者がコントロールを失ったことで、全く別のゲートに変異してしまったようです。世界間移動の際に発生するものと酷こく似じした波形をキャッチしました……。おそらく、別世界に転移させられてしまったと見て間違いないでしょう……」
「別世界に!?　待ってくれ、前に、確か生身の人間じゃ世界を超える〝通路〟の中では生きられないって言ってなかったか!?」
　だからこそ大がかりな移動艦が必要なのだと、夏休みの合宿で説明されたはずだ。
「転移する瞬間愛あい香かさんの周囲に強力な力場フイールドが発生していました。トリケラトップギルディの力でしょう……。予想外の暴走

はしても、咄とつ嗟さに人間を守ろうとはしたようです」
　今のところ、命に別状はないってことか。しかし、それだけじゃあとてもほっとはできない。
「すまない観み束つか、私がテイルブレスを預かっていなければ……」
　責任を感じているのか、右腕の青いブレスを見つめながら歯は噛がみする桜さくら川がわ先生。
「桜川先生のせいじゃないでしょう！　愛香は自分からブレスを一時的に外したんですから……。悪い偶然が重なっただけで」
　悪いというか、最悪そのものだが……。憎むべきは愛香を転移させた、トリケラトップギルディだ。それに、攻撃をしてコントロールを不安定にさせてしまった、俺の責任でもある。
「最悪のパターンは……ロリちゃんの時のように、現在進行でアルティメギルの別部隊の侵略を受けている世界に転移してしまっているケースです。愛香さんなら、別の世界に行っても最高レベルのツインテール属性のはず。確実に標的にされてしまいます」
　トゥアールの想定したケースは、まさに最悪にして、容易に想像ができる。
　テイルイエローに変身できるようになるまで、頻ひん繁ぱんに慧え理り那ながアルティメギルに狙ねらわれていたのと同じか……。
　ツインテール属性の奪取に特化した作戦段階なら、間違いなく愛香は狙われる。
「……そんなことさせてたまるか……！　トゥアール！　またスタートゥアールを出してくれ。俺たちみんなで、愛香を助けに行こう!!」
　夏休みに世界を超えた移動戦艦・スタートゥアール。あれなら、世界を超えて愛香を助けに行けるはずだ。
「すみません、総そう二じ様……今は無理です」
「え？」

　変身を解除したイースナが、トゥアールをフォローするように続けた。
「虱しらみ潰し、に……総当たりで捜す、には……平行世界の数は、多すぎます……」
「つまりトゥアールさんは今、津つ辺べさん自身を追跡しているのですわね？」
　頷うなずくトゥアール。モニターには、滝のような勢いでプログラムコードが現れては流れてゆく。
　最後に安心したように、力強く一度キーを押すと、
「……間に合いました……。完全に消え去る前に愛香さんを取り巻く力場フイールドの信号を特定し、入力し終わりました。これで、後は自動的に追跡してくれるはずです！　皆さんは安心して、分析結果を待っていてください!!」
　よかった……。総当たりではなく追跡なのだから、いかに無数の並行世界といえども、そう時間はかからないだろう。
「とにかく、愛あい香かさんのしぶとさを信用しましょう。転移された先が火山の火口でも、あの人は生き残りますよ！　山賊に遭遇したって、逆に追い剝はぐような蛮族じゃないですか!!」
　トゥアールが努めて明るく振る舞っているんだ、俺たちがしょげていても問題は解決しない。
　一様に頷うなずくと、俺たちはモニターの一点で点滅を繰り返す、愛香を表すビーコンをそれからしばらく見つめていた。

◇

「──まいったわね、変身できない状態で異世界に飛ばされるなんて……」

愛香が空間転移ドライブアウトした先は、巨大な木々が生おい茂しげる森の中だった。
遥はるか上空から落とされなかっただけマシだが、それでもしたたかに尻を打った。洗濯機にかけられるように無茶苦茶な異空間の渦に翻ほん弄ろうされて目が回り、さすがの愛香も着地が疎おろそかになってしまったのだ。
トリケラトップギルディから早く逃げなかった、自分が招いた結果だ。しかし、幼おさな馴な染じみを負け犬扱いするあいつを、どうしても許せなかったのだ。
すかさず、周囲を確認する。この状況でもしっかりと現状を分析する冷静さは、さすが愛香だった。しかし着の身着のまま見知らぬ世界に放り出されるのは、心情的には無人島でサバイバルすることとさして変わりがない。
唯一持ち合わせているのは、トゥアルフォンだけだが……世界を隔へだて基地のメインコンピュータとのリンクが切り離されたことで、セーフティがかかって機能限定モードになっており、ほとんどの機能が使えなくなってしまっている。超科学の結晶たるガジェットの、やむをえない安全策といえる。
「…………どうしよう……」
最初の決断を迫られていた。
今自分は、遭難している状態といえる。そんな時一番危険なのが、パニックになって闇やみ雲くもに動き回ることだ。特に今の自分の場合、トゥアールが捜し当ててくれるとすれば、転送されて出現したポイント、つまりここから動かないことが最善策に思える。
一方で、このようにかなり深い森の中でじっと待ち続けるのも、リスクはある。
不意打ちでも受けなければ、野生の熊くま程度なら生身で倒せる愛香

ではあるが、ここが異世界である以上、それこそ恐竜のような生物が突如として現れないとも言い切れない。
　現にロエルの世界では、道中でツインテールにしたゴリラの集団に遭遇したのだから。
「……よし」
　夜になる前に人里を目指し歩く方が、安全に思えた。
　愛あい香かは、余り体力を消費しないようペース配分をしながら、山を下り始めた。

◇

　次の日の朝、俺は早起きして地下基地に向かった。コンソールルームにはすでに起きていたトゥアールの姿もあり、モニターを見つめていた。
「おはようトゥアール。どうだ？」
「まだ特定はできていませんね……。さほどタイムラグなく追跡トレースを開始したのですから、程なく追いつくはずだったのですが……」
　トゥアールは伸びをして肩を回し、
「今日は私、学校を休みます。愛香さんの欠席と合わせて、駆け落ちしたとか妙な噂うわさが立たないよう食い止めてください！」
「わ、わかった」
　ついＯＫしてしまったが、いくらあのクラスでも、二人一緒に欠席しただけでそんな発想にはならないよな……？　な……。

　そして放課後、エレメリアン出現の報を受け、桜さくら川がわ先生や慧え理り那なと一緒に出撃。トリケラトップギルディが再度現れることを期待したが、現れたのは別の奴やつだった。

　撃破して戻ってもやはり、追跡は完了していなかった。かなり時間がかかっているな……。
「まさか愛香さん、途中で力場にグーパンして破壊して自力で異空間の狭はざ間まを泳いで帰ろうとしてないですよね……」
　溜ため息いきをつくトゥアール。ここまで時間がかかると、愛香が予想外の行動をした可能性が考えられるという。助かろうと必死になれば、あり得る話だ。
　基地からのエレベーターを降り、喫茶店内に出ると、恋れん香かさんが元気なさそうにしていた。
　今日もツインテールにしている。
「総そうくん、愛香、部活の合宿だって本当？」
「は、はい。学校に泊まってます。慧理那や桜川先生も一緒ですから」
　無理のある嘘うそだが仕方がない。
「……よかった。私が変なこと言ったから、驚いて家出しちゃったのかと思って……」
　まあ、俺も母さんの本性を知った時グレそうになったから、もし愛香が本当に家出しようとしても、驚きはしないけど……。
「愉快な友達が多いから、愛香だって慣れてますって」
「……でも、総くんもちょっと引いちゃったでしょ？　私が、愛香の困った顔を可愛いって思ってるって知って……」
「いや……仲のいい証拠じゃないですか」
　ツインテールにしたから、恋れん香かさんの感情が見え始めてしまったのだろうか。俺には、恋香さんがまだなにかを隠しているように思える。
「……うん。私、愛あい香かのこと大好きだから……ちょっと、はしゃぎすぎちゃったみたい」
　ただ、姉し妹まいとして愛香をからかっているだけだとは思うんだけ

ど……。大人だけあって、何か、底知れない凄すごさがあるように思える。
　それにしても、恋香さんのツインテール……なんて見事なんだろう。
　俺にはわかる。昨日今日始めたものじゃない、ずっと、それこそ……愛香と同じぐらい長い間、愛し続けてきたツインテールなんだって。
　でも、同じぐらいの時間をかけてきたのなら、どうしてだろう。
　俺は恋香さんのツインテールに、愛香に感じるような安らぎを感じることができなかった。
　この人が、本当に俺が初めて憧あこがれたツインテールなのかな……。思い出せない。

◇

「……お風呂入りたい……」
　一両日歩き回っても、まだ山道が続く。人も車も通らない。
　愛香は途方に暮れていた。そして、後悔していた。ここまで歩いて何もないのなら、やはりあそこでじっとしていた方が得策だっただろうか。
　飛ばされた直後は夕方で気付きづらかったが、今ならわかる。この世界、見れば見るほど自分たちの世界そっくりだ。トゥアール言うところの、「マス目で隣り合った」近似した異世界なのかもしれない。
　だったら行動は楽だが、少し恐ろしいこともある。
　トゥアールはこうも言っていたからだ。違いがほとんど無い、近い世界ほど、世界移動はしづらいと。それはつまり、迷い込めば脱出が困難なことも意味するのではないか——。

　何とかアスファルトの道にさしかかった。砂じや利り道が続いたので

ありがたい。
「何でこんなに人気がないのよ……」
　トゥアルフォンで時間を確認する。日没・日照から見て時差はない。午前八時……いくら何でも、ここまで人の姿がないなどありえるのだろうか。
　道端に紙束が落ちているのを発見する。よく見ると、まるで新聞のようだ。文字は読めないかもしれないが、何かこの世界のことがわかるかもしれない。迷わず拾い上げる愛香。
　軽くはたいて広げ、中身を確認すると……。あっさりと見出しが読める。日本語だった。
「────は？」
　それどころではない。よくよくタイトルを見れば、自分も知っている有名な地方新聞だ。
　愛あい香かは脱力し、へたり込んでしまった。安堵から、笑いすらこみ上げてくる。
「日本みたい、じゃなく、日本じゃない！　何よ、ただ遠くに飛ばされただけってこと⁉」
　何のことはない、早とちりだったのだ。なまじ世界間移動を体験したことがあるせいで、あの極彩色の空間を通って見知らぬ場所に飛ばされた先は、完全に異世界だと思い込んでいた。
「ったく、全然連絡つかないし、てっきり異世界だって────」
　はたと気づく。では何な故ぜ、トゥアルフォンは圏外なのだ。機能制限されてしまったのだ。
　もう一度、新聞を広げてよく見る。一面には、既視感のあるドームが、半分骨組みの状態で写真掲載されている。
「────マクシーム宙果……完成…………予定⁉」
　自分たちの住む市の郊外にある、コンベンションセンター。

　戦いの場にもなった馴な染じみある場所が、これから建造予定だという。
「嘘うそでしょ……」
　新聞の日付を慌てて確認する。
　二〇〇二年九月……。あまりにも当然のように、そう掲載されていた。

「ここは……あたしたちの世界の……過去だったの……⁉」

　時差がないどころではない。
　一〇年……八七六〇〇時間という途方もない時差が、愛香に降りかかっていたのだ。

◇

　さらに翌日、いよいよ焦る俺たちに、トゥアールは信じられない事実を告げた。地下基地に集まった俺、慧え理り那な、桜さくら川がわ先生、母さん、イースナとメガ・ネが、揃そろって驚きの声を上げる。
「過去の世界に転送された⁉」
「そうとしか考えられません。……いえ、科学者として、気軽に過去に飛ぶなど結論はしたくありませんが……。時間移動は、あらゆる科学が極点に達した先にある神の技術。私が知る限り、遥はるかに科学が進んだ世界でも、時間移動を可能としている世界は一つもありません」
　トゥアールすらもが原因不明と断じる、予想を超えた出来事──。
「わたくしたちが普段何の気なしに使っている空間や異世界間移動のための転送ゲートが、少しコントロールを失ってしまっただけで別の時間に繋つながってしまうだなんて……」

　慧理那の不安も当然のことだ。そんな危うさの上に成り立っていた利便だったのだ。
「すみません……こんなはずはないんです……。私も転送装置を開発するにあたりあらゆる危険を想定しましたから。エレメリアンの転送ゲートも、理屈の上では同じはずですし……」
　一体何な故ぜ。皆が押し黙る中、俺の脳裏をよぎったのは、忘れかけていた夢の一幕だった。
『最近ね、お兄ちゃんの世界と繋つながりやすくなってる気がするんだ』
　ロエルは確かにそう言っていた。俺たちの世界と異世界が繋がりやすくなっていると。
　想定できない例外──他の異世界と俺たちの違い。エレメリアンの部隊が逐ちく次じ投入され、何度も異世界からの道が作られるなんて、俺たちの世界以外にはそうそうないだろう。度重なる世界間移動が積み重なり、俺たちの世界へ繋がる空間に不都合が生じ始めていたら──。
　これは……トゥアールに言っていいことなのか。迷った俺は、イースナに助けを求めた。
「イースナ、お前空間を操る力を持っているだろう、愛あい香かに何かアプローチはできないか!?」
　イースナの空間干渉能力は応用範囲が広い。慧え理り那なを助ける際には、俺と慧理那、互いの心を接続もしてもらった。だが今回ばかりは、イースナも力なく頭を振った。
「さすがに、時間を隔へだててしまっては、無理……です……」
　モニターの上で目標を見失い、完全に一点から動かずにいるビーコンが、今の俺たちの心情そのものだった。

◇

　夜中の二時。こんな時間に基地にいるのは、慧理那の特訓以来か……。自分から降りてきたのは初めてかな。
　愛香が心配で、呑のん気きに寝てなんていられない。何かをしていないと落ち着かない。せめて、ちゃんと無事だとわかれば……。
　コンソールルームのドアが開く。視界に映るのは、この数日寸分違たがわず繰り返し見た、トゥアールが端末の前でモニターを凝視している姿だった。
　部屋の半ばまで進むと、トゥアールは俺に気づいて立ち上がった。
「あら!?　総そう二じ様!?　待ってください、愛香さんの邪魔がないんですよ!?　こんな時間に一人でやってきたりしたら私は……!!」
　しなを作りながら歩いてきたトゥアールは……足をもつれさせてしまった。
　慌あわてて肩を支える。
「……いつから寝てないんだ、トゥアール……」
　普段そんなに化粧なんてしないのに、腕一本分離れたこの距離でも明確にわかるほど、化粧で大きなクマを隠している。
「まさか、最初の日からか……」
「まさかですよ！　あ、髪の毛ぼさぼさなの気になります？　一緒にお風呂入りましょう！」
　服を脱ぎかけたものの、トゥアールは真顔の俺を見て苦笑し、椅い子すに戻った。
　普段コンソールパネルの前には置いていない椅い子すだ。ずっとそこでモニターを見ているために、移動してきたんだ……。
「……無理するな。モニターを見てればいいなら、俺が代わるよ。少し寝た方がいい」
　大丈夫ですから、と笑顔で気丈に振る舞い、それでも俺を気遣おうと

するトゥアール。
「…………よしわかった！」
　俺はトゥアールの横に立つと、少し芝しば居いがかった口調で提案した。
「トゥアール。これは夢だ。どうも俺、夢の中で寝ぼけてるみたいだ」
「……夢？」
「ああ。夢の中って、みんな無茶苦茶な行動するだろ。トゥアールも普段言わないようなこと、言っちゃうんじゃないか？」
　茶番と言ったらそれまでだが……伝わって欲しい。
「……わかりました。じゃあ、夢の中のトゥアールちゃんが、変なことを口走りますね」
　トゥアールは苦笑し、椅子を回転させて俺へと向き直った。
「私が……愛あい香かさんを過去に飛ばしてしまったんです」
「な……トゥアールのせいじゃないだろ‼」
　いきなりとんでもない話の飛躍を受け、俺はすかさず否定した。
「感情的な話ではなく、科学的な理屈です……。私、愛香さんに言っていたんです。幼い頃ころの愛香さんに、過去にタイムスリップして会いに行きたいって。そう口にしていたことで、愛香さんの中で時間と過去への意識が強まってしまって……時間跳躍を受け入れてしまった」
「たったそれだけで、責任を感じてたのか……？　……そんなこと言ったら、普段何も喋しやべれなくなるだろう⁉」
　むしろ、この数日の出来事から無理矢理原因になり得る事象を抜き出して、自罰を求めているようにさえ感じる。
　それだけトゥアールは、辛つらいんだ。自分を責めなければ、耐えられないほどに。
「トゥアールが小さい頃の愛香を可愛かわいいと思って……見たいなら、それでいいじゃないか」

「……え？」
　俺は、トゥアールの肩をそっと叩たたいた。
「きっとそれが、力になる。あんまりかっこいい理由じゃないけど……それが俺たちだろ？」
　体育祭で抱かかえた時よりも、さらに華きや奢しやで、儚はかなく感じる。普段、壁や天井にめり込んでいるとは思えない……普通の女の子なんだ。
「やりたいことだから、好きなことだから、力になる。……愛香を捜せるはずだ」
　トゥアールはか細い微笑を浮かべた。
「……夢、ですから……すみません。起きたら忘れてくださいね、総そう二じ様……」
「え……」
　トゥアールは立ち上がり、倒れ込むように俺に抱きついてきた。
「わかってます。みんな心配してるって……。でも私、虚無の思考時間シークタイム＝ゼロの使い手ですから……そりゃもう、色々考えちゃって……」
　柔らかく、温かな感触が……それでも、小刻みに震ふるえていた。
「愛あい香かは強い……。弱音を吐いたりしないし、大抵のことは自分一人で乗り越えちまう」
　背丈がほとんど変わらないから、トゥアールを抱きしめると、耳元で囁ささやく形になってしまう。少し、照れるけど……。
「お前と同じだ、トゥアール」
　慧え理り那なは、自分の弱さを吐と露ろすることで前に進めた。でも、トゥアールは違う。絶対に俺に弱音を吐いたりしないだろう。だから俺は、その弱音をうっかり聞いたつもりで頑張らなくちゃな。
「でも、あいつが本当にどうしようもなくなったら……自分じゃ無理

だってくじけてしまったら……その時に全力で守るのが、俺の役目だ」
「総そう二じ様……」
「科学でどうにもならないなら……こっからはいよいよ俺たちの出番だな、トゥアール」
　トゥアールの背中に手を回す。
　絶対に弱音は吐かない、強い子だってわかっていても……支えたいと願う。



「テイルブレスがなくても、愛あい香かにはツインテール属性がある……！　それがある限り、どんな時間の迷宮に迷い込んでも、俺たちは愛香を見つけてあげられるはずだ!!」
　きめ細やかな髪を指でそっと梳すいた。
「長い付き合いのツインテールだ。たとえ時空を隔へだてても、俺が必ず見つけてみせるさ」
「……そうですね。総そう二じ様と愛香さんは、幼おさな馴な染じみなんですから」
「それだけじゃない。俺の中にあるトゥアールのツインテール……。今頑張ってる、トゥアールの思い。みんなの願い……その全てが、大きな力になるはずさ」
「総二様……」
「ありがとう。頑張るトゥアールを見て……俺も、勇気が湧わいてきたよ」
　近くにいたから実感できなかったわけじゃない。
　ずっと感じていたけど、離れてしまったことでより、愛香のツインテールがどれだけいつも一緒にいたのかを切に感じる。
　俺の心にずっと息づいていたツインテールと、愛香のツインテール。
　この二つもまた、幼馴染と言えるのではないか――。

◇

　数日ぶりの睡眠よりも身体からだが求めていた、大切な少年の温ぬくもり。
　それを存分に得て、勇気が湧いてきた。
「……総二様……」
　また一人になったコンソールルームで、トゥアールは愛いとしく抱き

しめるようにその名前を呟つぶやき──。
「はーよっこらしょっと」
──服を脱ぎ始めた。
何をしようというのか。忘れないうちに何かを始めようというのか。
「おお、何じゃトゥアール。わらわにイベントＣＧのプレゼントか？」
上下下着姿になったところで、背後から声をかけられる。
テイルブラックに変身したイースナだった。
「ぎゃあああああああああああああイースナ！　何であなたが！　総二様にこっそりついてきて侵入してましたね!!」
慌てて白衣を引っ摑つかみ、後ずさる。変身したイースナには、力尽くでは敵かなわない。
「い、いつからいたんですか！　どこまで見てたんですか!!」
「はて、先ほど総二とすれ違いでやってきたゆえ、見たのは今の脱衣だけじゃが」
「……それならいいんです」
総そう二じに甘える姿など、全裸を見られるよりも恥ずかしい。
本当は……危なかったのだ。自ら禁きん忌きとした言葉。総二と、自分自身のために固く決めた誓約。……ツインテールにできないがゆえの無力感を、総二の前で吐と露ろしそうになってしまった。それを精一杯こらえたからこそ……あれ以上、甘えることができなかった──。
トゥアールはふうっと溜ため息いきをつき……ブラックは苦笑した。
「しかし、かつて愛した人がそれだけの無防備……戦士として逃げるわけには行かぬな!!」
据すえ膳ぜんを食いますとばかりににじり寄るブラック。
「貞操の危機……！　それ以上近づいたら、総二様を呼びますよ！　……あれ、いやむしろ呼びましょう！　あなたをダシにして私の裸を見せられて、願ったり叶かなったりです!!」

「望むところじゃ、わらわは初体験が３Ｐでも構わぬ!!」
「何であなたが交ざる前提なんですか!!」
　椅い子すに座り直し、モニターを見つめるトゥアール。
　やっと本来の元気を取り戻したその背中に、ブラックが語りかける。彼女もまた、皆と同じようにずっと愛あい香かを心配していたのだ。
「……トゥアール。トリケラトップギルディの人となりは、わらわも少しは知っているつもりじゃ。無関係の一般人を巻き込んだ以上、ただ基地に座していることなどできまい。最近はザコばかりじゃったが……おそらく、次に現れるのは、奴やつじゃ」
　元アルティメギル指揮官としての勘か、確信したように呟つぶやくブラック。
「その時がチャンス、というわけですね」
　かもしれない、というだけだ。奇跡的な確率だろう。
　だが、正規の追跡の保険として考えるには、割りのいい博ばく打ちでもあった。
「……これを見てくれ、トゥアール。メガ・ネから出してもらってきた」
　ブラックが取り出したのは、厚めのアルバムだった。
　それを開くと、二人の故郷の世界でトゥアールを盗撮した写真がわんさかと出てきた。
「あなた私の盗撮写真こんなに……!!」
　トゥアールの手が止まる。写真の自分が、ツインテールではない。
「そうじゃ。貴女あなたにはまだ話していなかったが……テイルレッドの正体がトゥアールではないとわらわが気づいたのは、このアルバムを見たからなのじゃ」
「あなた、それで……」
　イースナがレッドのテイルギアの認識攪乱装置イマジンチヤフを破っ

たのは、確かな証拠あってのことだったのだ。
「……過去に撮った写真までもが、トゥアールがツインテール属性を失ったことで影響を受け、このように変化した。時間が修正されたのじゃ」
　トゥアールは写真を見つめる。写真や記録映像さえも改かい竄ざんされることは、トゥアールもとっくに知り、人知れず悲しんだ事実ではあるが……今は、希望の再認でもあった。
「あらゆるものに勝る強制力を持つとされる時間にさえも、属性力エレメーラは干渉する。ならば、その逆もありえるではないか」
　そうだ。属性力エレメーラなら──心の力ならば、時間とも対等に戦えるのだ。
「……イースナ。多分総そう二じ様は、また無茶をするはずです。女の子を……ツインテールを助けるためなら、自分を省かえりみずに限界を超えてしまう方ですから……」
　ちらっとブラックを一いち瞥べつすると、すぐに視線を逸そらすトゥアール。
「あなたは最悪のストーカーですが……一応、戦力としては頭数に入っているんです。総二様の助けになってあげてください」
　顔をモニターに向けたままトゥアールがぶっきらぼうに差しだした手を、ブラックはそっと握りしめた。
「……嬉うれしいぞ、わらわを頼ってくれて……」
「同郷のよしみです」
「そして今はこの世界が、わらわたちの第二の故郷じゃ。住屋に恩は返さねばなるまい!!」
「……ですね」
　大おお仰ぎようにマントを翻ひるがえすと、ブラックは声こわ高だかに叫んだ。

「では、トゥアールが奪い損ねた総二の童貞、わらわがしっかりと回収してきてやろう」
「ふざけるんじゃありませんよ、それなら私が今から回収しに行きます！　……待ってください、奪い損ねた、ってどういうことです……⁉」
「いや、だからじゃな、トゥアールはあんなに無防備な総二に普段からエロゲーのルート確定前のごとく全く手を出さないという意味で……」
「あなたまさか⁉」
　異世界の少女たちがいがみ合いながらも笑い合い、手を取る。それは、異世界に立ち向かうために何よりも心強い絆きずなだった。

　コンソールルームの入り口で、母親コンビ──未み春はるとメガ・ネが、そんな二人を温かく見守り。互いに向き合って、そっと笑った。

◇

　異世界ならば、まだよかった。
　だが──過去の世界というのは、マグマ渦巻き嵐吹き荒れる異世界よりも、よほど異質な世界だった。
　この普通の町並み。普通の人々。
　普通の日常こそが、自分が異邦人であると否応なしに突きつけてくる。
　時間から切り離されるとは、人の営いとなみの……生命の否定に等しい。

　夕暮れの公園のブランコで、愛あい香かは一人黄たそ昏がれる。
　数日待っても、助けは来ない。いくらトゥアールでも、タイムトラベ

ルは不可能だろう。
「……そんなのできたら、小さい頃ころのあたしに会いに行くはずだもんね……」
　写真を見て喜んでいたトゥアールの顔が、今ではもう懐なつかしく感じる。
「……」
　トゥアルフォンを操作する。電話も繋つながらない。メールも届かない。ネットも見られない。
　丁てい寧ねいに操作を教えてもらい、愛香がやっとで使えるようになったマップアプリも、ＧＰＳが動作せず使用できない。時計の代わりにしかならなかった。
　愛香はトゥアルフォンを力任せに握りしめ、通話するかのように画面に向かって叫んだ。
「──ッ……嘘うそつき！　宇宙でだって、圏外にならないとか言ってたくせに!!」
　呆あきれ交じりに聞いていた説明を、愛香はしっかりと覚えていた。頼りにはしていなかったが……そんな風に大げさにスペックを語るトゥアールと、嬉き々きとして聞き入る総そう二じを見ているのは、嫌いではなかった。
「……ちょっと別の世界に来たからって、何よ……繋がりなさいよ!!」
　トゥアルフォンを地面に叩たたきつけようとして振りかぶり、すんでのところで踏みとどまった。
　遠くで、子供たちの遊び声が聞こえる。
　抱きしめるように握ったトゥアルフォンの画面に、大粒の涙がこぼれ落ちた。
「……帰りたい……」
　仲間の前では、絶対に見せなかった涙。総二の前では、絶対に吐かな

かった弱音。
「会いたいよ、そーじ……」
　守りたいもののために、挫くじけず、ボロボロになりながらも立ち上がる総二を支えるために、自分も絶対に挫けないと決めた。総二を守るために、強くなると誓った。
「助けて……助けてよ、そーじ……!!」
　だが、観み束つか総二がいないこの世界で、そのか細い心を支えるものは何もない。
　夜の帳とばりが降り始めた公園に、儚はかない嗚お咽えつが響く。

　その時━トゥアルフォンの画面が、淡い桃色に点灯した。
「ッ────!?」
　びっくりして取り落としそうになりながら、慌てて握りしめ、画面を見つめる。
　瞬間。
　愛香の耳みみ朶たぶを、失いかけていた希望が優しく撫なぜていった。

〈愛あい香かのツインテールって、綺き麗れいだよな〉

「……ぁ……」
　スピーカーから聞こえてきたのは、夢にまで見た少年の声だった。
　涙が引き、頬ほおに朱が差す。
　憔しよう悴すいしきっていた身体からだに、活力が戻ってきた。
　三秒にも満たない音声が、これ以上ない福音。愛香は、消えていく桃色のバックライトを最後まで見つめていた。
「でも、どうして……」

　説明を受けなければ電子機器の操作はろくにできない愛香にとって、ボタン一個でできない操作、起動しないソフト、ホーム画面にないアプリなど、搭載されていないも同然。保存されているファイルなど、確かめるはずもない。
　いつ、どんなファイルが悪いた戯ずらで仕込まれたかなど、確認するはずもないのだ。

『盗み録どりした総そう二じ様の音声を愛香さんのトゥアルフォンのアラームにしておいてあげますから！　ソロプレイのお供にお使い下さい!!』

「――――トゥアール……」
　名前を呟つぶやいた瞬間……たまらなく、笑いがこみ上げてきた。
「あはは……あははは！　あはははははっ……!!」
　体育祭の時に言っていたことだ。冗談だと思っていた。本当に仕込んでいたのだ。
　いや、そうだ。日常の軽口で出た提案も、当たり前のように実践するヤツだった。
　週に一度。それもこんな中途半端な時間に鳴らして驚かそうとしたのが、トゥアールらしいいやらしさだ。
　再び零こぼれた涙は、笑顔に彩いろどられる。
　ひとしきり笑い終えた後、愛香は手の平で涙を拭ぬぐった。
「アラームが鳴るってことは……」
　そして、夜空の星を見据えて堂々と言い放つ。

「――――時間に置いてけぼりにされてるってわけじゃ、ないわよね」

　他愛たわいのない目覚まし音アラームが、塵じん壊かいしかけた思いを繋つなぎ止めた。止まりかけていた思考を、力強く覚め醒ざめさせてくれた。
　愛あい香かは、再び黒画面になってしまったトゥアルフォンに向け、圏外の果てで意地悪く笑っているかもしれない主犯に向け、通話した。
「あんたの下ネタに乗っかってやるのは癪しゃくだけど……確かに、一人で頑張るソロプレイ助けにはなったわよ、トゥアール」
　悪友の名前を呟つぶやいて、はたと気づく。
　トゥアールは……自分の世界を守れなかった悲しみで、一番大切なものと決別し、世界を渡り歩いた少女は……ずっと、こんな思いを味わっていたはずなのだ。
　数日で音ねを上げ泣き散らした自分とは比べものにならないほどの時間を。
　みんなで旅行気分で異世界旅行をするのとはわけが違う。自分が体験したように、一人という最大の孤独がもたらす、異邦人であるという悲しさの再認が無限に続く旅を。
「本当にすごいヤツだったのね、あんた……」
　世界を超越する叡えい智ちではない。
　トゥアールの本当の強さは、今の彼女そのものなのだ。
「──小さい頃ころのあたしに……会いに行く……」
　自じ嘲ちよう気味に溢こぼした言葉を、しっかりと反はん芻すうする。
　たった一つだけ、希望があった。
　一〇年前のちびっ子でもいい。総そう二じに会いたい。
　どうせ過去に来たのなら、開き直ってそのぐらいはしてやる。姉のツインテールに総二が初恋に落ちる瞬間とやらを、この目で見てやる。
　ブランコに乗って黄たそ昏がれているなど、自分のキャラではないで

はないか。
　そこで愛香は、はたと気づく。
　外も自分の心も暗くてにわかには気づけなかったが、見覚えのある場所だった。

　そう。ここは──戦いの最中に転移された、家の近所の公園だった。

第五章　誰がためのツインテール。

「はあ……はあ……」
　愛あい香かは最後の力を振り絞って、ある場所を目指していた。
　あてもなく進み、散々歩き回った先が、トリケラトップギルディの攻撃を受けたあの公園だったとは、話ができすぎている。偶然ではない。
　テイルブレスも無く、トゥアルフォンの超機能も用を成さず。
　無力な身一つの自分に、たった一つだけ残った羅針盤があった。
　――――ツインテール属性が。
　かつて、総そう二じと戦った敵が誇らしげに語っていた。
　ツインテールとツインテールは導き合うのだと。
　それを総二も確信し、その信念を受け継いだ。
　まさに、総二の最強のツインテール属性は、多くのツインテールを呼び寄せている。
　同じ学校、同じ街に、世界最強レベルのツインテール属性を持つ者たちが次々と集まったのだ。観み束つか総二という名の太陽に導かれて。
　だから……今自分も、総二に会うためにここに来たのだ。
　無作為に道を選んでいたつもりが、総二を求めて彷徨さまよっていたのだ。
　幼い総二の顔を見たからといって、何が変わるわけでもない。状況が進展するはずはない。
　しかし、今の愛香にとって……それだけが、残された希望だった。

「あった……！」
　最後には疲ひ弊へいのあまり道のブロック塀に手をつきながら歩き、ようやく辿たどり着いた。
　一〇年後と変わらない姿で残っている、喫茶アドレシェンツァ。

　そして、隣には自分の家。
「……でもどうしよう、あたしの家に行っても、お父さんもお母さんもまだ日本にいる頃ころだし……お姉ちゃんも、小さい頃のあたしも、今のあたしを見たって……」
　悩んでいる間に、アドレシェンツァのドアが開き。
　中から出てきたのは、客ではなく、未み春はるだった。
「おばさん……!?　若っ……」
　慌てて愛香は通行人を装い、明後日あさつての方を向くが……未春は、愛香の隣で足を止めた。
　愛香をしげしげと見つめ、ぱあっと顔をほころばせる。
「あら、愛あい香かちゃんじゃない」

「ええええええええええええええええええええええええええええええ!?」
　あまりにも自然にそう呼ばれたので、愛香は近所迷惑も考えず絶叫した。
「お、おば、おばさ……」
「どうしたの、そんなに大きくなっちゃって！」
　信じられない。
　親しん戚せきなどと間違えたのならわかる。しかし、本人と呼んだのだ。
　面おも影かげがあるないにかかわらず、今、隣に住んでいる子供が大きくなった姿などと、何な故ぜこうも自然に連想できるのか。
　それどころか、未み春はるは愛香に指を突きつけ、さらにピンポイントな答えを導き出した。
「はは～ん……さてはあなた、未来からやってきた愛香ちゃんね！」
「ど、ど、ど！　どうしてそのことをっ!?」
　うっかり肯定してしまう愛香。もはや、何らかの技術でトゥアールが

過去の未春に連絡を取ったとしか思えない察しの良さだ。
　だが、そんな細かい理屈が通用する小さな人間ではなかった。
　迷わず、胸を張って答える未春。
「未来から来たっぽいからに決まってるじゃない！」
　無根拠な自信。一点の疑いもない確信。
　このマイペースさに、何度励まされ、救われてきたか。
「～っ……おばさぁん……」
「あらあら……」
　愛香は感極まって、未春の胸に飛び込む。この人はやはり……総そう二じの母親なのだ。
　無自覚に誰だれかを助ける、生まれついてのヒーロー。
　世界一の、ツインテール馬ば鹿かの──。
　安心したせいか、愛香のお腹なかが可愛かわいい音を立てた。
「あ……」
　どんなに蛮族と呼ばれようと、お腹からデスロッカーのシャウトのごとき爆音を鳴らしたりしないあたり、愛香もちゃんと乙女だった。
「お腹減ってるみたいね。上がってって。未来からのお客様に、特製のカレーごちそうしちゃうから‼」
「……はい！」
　知っている。一〇年前に完成したという特製カレー。喫茶店にそぐわぬスパイシーな香りを店内にとどろかせる、アドレシェンツァの名物。
　今でも、それは愛あい香かの大好物なのだから。

◇

　カレー皿を六皿積み上げて一息つくと、愛香は現在の状況をかいつまんで説明した。

　自分はトゥアールほど説明上じよう手ずではないが、当の未み春はるは一〇年後と変わらずとてつもない順応性で、属性力エレメーラやアルティメギルの話を呑のみ込んでいく。
「へえ～、総そうちゃんが女の子に変身！　そりゃまた変化球できたわね～、普通に育ててるんだけどなあ！」
「あ、そこは全然気になさらず……ヘンタイ科学者の趣味の部分が大きいらしいので……」
「でも、ツインテールの力で変身かあ……おもしろ～い！」
　まだ二〇代なせいか、未春のノリも今より少し若く感じる。
「最近総ちゃん、そのツインテールって髪型に興きよう味み津しん々しんでねえ。三つ子の魂百までっていうけど、一〇年後も好きなのねえ」
「……そっか……この頃ころだったんですね、そーじがツインテールのこと知ったの」
　もちろん総そう二じは、赤ん坊の頃から母乳の代わりにツインテールを飲んで育ったような規格外の人間ではない。
　ツインテールを好きになった時期、始まりのツインテールがちゃんとあるのだ。
「……始まり……初恋のツインテール……」
「うん？　どうしたの、愛香ちゃん」
「あの、そーじ、誰だれかのツインテールがいいとか言ったりしてます？」
「う～ん、雑誌とか見て喜んでたけど、特に誰がとかは言ってないわよ。お隣の愛香ちゃんも恋れん香かちゃんも、ツインテールじゃないし」
「ですよね……」
　一〇年前……この頃は、道行く人が「ツインテールにしちゃった」などと気軽に言えるほどには存在も名称も浸透していない。総二も知った

きっかけは雑誌やテレビなのだろう。
　この頃知識として得たツインテールが、総二の中で愛に昇華するきっかけがあったのだ。
　それこそが、初恋のツインテール。
　ではやはり……一度だけ総二の前でツインテールにしたという、姉の恋香がそうなのだろうか。これからして、総二に見せるのだろう。
　いつまでもここに滞在はできないが、できることなら、恋香がツインテールを見せることを考え直してもらえれば……そんな思いに囚とらわれる。
　トゥアール的な考え方で何だが……総二のツインテール童貞を守りたい。
　愛香は真顔で悩んだ。

「愛あい香かちゃん、疲れてるでしょ、お風呂入ってらっしゃい」
　しかし、未み春はるの提案が非常に魅力的で、邪念は一時吹っ飛んでしまう。
「はい、ありがとうございます……！」
　一応、制服のポケットに入っていたウェットシートで毎日身体からだを拭ふいてはいたが、それではまるで心こころ許もとない。
　勝手知ったる観み束つか家、未春の案内もそこそこに、愛香は脱衣場へと入っていく。

「ただいまー」
　それと入れ替わりでリビングに入ってきたのは、小さな男の子だった。
「お帰り、総ちゃん」
　ソファに腰掛けた若き未春が呼んだのは、幼い日の総そう二じだっ

た。
　真新しい胴着をバッグに入れている。愛香の道場で一緒に稽けい古こを終えて帰ってきたようだ。
「くそー、また愛香にまけちまったよ……！」
「あらあら、うふふ」
　総二は玄関の靴くつに気づいていたようで、何の気なしに尋ねた。
「おきゃくさん、きてるの？」
「うん、お母さんのお友達……あ」
　未春は悪いた戯ずらっぽい笑みを浮かべ、総二の肩を押した。

「……総ちゃんも、お風呂入ってらっしゃい。そのお姉さんと一緒に」

◇

　ティラノギルディの自室で、トリケラトップギルディは詰問を受けていた。
「……お前とこうして差し向かいで話すのも、随分と久方ぶりだな」
「二人で話しても、ティラノギルディ殿が滑られるからな……」
　美少女フィギュアが満載の部屋だ。
　四方どこを見回しても、稼働・固定・そして大小を問わず、様々な美少女フィギュアが取り巻いている。
「今日は与よ太た話ばなしなどない。貴様の行いについて聞きたくてな」
　どれをどう組み合わせてもいい。作品の垣根を越えて百ゆ合りにもできる。
　この部屋は、ティラノギルディの自室でもあり、底なしの百合妄想によって属性力エレメーラを高めるための、百合修練場でもあった。

「ただの人間を戦いに巻き込み、行ゆく方え知れずにしてしまったと聞いたが。真か」
「……真だ」
　二人を分かつテーブルの前には、八分の一スケールのツインテール少女のフィギュアが二体置いてある。
　笑顔と、怒り顔。
　トリケラトップギルディが入ってくる前に置いてあったこのフィギュア、ティラノギルディの心情を表しているのは──後者だろう。
「属性力エレメーラを奪おうと逸はやった末のことだと聞いておるが……何な故ぜ、そこで助けようとしなかった。敵の刃やいばに背を向けてでも、己が罪は削そぐ、それが死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士の在り方であろう」
「返す言葉もない。どの道、あの時もはや私の手には負えなかったのだ」
　エレメリアンにとって禁きん忌きの一つ、戦士ではない人間に危害を加えること。
「貴様らしくもない。失敗しても何度でもやり直すのが、幼馴染属性チャイルドフツドの盟主たる貴様の信条であろう。何故ゲートに巻き込んだ？　よもや、その場で奪うのではなく攫さらいあげて属性力エレメーラを奪おうとしたのではあるまいな？　そんなもの、戦士の風上にも置けない外げ道どうの行いだ」
　トリケラトップギルディに、言い訳は無かった。攫おうとしたのではなくとも、あれは後で必ず──そんな自分の稚ち気きが招いた事故。存分に非難を受ける義務がある。
「……角を守ったのではないのか」
　ティラノギルディの問いに、力なく首しゅ肯こうする。
「この角を失えば、私は私でいられなくなる。手傷を負わされて気が動

転してな……」
　トリケラトップギルディにとっても、不幸な出来事だった。
　しかし、それで済まされるほど人間の命は軽くなく、エレメリアンの誇りも小さくはない。
「あの少女を誤って時空の彼方に飛ばしてしまった時の、テイルレッドの叫びが耳に残って離れぬのです……。よき好敵手であったテイルレッドを憎悪の化身としたとあっては、我われらとこの部隊いずれの者にも合わす顔がありませぬからな……。再び出撃いたします」
　ティラノギルディは、どうする気だ、とは聞かなかった。
「ツインテイルズ……角を守って勝てる相手ではなかろう」
　トリケラトップギルディは、こうするつもりです、とは答えなかった。
「帰るまでに、場を和なごます面白い駄だ洒じゃ落れの一つでも考えておいてくださらぬか。あなたのフォローは骨が折れるのでな」
「抜かせ。貴様の助けなどなくとも、このような負け犬部隊の心、俺一人でしっかりと摑つかんでみせるわ」
　トリケラトップギルディは、初めてティラノギルディへ向け優しく微笑ほほえんだ。
　何を言っても面白く感じない、孤独の帝王がもたらした、真実の笑顔。
　それは……喜びだった。
「……それを聞いて、安心した」
　幼おさな馴な染じみである部隊長に背を向け、覚悟を決めた戦士は、部屋を出て行った。
「……フン……」
　少女のフィギュアを二つ並べ、眺めるティラノギルディ。
　賽さいは振らなければ数字が出ない。フィギュアは、自ら決めてやら

ねば百ゆ合りかはわからない。
　あるいはこの二人は、仲のいい幼馴染かもしれないのだ。
　部隊長と、副官。
　その関係は、本当はもっと簡単に、いつでも変えることができたのではないのだろうか……。

◇

　ツインテールを解ほどき、リボンを脱衣かごに入れる。
　野宿に近い数日だったが、朝ツインテールを結ぶ習慣だけは変わらなかった。
　洗濯機を借り、別々のネットに入れた下着と制服、シャツ、靴くつ下したを順に入れていく。
　洗剤と柔軟剤を入れ終わったところで、Ｔシャツとズボンが放り込まれた。
「おれもいれる！」
　小さな男の子が靴下とパンツを脱ぎ、洗濯機の中に追加していた。

　――全裸の自分の前で。

「ひゃあああああああああああああああああああああああ!?」
　慌てて近くにあったバスタオルを引っ掴つかみ、胸から下を隠す。
　確かに鍵かぎはかけなかったが、あまりにも自然に入ってきたため、反応が遅れてしまった。
「？　どーしたの、お姉ちゃん」
　一方、男の子は気にせずすっぽんぽんだ。
　愛あい香かは深呼吸をして落ち着き、目の前の男の子をよく見た。

……もちろん顔を。
「ま、まさか……そーじ……君？」
「そうだよ。母さんが、お客さんのお姉ちゃんといっしょに、おふろはいってきなさいって」
　天使のような笑顔で微笑ほほえむ総そう二じ。天使さながらに全裸だ。
（未み春はるおばさん～～～～～～～～～～～～っ!!）
　一体何を考えているのだ、と心の中で憤いきどおる愛香。
　確かに、未春はいつも総二との仲を焚たき付けようとはしていた。
　だが偶然飛ばされた過去で、しかも五歳の総二相手にＨなハプニングを起こしたところで、何の意味もない。
　案の定、目の前の総そう二じは自分のことなど全く気にしていない。
　一〇年後の総二なら、一応女の裸を（熱血時以外で）見れば、顔を赤らめるくらいはするのに。
「お姉ちゃん、スイッチ」
「あ、う、うん」
　総二に促うながされ、洗濯機の蓋ふたを閉めてスタートボタンを押す。
「入んないの？」
　愛あい香かは頷うなずき、覚悟を決めてバスタオルを外した。
　身体からだが震ふるえる。目の前にいるのが総二だと思うと、どうしても落ち着かない。
　子供だとわかっていても、全てを晒さらすのは勇気がいる。
　条件反射的に胸や下を手で隠そうとしてしまい、子供相手にかえって不自然なのだと言い聞かせて踏みとどまる。愛香ははっとして、総二に向き直った。
　──じっと見ている……!!

　幼い総二が、愛香の身体を遠慮なく見つめていた。上から下まで、純粋な瞳ひとみで余さずなぞっていった。
　不意に、目の前の五歳の総二に、よく知る一〇年後の総二の姿が重なった。
　愛香はぞくりとして身体を震わせ、踏みとどまった。



（こ、これじゃ会長のこと何も言えないじゃないっ……）
　絶対にわかってはいけないのに、慧え理り那なの趣味が理解できるように思え、愛あい香かは大きく頭を振った。
　それにしても、何な故ぜこの子は、こんなにも裸を見てくるのか。
　まずい。まさか、自分の魅惑の肢し体たいが、あどけない男の子に性の目覚めを誘発してしまったのでは……!?
　一〇〇％ありえない皮算用で、罪の意識を感じる愛香。
　精神を落ち着けるために、愛香も負けじと総そう二じの下腹部に視線を落とした。
　まだまだそーじと呼び捨てにする遥はるか前の段階、そーじ君……いや、そーじきゅん、ぐらいの総二だが、見せ合いっこだと思えばバチは当たらないだろう。いっぱい見ておこう。
「お姉ちゃん……」
「見てないわよ!?」
　急に総二に声をかけられ、懲ちよう役えき相当の偽証で武装する愛香。
　総二もまた、愛香を凝視するのを再開した。
　だから、そのあどけない視線をこれ以上向けられると、会長のように──。

「──お姉ちゃんって、おっぱいちっちゃいね」

　無む垢くな子供ならではの、流れ星のようなドストレートな感想に、愛香は総二の得意技・口からエクトプラズムを披ひ露ろうした。
　しかし、子供相手に腕力でツッコむほど、愛香は子供ではない。たくさん見たことで相そう殺さいとしておこう。
　浴室に入る。せっかくなので、総二の髪を洗ってあげた。

　総二がぎゅっと目を瞑つぶっているのを前の鏡で確認しつつ、力加減について聞く愛香。
「痛くない？」
「うん。母さん、もっと強いから」
　年とし頃ごろの男の子なので嫌がるかと思ったが、素直に自分に身体からだを預けてくる。女の子と肌を触れ合わせることに、何の抵抗もない。
「か、かわいい……」
　小さく、すべすべの背中が自分のお腹なかに触れる感触に、愛香の中で何かこみ上げてくるものがあった。
「え、なに？」
「何でもないからね!?」
　……せっかくなので、身体も洗ってあげることにした。せっかくなので。
　泡を流し終え、目を泳がせながら愛あい香かは提案した。
「じゃ、じゃあ、お姉ちゃんと一緒に入って、一〇〇数えよっか」
　何な故ぜ一緒に浴槽に浸つかるだけなのに声が上うわ擦ずってしまうのか。
「おれ、一〇〇よりはいれるよ!!」
　馬ば鹿かにするな、とばかりに小さなお尻を晒さらして浴槽をまたぐ総そう二じ。
「か、かわいい……」
「え、なに？」
「何でもないからね!?」
　小さな総二を膝ひざの上に乗せ、湯船に浸かる。数日の疲れが溶けて消えていくようだ。
　それにしても、何て素直でいい子だろう。

愛香の記憶では、子供の頃ころは、もっと総二と喧けん嘩かをしていたような気がするが……それは多分、同年代の女の子に負けまいという男の子の精一杯のプライドだったのだろう。
祖父の道場で総二が一緒に武術を習うようになったのも、愛香に負けたくない……その気持ちからだったという。
女の子のようだと周囲にはよく言われていたが、昔から総二は内に秘めた熱さだけは変わっていないのだ。
（――そう、変わってない……んだよね……）
この子は総二なのだ。
トリケラトップギルディの言う通り、幼おさな馴な染じみとは、停滞した関係。
愛香も、トゥアールや慧え理り那なたちのようなライバルが現れるまで、その関係でどこか満足してしまっていた。
そして、その関係が板についてしまったからこそ、これから進展するのは困難かもしれない。
だが、今のこの素直で小さな総二なら……好きになってもらえるよう、頑張れば。
幼馴染という関係を脱して、この世界で一緒に生きていけば……。
このまま成長すれば……総二が一五歳の時、愛香は二五～六歳。今の尊みことより年下なのだ、年の差も十分常識的な範囲ではないか。
脳裏を現在の総二の笑顔がかすめ、愛香は少しでもそんな考えに至ってしまった自分を恥じた。
だがそれもこれも、この可愛かわいい総二がいけない。
愛香は指で、総二の頬ほおをつん、とつついた。ぷにぷにしている。
「くすぐったいよっ」
反応も可愛い。
（……頬属性パフのマンボウのやつの気持ちがわかっちゃうなん

て……）

　このまま総二の全身に悪いた戯ずらをし続ければ、それだけで、今まで倒し続けたエレメリアンたちに共感してしまいそうだ。

　いや……違う。エレメリアンどころではない。

　シャワーの方に向き直り、鏡に映った自分の顔を見る。

　笑っていた。涎よだれを垂らさんばかりに口角が上がっていた。

　──姉と同じだ……。

　あれだけ尊敬していたのに裏切られたと感じた、自分の姉と……。

　そして、トゥアールと同じだ。

　愛めでる対象が小さな女の子か男の子かの差だけで、もはや今の自分は、トゥアールと何が違うというのか。

　待て、諦あきらめてはいけない、腐っても自分がときめいているのは、惚ほれた男の過去の姿だ。この子だけだ。範囲が無差別なトゥアールとは違う。

　虚むなしいので、想像を止やめた。

（どっちもどっちね……）

　もし帰ることができたら、もう少しだけトゥアールの趣味に理解を示してあげたいと思った。

　総そう二じの小さな身体からだを丁てい寧ねいにバスタオルで拭ふいてあげる愛あい香か。服を着る前に飛び出していったかと思うと、程なく総二は何かを手にして戻ってきた。

「これあげる」

　差し出す仕草がお茶目で、笑顔で受け取る愛香。もう、全裸には慣れた。

　何かの小袋のようだが、お菓子か何かだろうか。

「なーに？　これ…………………………胸パッド……」

すぐに気づけたのは、愛香も同じようなものを何度も自分で買ったからだ。海に行く時は、それこそ山盛り買った。

「おっぱいちっちゃいひとがつかうんでしょ？　母さんにきいたんだ」

初めて、観み束つか家の教育方針について口を出させてもらいたくなった。

「ど、どうして総二君はこれを買ったの……？」

プレゼントには変わりない、笑顔を崩さず優しく問い詰める愛香。

「愛香にあげようと思って、母さんとデパートにいったときにかったんだけど、こどもにはつかえないんだって」

「何で……愛香ちゃんにあげようと思ったの？」

守秘義務が皆かい無むな子供ならでは、総二は個人情報をあっさりと暴ばく露ろした。

「だって愛香、むねが小さいって気にしてるからさ」

「はあ⁉　馬ば鹿かでしょあたし⁉」

「お姉ちゃんが⁉」

「あ、ううん、何でもない……」

全然覚えていなかった。そういえば、自分もいつ頃ごろから貧乳を気にしていたかなどとうに忘れてしまった。

せいぜい芽め生ばえは小学校高学年ぐらいから、そして中学に上がるあたり……思春期から、本格的に気にし始めていたのかと思ったが……。

まさか、五歳児の身空ですでに気にしていたとは……。

「恋れん香かお姉ちゃんのむねがふくらんできたのに、自分はふくらまないからって」

「……当たり前でしょ……」

我わがことながら、頭痛に襲おそわれる愛あい香か。

五歳の……子供の対抗意識というものは、大人から見れば意外なもの

だ。でも、この頃の自分は、姉に負けまいと必死だったのだろう。総そう二じが愛香に対抗意識を燃やしていたように、自分は一番身近な同性である姉に、子供ながら反発していたのだ。

　愛香は総二を精一杯の大人スマイルで諭さとした。

「愛香ちゃんに、今は小さくて当たり前なんだから、気にしないでって言ってあげて！」

「そういう風に言ったけどさ、聞かないんだもん。愛香」

　できた子だ。もう言ってあげていたとは。でも、その返しは納得だ。総二に言われればムキになる、そういう性格のはずだ。

　三つ子の魂百まで、とは先ほどの未み春はるの言だが──自分もそうだったのだ……。

「でもありがとうね、そーじ君。これ、もらっておくわ」

　胸パッドを、畳んだ制服のポケットに仕舞おうとした愛香だったが──。

「今つけてよ」

　総二にせがまれ、固まる愛香。

「………………」

「見たい」

　巨大ロボットをバラバラに飾るよりも、合体させて飾りたい、というような、とりあえず見てみたい、という男の子心理。

　しぶしぶ愛香は、ブラジャーのパッドポケット（標準搭載）に、総二から受け取ったパッドを入れ、見せてあげた。

「はい。どう？」

「……あんまかわんなくない？」

　やはり、子供の意見には何の忌き憚たんもなかった。

「元がないからパッドは山盛りにしないと意味がないの！」

「そっかあ、ごめんお姉ちゃん……」

　しゅんとする総二。きゅんとする愛香。
「い、いいのよ、ありがとう、大事にするわね」
　何だ、このプレイは。
　何な故ぜ自分は、五歳の男の子に命じられるがまま胸パッドをガン見されながらつけ、その上で小さい、と罵ば倒とうされなければいけないのだ。
　しかも、総そう二じが可愛かわいいから困る。
「そーじ君。もう少し大人になったら……愛あい香かちゃんの胸に興味持ってあげてね」
「え？　う、うん、わかった」
　未来への先行投資、情操教育を忘れない往おう生じよう際ぎわの悪さは、さすがだ。

◇

　トゥアールは、さすがに空から元げん気きすら出せないほど憔しよう悴すいしきっていた。
　いつもは戦いに関係のない談笑の場である地下基地。ムードメーカーの一人がおらず、一人が落ち込んでいるだけで、ここまで雰囲気が変わってしまうのか。
「……信じてもらえないかも知れないけど……愛香が無事なのは、なんとなくわかるんだ」
「本当か、観み束つか」
　桜さくら川がわ先生もやつれている。もちろん、ニュースでのアナザーブルーの扱いのせいもあるのだろうが……。
　この一両日、俺はツインテールへのコンタクトを試みた。
　地上から太陽系の彼方に住まう宇宙人に交信を届けるような身も蓋ふ

たもない作業ではあったが、自分の身体からだの一部のように記憶した愛香のツインテールに、諦あきらめずにアクセスを続け……薄ぼんやりと、その存在を確信できるようになった。
　夢うつつの勘違いの可能性だってある。だが、愛香が過去にいるというのなら、共に成長してきたツインテールは、時間に刻まれた俺たちの足跡のはずだ。
　目印ビーコンはある。あとは、もう一度扉を開かせる。
　トリケラトップギルディが来なければ、話は始まらない──。
「……観束君。わたくし、津つ辺べさんを助けられる能力がないか、属性玉エレメーラオーブを調べようとしたのですが……その中で、一つ無くなっているものがありましたの」
「何だって……？」
　慧え理り那なが気になる話を振ってきた矢先、無機質なアラートがコンソールルームに響き渡る。
　とうとうおっぱいですらなくなったこの機械的な警報が、トゥアールの敵への怒りを物語っていた。
　待ち望むなんてしたくはないが……モニターに映ったエレメリアンは、この数日、アルティメギルの基地に乗り込んででも引きずり出してやろうと思っていた因縁の相手だった。
「トリケラトップギルディですわ……！」
　慧え理り那なに続き、イースナも立ち上がる。
「や、やっと……出てきた……!!」
　場所は男の娘属性ガールズボーイのときとは別の女子校。お嬢様校ではなく、普通の高校らしい。
「ど、どうして……？　百合属性ガールズラブのティラノギルディなら、ともかく……あいつが……」
　イースナは別のエレメリアンを連想したようだが……。

「確かに、幼おさな馴な染じみの女の子を好んでいたトリケラトップギルディが狙ねらうなら、共学の方がいいはずですが……」
　イースナやトゥアールは警戒しているようだが、あいつが現れた以上、うかうかしてはいられない。
「罠わなでも何でもいい。みんな、いくぞ！　倒すことじゃなく、あいつにあの時のゲートを使わせることを最優先に！」
「ええ、それと、退却をさせないように、ですわね!!」
　俺と慧理那、イースナ、メガ・ネは頷うなずき合い、出撃ゲートへと走る。
　愛あい香かを助けるため──決戦だ!!

◇

　皆が出撃した後、尊みことだけがコンソールルームに残っていた。
「尊さん。どうかしましたか？」
「……トゥアール。ちょっといいか」
「はい？」
　右腕のブレスを一いち瞥べつし、
「もしものために、貸しておいて欲しいものがある」
「……もしも……？」
「ああ。だが、使うことになった方が、私はいいと思うぞ」
　何か企たくらみのある……頼もしい、大人の微笑を浮かべる尊。トゥアールは頷き、話を聞いた。

◇

　夜八時を過ぎたぐらいだろうか。風呂から上がってしばらくは借りた

パジャマで過ごしていた愛香だったが、洗濯機での乾燥が終わり、未み春はるが制服やシャツにアイロンをかけてくれたので、それに着替えた。
　念のためだ。過去から持ってきた衣服を常に身につけておかなければ、帰ることができた際に衣服だけがここに置き去りになり、自分は裸のまま転送されるという間抜けなことになりかねない。
「はい、愛あい香かちゃん」
「ありがとうございます」
　同じく乾燥の終わったリボンを未み春はるから受け取る。
　洗面所に行くまでもない。ツインテールなら、目を瞑つぶっていても結べる。
　ものの数秒で両方結び終わると、一部始終を見ていた未春に褒ほめられた。
「大したものねー。うふふ、それが総そうちゃんのためだなんて、おばさん嬉うれしい」
　自分でそう呼んでおいて何だが、女学生でも通用する目の前の未春がおばさんと名乗るのも違和感がある。
　だが、それよりも恐ろしいのは、自分の状況を説明する際に総そう二じのためにツインテールにしていることなど一言も説明しなかったのに、このとおり看かん破ぱされてしまっている点だ。
「あの、未春おばさん……」
　愛香の言葉は、透すき通るような驚き声によって遮さえぎられた。
「うわあ……！」
「……そーじ……君？」
　眠ったと思った総二だが、パジャマ姿でリビングの入り口から愛香を見ていた。
　ソファから立ち上がって近づくと、総二の方からも愛香へと駆け寄っ

てきた。
　前から、横から、飛び跳ねるようにして愛香のツインテールを見つめる総二。
　ひたすら純粋にツインテールに向けられる、少年そのままの無む垢くな瞳ひとみ。
「すごい……お姉ちゃんのツインテール……きれいだ」
「……え……」
　自分の心を救ってくれた目覚まし音アラームと同じ言葉に、愛香の胸は高鳴る。
　同時に──居い心ごこ地ちのよいこの場所との、決別を決意させた。
「……おばさん、ちょっとだけ、そーじ君と二人っきりで話してきますね」
「うん、いってらっしゃい」
　手を振り、笑顔で見送る未春。
　愛香は総二の手を取り、二階の総二の部屋へと向かった。一〇年前から変わっていない、愛香の部屋と窓を挟んで向かい合わせの部屋を。

　素直に部屋へとやってきた後も、飽きずに総二はずっと愛香のツインテールを見つめている。
「もう。そんなにいいもの？　これ……」
　愛香は自分のツインテールを片房摘つまみ、総二の小さな手の平の上に乗せた。
「もちろん！　こんなにきれいなツインテール、はじめてみたよ!!」
　総二は恐る恐る、愛香のツインテールをきゅっと握りしめた。
「こうすると、なんかすごくあんしんする……」
　あまりにもいつも通りすぎて、つい自分のツインテールを触らせてしまったが……今、総そう二じは初めてツインテールを触ったのだ。

もう……疑う余地もない。
ＳＦに明るくない自分では、どういう理屈なのかはわからない。タイムトラベルの絡んだ出来事はまるで、卵が先か鶏にわとりが先か、を壮大なスケールでやるようにも感じられる。
総二がツインテール好きだからこそ、愛あい香かはツインテールにするようになり、ツインテール属性を得た。
ツインテール属性を得たからこそ、トゥアールと出会い、ツインテイルズとなり、戦いの中で過去にやってきた。
そして……総二がツインテールを本格的に好きになる一因を担ってしまった。
時間の輪がどうなっているのか、難しいことは理解できなくても、わかることがある。
総二の初恋のツインテール……それは、自分だったのだ。
ついでに、無意識にツインテールを触る癖くせの原因を作ったのも、自分なのだろう。
「……ねえ、総二くん。ツインテール……好き？」
「うん！　俺、ツインテール大好きだよ‼」
その迷いのない答えは、一〇年後も変わらない。だから……愛香の気持ちも、一〇年間、変わることはなかったのだ。
愛香は膝ひざ立だちになると、そっと総二を抱きしめた。
「お、お姉ちゃん……？」

「お姉ちゃんも、大好きだよ……」

この先何年……何十年。その思いは変わらない。
流れゆく時間に刻まれた約束が、その証だった。
「ごめんね、あたし、胸ないから……抱きしめても、痛いよね……」

「……でも、お姉ちゃん、あったかいよ」
　総二の頭を優しく撫なでる。
「ありがとう、そーじ君。お姉ちゃん……頑張るから──」

「あ──────────────────っ!!」
　甲かん高だかい声が響き、部屋の窓が開け放たれた。
　ベッドに着地した幼い愛香が、親の敵かたきでも見るかのような目で、愛香を睨にらむ。この年ですでに、窓から総二の部屋への移動を苦もなく行っていたのだ。
「ちょっとそーじ！　だれよこのおんな!!」
　格闘技の審判がブレイクをするように、抱き合っていた二人の間に割り込んで引きはがす幼い愛あい香か。
「母さんのおともだちだって……ほら、すっげえきれいなツインテールだよな!!　おとなのひとってかんじだ……!!」
　涙目になって、愛香を睨にらみ付ける幼い愛香。
（そういうことだったんだ……）
　年上のツインテールがどれだけ驚威か、もう幼い愛香は知ってしまっていたのだ。
　だから、泣きべそをかいてまで姉にツインテールにしないでと頼んだ。
　おそらく、そう言う前にすでに恋れん香かは総そう二じにツインテールを見せてしまっていたのだろうが。
「ふん、ちっちゃなおっぱいで、どこがおとなよ！　あたしはあと一〇ねんもしたら、ばいんばいんになるんだから!!」
　我わがことながら、ご愁しゅう傷しょう様さま、と言わざるを得ない。けれど、その気持ちは大事にして欲しい。一〇年経たっても、自分はまだ、諦あきらめていないから。

「そーじ君。愛香ちゃんと仲良くね」
　愛香は最後によく見えるようにツインテールをかき上げると、総二の部屋のドアを開けた。
「あっ、待って！」
　追いかけようとした総二を、幼い愛香が押し倒す。
「だーめー！　いっちゃだめー!!」
「ぎゃ――――――！　いだだだだだ!!」
　幼い総二は、幼い愛香に技をかけられ悶もん絶ぜつしながらも、天てん真しん爛らん漫まんな笑顔とともに愛香を振り仰いだ。掛け替えのない約束を結ぶように。
「お姉ちゃん！　また……あえるよね!?」

「……うん。そーじ君が……ツインテールを愛する限り、ね！」
　再会を願う必要はない。自分はいつだって、あなたの側そばにいるのだから。
　互いの小指を差し出す必要はない。結ばれた心のツインテールとツインテールこそが、何よりも確かな未来への誓いだから――。

　幼い愛香がムキになって力を込めるのを見て苦笑しながら、愛香は総二の部屋を出た。
　よりにもよって、未来の自分のツインテールに対抗してツインテールにし始めるとは、つくづく、戦う相手を間違えている女だ……。
「あんなに昔からわかりやすく好き好きオーラ出してんのに、気づきゃしなかったのね、あの馬ば鹿か……」
　瞬間―愛あい香かの身体からだを、光が取り巻き始めた。
「まさか……!?」
　しかし、観み束つか家に辿たどり着き、総そう二じと出会ったときか

ら、こうなる予感はあった。
　この過去せかいで……もう、やるべきことはないということなのだろう。
　急いで階段を降りると、未み春はるが腕組みをして壁にもたれかかっていた。
「……とうとう、この時が来たのね……」
「似たようなこと、未来でも言ってましたよ、未春おばさん」
　全身が発光しているのを見ても、全く動じない。本当にすごい人だと思う。
「おばさん。お別れみたいです。……未来のおばさんに、何か伝えることあります？」
　別れを惜しむこともなく。それどころか、この一いち期ご一いち会えに感謝するように、未春はからっとした口調で返答した。
「うふふ。なーんにも。だって、未来の私は何も覚えてなかったんでしょ？」
「……そういえば……」
　それだけではない。総二や自分たちが、一番肝心なツインテールの始まりの記憶にだけもやがかかっていたのも、もしかすると──。
「じゃあ、その方がいいわよ。……多分、そういうものなんでしょ、時間って」
　この手の話は、未春の方がずっと理解が深いだろう。
　愛香はお辞じ儀ぎをし、今にも訪れるであろう瞬間を待ったが──。
「でもね愛香ちゃん」
　少しだけ真剣になった声こわ音ねの未春に呼び止められた。
「おばさんは一〇年後を楽しみにしてるから、きれいさっぱり忘れちゃうんだろうけど……」
　ドタバタと床が叩たたかれる音や、時たま総二の悲鳴が聞こえてく

る、階上を見上げながら。
「今から未来が始まる子は……記憶はなくなっても、心が覚えてるかもしれないわね～。大切な何かを！」
「……はい！」
　愛香が頷うなずくと同時に、彼女の身体を極彩色の力場フィールドが取り囲み。
　空間に溶け込むようにして、消えた。

　程なくして、リビングに総二の首を脇わきで固めた愛香が降りてきた。
　大人の愛香がいなくなったことを確認し、ようやくむくれ顔を解ほどく幼い愛香。
「おばさん、あたし、ツインテールにする！」
　総二が喜ぶのを見て、嬉うれしそうに頷く愛香。
「あらあら、どうしたの愛香ちゃん、嫌がってたのに」
「ほんとか!?」
「おっぱいはすぐ大きくなるから……ツインテールにすれば、さっきの女にかてるもん！　そしたら、すぐにやめるけど！」
「えー！」
　幼い愛あい香かは、すぐにツインテールにとりかかる。さっきの女はこうだった……そう言いながら結び始めるが、その「さっきの女」は、やがて記憶から消えるだろう。
　しかし、少年には見えていた。少女は結び始めた。

　永と久わに色褪あせぬ、輝くツインテールを。

◇

見渡す限り極彩色のトンネルの中、愛香は必死に耐えていた。
「……これは……！　やばいわ……!!」
愛香を覆おおった力場が、右へ左へとピンボールのように跳ね回る。
行きはただ翻ほん弄ろうされるだけだったが、帰りは確固たる意志が支えている。
強く願う。念じる。想像する。思い描く。
他の異世界に飛ばされず、過去の世界に飛ばされたのは、おそらくトリケラトップギルディの能力が強く関係しているのだろうが――一〇年前のあの世界に辿たどり着けたのは、恋れん香かやトゥアールとの会話で、愛香が強く思い描いていたからだ。総そう二じの初恋のツインテールは誰だれなのかと。
ならば帰路は、逆に帰るべき場所を強く、強く思い描かなければいけない。
そんな少女の決意をあざ笑うかのように。亡者が生者の足を摑つかんで引くかのように。
異世界を繋つなぐトンネル……大海は、正しい手続きを踏まずに航海をする小舟を、大波で砕こうとしてくる。
意識が遠くなる。ここで意識を手放したら、今度こそどことも知れぬ世界に放り出されるか、あるいはこの極彩色のトンネルで微びに砕け散ってしまうかも知れない。
天地も定まらぬ揺れの中、気け高だかく匂い立つ香気のように、
「……何……？」
球体状の力場が強力になった。極彩色のトンネルの真まっ只ただ中なかで安定し、地に足が着いたように静止する。目の前に浮かぶ菱ひし形がたの宝石が、力場を強化していたのだ。
「これは……!!」

　そこで愛香は、懐なつかしい声を聞いた。
『……おめえ、相変わらず胸小せえなあ』
　匂い属性フレグランス。
　異世界でテイルブルーと死闘を繰り広げた貴の三葉ノー・ブル・クラブの戦士・ラフレシアギルディが自おのずから託した魂。テイルギアの属性玉変換機構エレメリーションに格納されているはずの匂い属性フレグランスの属性玉エレメーラオーブが今、愛あい香かとともに在あった。
「何で……属性玉変換機構エレメリーションは使ってないのに……!?」
　そんな難しいことがわかるか、とばかりに受け流し、属性玉エレメーラオーブは懐なつかしいヤンキー口調で語りかけてきた。
『先生が言ってたぜ。人間だろうがエレメリアンだろうが、何で身一つで異世界を超えられねえかっつうとよ、単純な重力やら温度やらの前に、心がもたねえんだと』
　……つまり、本来なら自分は、あのハプニングに巻き込まれた時点で心が砕ける運命だった。単身の異世界移動に耐えられず、世界の狭はざ間まで朽ち果てていたのかもしれない。
　それを……意志を持ったように飛来したこの属性玉エレメーラオーブが、異世界で愛香を守り続けていたのだ。
「……やめてよ、化けてでてくるなんて。エレメリアンのくせに」
『ヘッ、てめえこそしおらしく泣きべそなんざかきやがってよう、あたいと戦った時の暴れっぷりはどこに落としてきやがった』
　見守りすぎて、気の緩ゆるんだところまで見られてしまっていたらしい。おねしょを見られたような気恥ずかしさを感じる。
「……そーね。そろそろ拾いに行かなくちゃ」
　心を強く持てば、それだけ応こたえてくれる。総そう二じが信じる属性力エレメーラの可能性が、ようやく愛香にも理解できた気がした。

「なーんかなあ……困ったもんよね、エレメリアンって……。たまにあんたみたく憎めないのもいるし……っていうか、あたしたちのリーダーは多分誰だれ一人憎んでないし。それどころか敬意まで払ってるし」
『ばっかおめー、別に憎む必要なんてねえだろ。何で敵だから憎まなくちゃいけねえみてーな固定観念に囚とらわれてんだよ。つまんねーぞ』
「……うん、わかった。今、ちょうど一体、そういうつまんない固定観念に囚われたやつがいるから……ちょっとブン殴なぐりに行ってくるわ」
『おうよ、行ってこいや――』

　はっとして、我われに返る。相変わらず自分は、極彩色の空間の只ただ中なかで、球体に包まれていた。
　属性玉エレメーラオーブにエレメリアンの意志が宿ることはない。
　それは、トゥアールが自分の研究で実証済みだと言っていた。
　ならば今の声は、自分の孤独が生み出した幻聴なのだろう。
　まして、テイルギアの属性玉変換機構エレメリーションなしに属性玉エレメーラオーブの力を発動させるなど、ありえない。
　それでもこの無機質な石が、自分を守ってくれたことは確かだ。
　ほんの少しだけ――愛あい香かは、奇跡を感じずにはいられなかった。
　空間に激震が走る。あちら側の世界から、アプローチをしているのだ。たった一人、異空間を彷徨さまよう愛香を捜して。
　今、再び、仲間が奇跡を起こそうとしている。
　その瞬間に備え、愛香は心と……総そう二じ風に言うのなら、ツインテールを研とぎ澄ました。

◇

　トリケラトップギルディそのものは、決して手て強ごわい相手ではない。これまで多くの厳しい戦いを乗り越えてきた俺たちにとっては、小刻みに移動するだけの凡敵だ。
　だが今回は初めて、倒せないという大きな枷かせがのしかかっている。
　もぐら叩たたきのように、攻撃を避けて消えては別の場所に出現し、を繰り返す。
　思惑を知ってか知らずか、トリケラトップギルディも積極的に攻撃してはこない。
　逆に俺たちは、こいつを退却させでもしてしまったら今度こそおしまいだと自覚している分、余裕を失って間断なく攻撃を繰り返すことしかできない。
　俺のブレイザーブレイドが空くうを切る。直後の出現点をブラックのグレイブが捉えるも、やはりその直後に何のダメージもなく再出現する。
　与えた手て応ごたえを確かめるように長考すると、ブラックはグレイブを半はん旋せんして構え直した。
「――そういうことか……。トリケラトップギルディ……。貴様やはり、時間を逆も行どしておるな」
「何だって⁉」
　ブラックの指摘に、俺は驚きよう愕がくした。
　トリケラトップギルディはタネを見破られても隠そうともしない。
「いかにも。さすがは元ダークグラスパー様……やはり、あなたが最初に見破られましたか」
「たわけ、気づかれても何の問題もないから隠さなかったのじゃろう……！　気づいたところで何もできぬとな！」

　何てことだ。愛香が過去に飛ばされたと知った時点で気づけそうなことだったが……あまりにも明快で、あまりにも途方もない能力な分、逆に思考がそこへ辿たどり着かなかった。
　瞬間移動でも、瞬間回復でもない。こいつは、受けた攻撃そのものをチャラにして、自分一人の時間をごく短時間巻き戻していただけなのか。
　そのとてつもない能力さえあれば、大おお仰ぎょうな戦闘力など無用の長物だ。
　ブラックが憎々しげに呟つぶやいた。
「処刑部隊である死の二菱ダー・イノ・ランヴアスにおいて、貴様が任務遂行の要であったわけじゃな。確かに、時間逆行能力さえあれば、あらゆる失敗を帳消しにして何度でもリスタートが可能。任務完かん遂すいを絶対とされた部隊において、これほど頼りになる戦士はいない」
　アナザーブルーとイエローも後手に回っている。
　俺はすでにオーラピラーを、イエローも属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンでのツインテールの縛ばく鎖さを試みたが、いずれも拘束バインド後に難なく脱出された。
　捕まえたという事実そのものが巻き戻るのだから、こいつを拘束バインドするのは事実上不可能だ。
　トリケラトップギルディに攻撃を繰り返し、小刻みな移動を積み重ね……出現点であった女子校を遠く離れ、俺たちは一面を砂や枯れ木で覆おおわれた広大な荒れ地へと辿たどり着いていた。
『様々な要因が絡み合ったとはいえ、世界間移動のゲートから過去へと繋つながってしまった最大の理由は、他でもない、トリケラトップギルディ自身の時間移動能力だったんです……！　やつの操るゲートは私たちの使用しているものとは質が異なるというわけですね……!!』
　まさか、あいつ自身の固有能力が愛あい香かの探索を阻はばんでいた

とは。敵の能力の真価を知り、悔しそうに言い放った後、トゥアールが勢いよく立ち上がる音が通信越しに聞こえた。
　愛香のツインテールをどれだけ強く想念して呼びかけても、それだけじゃ足りない。確実にそこへと繋がる扉……こいつがあのゲートを開かない限りは、救出はできないんだ……!!

「お待ちなさい！」
　戦場に凛りんと響く声。息を荒らげながら俺たちは攻撃の手を止め、砂じや利り場に停とめてあった大型の建機を注視した。
　その上に立っていたのは──。
「私は世界を渡る復ふく讐しゆう者、仮面ツインテール──！」
　絞り出すように静かな声で、仮面ツインテールは名乗り上げた。
「トリケラトップギルディ、あなたは一般人を別世界に飛ばしてしまったことを後悔していませんか？」
「……何だと？」
　挑発めいた口調で言いながら、仮面ツインテールは建機を降り、こちらへと近づいてきた。
「───単刀直入に言いましょう。私を、時空間の狭はざ間まへと飛ばしなさい」
　血相を変えて詰め寄ろうとするアナザーブルーとイエローを、ブラックが腕を突き出して制止した。
「私にはツインテール属性も、あなたの求める幼馴染属性チヤイルドフツドもありません。救出要員として放流するには、うってつけの人材でしょう」
「何言ってるんだ！　危険すぎる!!」
　たまらず声をかける。演技は苦手だが……半分は俺の本心なのだから、見み透すかされはしないだろう。トゥアールの真意を悟り、俺たち

はその瞬間に備える。
「ツインテール属性を持たないとはいえ、私も正義のツインテイルズの一員。無関係な少女が巻き込まれたのを、黙って見過ごすわけにはいきません」
　トリケラトップギルディは歯は嚙がみすると、頭上にあの時の眩まばゆいゲートを出現させた。
「……どうだ、これで満足か。何が見える……？　何もできまい！」
　戦士ではない仮面ツインテールの言葉だからこそ、己の無力さを刺激されたのだ。
「私とてあの出来事は後悔しているが、どうにもならぬ。ただの異空間ではない、変異し繫つながった時間の狭はざ間まに呑のみ込まれては、時間を僅わずかに操れる私とて、もはや干渉はできぬのだ」
　干渉できないだって……!?　いいや、扉が開いたことで俺にははっきりと感じるぞ、愛香のツインテールが！　これが最後のチャンスだ!!
「みんないくぞ！　あのゲートに……俺たちのツインテールをぶつけるんだ!!」
　俺とイエロー、ブラックは極彩色のゲートへと向かって一直線に跳躍した。
「何……よせ！　下へ手たに時空間へ干渉すれば、貴様たちもただでは済まんぞ!!」
　当然妨害をしようとするトリケラトップギルディは──アナザーブルーが止めてくれる。
「……年とし増まのテイルブルー!?」
「さすがに私はあの中には交ざれそうにないからな……お前を足止めするぐらいはしてやるさ！　年増でもな!!」
　アナザーブルーはウェイブメイスを振りかぶり、力任せにトリケラトップギルデイを押さえつける。

「待て、仲間たちを止めよ！　年増ならば……子供たちの暴走を防ぐのが役目であろう！」
「教育者に向かってわかったようなことをほざくな！　大人の役目は……子供の暴走が正しい前進になるよう、背中を押してやることだ!!」
　瞬間、アナザーブルーの速度が飛躍的に上昇した。巨乳属性ラージバストを使えないように、やはり属性の相性で愛香が振り回された、母属性マザーの属性玉を発動したのだ。結婚を夢見て──言うなれば母という存在を目指す桜さくら川がわ先生は、属性玉に振り回されることもなかったということだ。
「これが属性玉変換機構エレメリーションか！」
　プテラギルディの属性玉エレメーラオーブであることに気づいたのか、トリケラトップギルディの目ににわかに怒りが点ともった。
「…………私の前で右の牙の能力ちからを使うとは恐れ知らずな……!!」
「因縁があったのならすまない。早く動けるという能力が一番簡単そうだったのでな」
　アナザーブルーは孤軍奮闘。出現と移動を繰り返すトリケラトップギルディを食い止める。一撃目で消えた瞬間、手数で攻めた二撃目の、無数に空くうを切ったうちの一つがヒットする。
「くっ……ただ速度を増しただけではない、移動地点を予測してくるとは、何な故ぜ……！」
「私は今まで、手数で攻めてきたからな……！　反射神経には自信があるぞ!!」
　頼みます、アナザーブルー……桜川先生───!!
　やつは、扉があっても何もできないと高をくくり、俺たちの前に出現させた。

　逆だ。扉さえできてしまえば……どんなに強固であっても、俺たちがブチ破ればいい！
「プログレスバレッター!!」
　俺が進化装備エヴォルブアームズを出すと同時、ブラックは神ゴツド眼め鏡がねのアンダーリムに触れ。
「よし来い、メガ・ネ！　インフィニットコンバインじゃ!!」
「りょーかい！　今日は気合い入れていくで!!」
　メガ・ネが全身から光条を噴き出し、パーツへと分離変形する。
「アブソリュートリング!!」
　イエローは、黄金の首輪を取り出して首元へと装着した。
　ライザーチェイン、インフィニティチェイン、アブソリュートチェイン。
　三人の全力の姿が揃そろい踏みし、荒れ狂う異空間と相対した。
「よいか、相手は現存する異空間……この世界そのものと言ってよい！　わらわが生み出す幻覚空間とはわけが違う、生なま半なかなことでは破れぬぞ！　この一撃に持てる全ての力を込めよ！」
　ブラックの言う通りだ。世界……地球そのものに喧けん嘩かを売るなんて大それた真似、この後に思案を巡らせてできることじゃない。
「トリケラトップギルディと戦う余力は、考えないということですわね？」
　イエローが確信を込めて問い、ブラックもまた、確信を以もつて返す。
「……戻ってくるのはあの貧乳じゃぞ？　怖かったなどと蹲うずくまって泣きべそをかくタマか……！　何をおいてもまず、借りを返そうと大暴れするじゃろう!!」
　俺たちはそれぞれの武器を完全解放ブレイクレリーズした。
　ブラックのダークネスグレイブメビウスに、背中の翼が合体。巨大な

弓となる。
「技を極限まで集束圧縮せよ！　メガ・ネ！」
〈どかーんと弾けるようにな！　計算は任しとき！〉
　極彩色のゲートが縮まり、空間に溶け込んで消えようとしていく。
　させじとブラックは、神ゴツド眼め鏡がねから黒き光の矢を出現させ、引き絞る。
「イエロー！　貴様、確か蹴けり技は連係の最後と言っておったな！　ならばわらわの最強の奥おう義ぎ、渾こん身しんの一撃で叩たたき込んでみせよ!!」
「承知しましたわ!!」
　――いつの間にか俺の腕にリードが巻き付いている……！　限界以上にチャージして放つ気か、イエロー!!
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　勇ましく着込んだ装甲を速攻で脱衣パージするという上級プレイが、いつも以上に力強く超スーパー合体巨身砲ユナイトウエポンを作り上げた。
「インフィニットバニッシャ――――――――――――ッ!!」
　着弾前に∞型を描いた矢は、さらに見る見る圧縮され、球状の凝縮されたエネルギーに変質した。
　超スーパー合体巨身砲ユナイトウエポンから放たれた膨大な雷光を背に、露出度の極大化したイエローが飛ひ翔しようする。
「コズミックウウウウウウウウウッ！　ジャッジメントオオオオオオオオオオオオオ!!」
　最強の蹴しゆう撃げきが、極限まで圧縮された黒球を捉え、己の雷光をも纏まとわせて超絶の一弾として蹴けり込む。
　今まさに消えようとしていた極彩色のゲートは、異物と呼ぶにはあまりにも莫大な異分子を受け、指先一つほどの穴の状態で静止し、内部か

ら激しいスパークを巻き起こした。
「さあテイルレッド！　あの時にように燃やし尽くしてみせよ！　貴様の全てをこめて!!」
　ブラックとイエローの合体技が、内側からこじ開けるようにゲートの穴を広げていく。
　俺はブレイザーブレイドツインを両手にフォーラーチェインで加速し、最高速で往おう生じよう際ぎわの悪い穴へと突っ込んでいった。
「ああ！　俺たちのツインテールが力を合わせれば……時空の一つや二つ、ブチ破ってやるぜ!!」
　アナザーブルーに押されながらも、トリケラトップギルディが悲鳴のような制止の声を上げている。けど、もう遅い。
「全宇宙、全異世界において厳げん粛しゆくに守られるべき大いなる摂理を……〝時間〟を、人間が破壊するとは!!」
「勝手に時の番人ヅラするな……！　あいつがいるべき時間ばしよはここだ！　それこそが、俺たちが守るべき時間だ!!」
「……お前たちがそれほどまでして守ろうとする少女は……あのツインテールは……!!」
「俺のツインテールは！」
　バックパックから炎を最大噴射し、俺は双剣を頭上で合わせて構え。
「時と間きだ……!!」
　自分そのものを一本の剣と化してゲートへと一撃を叩たたき込んだ。
「ライジングブレイザ――――――――――――――――――ッ!!」
　次元を斬きり裂き、愛あい香か帰還の道筋を作る。
　愛香……。俺が最初に憧あこがれたツインテールが恋れん香かさんだったのか、誰だれなのか、わからない。
　覚えていないなら、こんなツインテール馬ば鹿かの俺にとっても、始まりは重要じゃないんだ。

だって、わからないのは始まりだけで、そこから先はずっと覚えてる。ずっと俺の側そばにいてくれたツインテールは、全部記憶してる。
お前がどんな風にツインテールにしてきたか、どんな風に変わって、成長してきたか……。積み重ねてきた時と間きこそが、本当に大切なツインテールだ。
世界を超えて、時間を超えて──そのツインテールが今、俺たちとお前を繫つないでくれる。
「さあ、帰ってこい───!!」
俺の思いが……俺たちの力が、ツインテールが、時間を超越する。
この時を待っていたかのように───切り裂かれた出口から、人間大の球体が飛び出した。
全員が、安あん堵どの表情を浮かべる。球体が砕け、周囲にプリズムの欠片かけらが降り注いだ。
時間に反逆したからだろうか──戦場の時間は今、確かに止まっている。
動き出す時計の針のように、空を舞うツインテール。
無事だと信じていたが……本当に、数日前と何一つ変わらないツインテールで、愛あい香かはこの世界へと帰還したのだ。
愛香、と大声で叫んでやれないのが口惜しい。この場の誰だれもがそうだろう。
トリケラトップギルディは、全身を戦慄わななかせた。
「……ば、馬ば鹿かな……信じられん……!!」
愛香の眼前には……愛香の帰還を願い、抗あらがい続けた、白衣の少女の姿があった。
「ッ……」
声を詰まらせる仮面ツインテールへ向けて、愛香は我わが家にでも帰ってきたかのように告げた。

「……随分、無理したみたいね。あたしなんて帰ってこない方がよかったんじゃないの？」
　敵に関連性を悟られるかどうかなど、どうでもいい。
　表情は見えず、流れる涙も見えない。本心を仮面で隠し、トァウールはよろけるように愛香へと歩み寄った。しかし、震ふるえる肩だけは、その仮面でも隠しきれてはいなかった。



「本当にユーモアセンスのかけらもない蛮族ですね……二度と、そんなつまらないことを言ってみなさい……！　私の手で異世界にブッ飛ばしますよ、愛香!!」

　思いがけず呼び捨てになるほどの強い言葉で窘たしなめられ、愛あい香かはどこか嬉うれしそうに頷うなずいた。

「……うん。ごめんね」

「過去に行ってくれればと言ったのは私ですから……今日のところは、おあいこにしておきます」

「……サンキュ。あっちで、あんたの声も聞こえたよ……」

　愛香は、仮面ツインテールをそっと抱きしめる。

「……あたしが独りぼっちでも心を保てたのは……あんたのおかげよ」

「おやおや、蛮族にしては殊勝ですね……」

　仮面ツインテールの震える手が……愛香の背に回された。

　アナザーブルーは不敵に微笑ほほえみ……トリケラトップギルディから離れると、変身を解除した。ギクリとする俺たちを余よ所そに、弾ける青い光の中から現れたのは……仮面ツインテールの銀色とは、色違いの緑の仮面だった。

「実は私は、仮面ツインテール二号だったのだ」

　嘯うそぶきながらブレスを外す桜さくら川がわ先生……いや、仮面ツインテール二号。

　仮面で正体を隠すのはいいけど、首から下が恐ろしく目立つメイド服なんですが……。

「どうだ、やはり必要になっただろう」

「あんまり似合いませんね」

　桜川先生のアイディアで要請していたようだ。桜川先生は、信じていたんだ。愛香が帰還し……そして、ブレスを返すことになると。

　愛香はトリケラトップギルディに見えないよう、背を向けてブレスを

受け取り、皮肉めいた口調で確認した。
「……いいんですか？　返しちゃって。結構ノリノリでしたけど」
「どんなに頑張ったところで、テイルブルーには拭ぬぐいきれぬ悪評が初めからついているハンデ仕様だ。これ以上婚期が遅れてはかなわん……それに……やはりテイルブルーはお前だ」
　愛香にブレスを託し……緑色の仮面のメイドさんは、仮面の奥で照れ笑いを浮かべているようだった。
　愛香は右腕にブレスをつけると、トリケラトップギルディと相対する。
　──え？
　このまま一旦物陰にでも隠れるものと思っていた俺は、予想外の行動に泡を食った。
「ッ……待て……‼」
　愛香は、トリケラトップギルディの前で、ブレスをかざし叫んだのだ。
「──テイル・オン‼」

　全力を尽くし、最強形態を解除して地面にへたり込むイエロー、ブラック、メガネが、呆ぼう然ぜんとその光景を見つめる。
　青い光が爆裂し姿を現す……装着者が変遷したテイルブルーの中で最強たる、二代目。
　驚きよう愕がくの現場復帰に、味方以上に敵であるトリケラトップギルディが動揺していた。
「貴様──私が時空の彼方に飛ばしてしまったあの少女が、テイルブルーだったとは……⁉　だが、目の前で変身するとは……血迷ったか⁉」
「そう？　見たところ撮影してる戦闘員アルテイロイドはいないみたい

だし」
　けろっとして応こたえるブルー。
「私を倒せばいいとでも思ったか、この瞬間にも今得たデータを基地に転送できるのだぞ!!」
「そん時は……アルティメギル全部ブッ潰せばいい話でしょ？」
　誰だれよりも慎重を期する愛あい香からしからぬ大胆な行動に、俺たちは皆度肝を抜かれてしまった。むしろ、清すが々すがしいくらいだ。
　それは、トリケラトップギルディも同じようで……あれほど俺たちのやることなすことに動揺していた奴やつが、ここに来てとうとう吹っ切れたようだった。
「……胸と同じで潔いさぎよい奴！　よかろう、思惑に乗ってやる。私を倒し、自分を守ってみせよ!!」
　ブルーはフォースリヴォンに触れてウェイブランスを出現させると、俺たちから敵を引き離すように横移動を始めた。
「みんな、ゆっくり休んでて。……助けてくれてありがと。こいつは、あたしがこの手で倒すから……!!」
　俺たち全員が力を使い尽くしたことを悟り、ブルーは単身敵の前に立つ。
「できるか、幼おさな馴な染じみのお前に！」
「あんた言ってたわね……！　幼馴染は負け確だとか何とか……!!」
「厳然たる事実だ！」
　どんな世界を見てきたのかは知らないが、ブルーの微笑ほほえみの不敵さに、もはや一点の翳かげりもなかった。
「──少なくともあたしは、あんたには負けないわ!!」
「ほう……!!」
　ウェイブランスで斬きりつけられながらも、トリケラトップギルディは悠々と時間を巻き戻し、平然とその身をブルーの眼前にさらす。

　幼馴染として勝つ、という宣言に闘志に火をつけられたのか、これまでの消極的な戦法ではなく、むしろ隙すきあらば相手に攻撃を加えていく、明らかに先ほどまでとは一線を画す戦闘スタイルへと変化していた。
「話に聞いていたよりもずっと晴れがましい表情をしておるではないか、テイルブルー！　それとも、そうさせてしまったのは旅してきた時と空きか⁉」
「かもね……！」
　愛あい香か……お前は一体、何を見てきたんだ……？
「もしかしたら、よ。絶対にあり得ないんだけど……万が一……奇跡みたいな確率でも」
　すでにかなり距離が離れ、二人の会話は聞こえないけれど……。
「……世界一のツインテール馬ば鹿かを生み出したのがあたしなら……責任取らなくちゃ駄だ目めじゃない？　ま、あたしの願望が生み出しただけの世界だったのかも知れないけどさ！」
「どんな過去せかいを体験して来たのかは知らぬが……フッ、いずれにせよ安心したわ……。私も女め々めしくしょぼくれていたのでな！　仲間もやり方は強引であったが、帰還を手助けしてくれたことには感謝せねばなるまい‼」
　間違いなく愛香は、一回り成長して帰ってきたんだ。
　なおも乱舞する槍そう撃げきが、時間跳躍の狭はざ間まに現れた隙すきへと鋭く斬きり込む。
「ぐわあっ……‼」
　ついにウェイブランスが、トリケラトップギルディの中心の角へとヒットする。
「み、見ていたか、私がこの角をかばうのを……」
「……その角攻撃されてビビってあたしがあんな目に遭ったんなら、借

りは返しとかないといけないでしょ？」
「その通りだ……。この姿に固執した私の迷いこそが、全ての責！　今こそ捨てよう！　我わが誇り!!」
　トリケラトップギルディは、中心の角に手をかけ──。
「テイルブルー……お前は同胞たちに、鬼と恐れられているようだが……」
　──自ら、その角を折り砕いた。
「私も鬼となろう！」
　その瞬間、トリケラトップギルディを中心に暴風が吹き荒れた。
　恐竜さながらの体表にヒビが入り始めたのを見て最悪の事態を予期し、俺はトゥアールや桜さくら川がわ先生を庇かばって立つ。
「あいつ……自爆する気か!?」
　俺の懸念を余よ所そに、トリケラトップギルディは雄々しく両手を天に広げた。
「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」
　巨体に似合わぬ理知的な佇たたずまいは消し飛び、残った額の二本角はさらに禍まが々まがしく、鋭く長大化。剝はげ落ちた体表の下からは、赤黒い引き絞られた肉体が出現。
　天へとかざした両手へ天が授けるかのように、凶悪な大きさの鉄てつ棍こんが出現し、力強く握りしめられた。
「……これが私の最終闘体……オーガギルディ……！　闘争を求めるだけの醜みにくき姿だ……!!」

「オーガギルディ……。彼も、進化型のエレメリアンだったんですの……!?」
「いや違う……。最終闘体などと言ってはおるが、あれはまるで、封印

を解いたかのようじゃ……。むしろあれこそが、奴やつの本当の姿!!」
　イエローの予想に、確信めいた答えを出すブラック。
　封印……だから奴は、あんなにも中心の角を庇かばっていたのか……。
　理性と獣性の狭はざ間まで揺れるかのごとく、残った二本角づのも黒色に濁にごり始めている。
「理性があろうがなかろうが、姿が整ってようが崩れてようが、どーでもいいわ」
　ランスを一旋し、臆おくさず突進するブルー。
「あたしはいつも通り……あんたたちヘンタイをブッ飛ばすだけよ!!」
　突き出したウェイブランスは、オーガギルディに片手で容易たやすく受け止められた。
　そして軽く指を握り込んだだけで、穂先が粉々に砕かれてしまう。
「……な……!!」
　柄つかだけになった槍やりを捨て、慌てて後退するブルー。
「───諦あきらめよ、貴様の胸と同じく……勝機はゼロだ……!!」
　軽口に怒る暇いとまもなく、これまで防御と回避にだけ使っていた時間移動を用いての転移を、オーガギルディは攻撃に転化した。
「あたしの胸と同じなら、少しは勝機があるってことでしょ!?」
「いや、ゼロであろう!!」
　ブルーの目の前に突如として現れ、その豪腕を振りかぶる。
「っあ……!!」
　慌てて展開した貧乳属性スモールバストのシールドを強烈な一打で容易く砕かれ、ブルーは地面を抉えぐりながら吹き飛ばされた。何とか立ち上がったブルーのテイルギアが、力なく放電している。
「まだ立つか……」
「……あきらめが悪いのが、幼おさな馴な染じみってもんでしょ

……!?」
「よか、ろう……ならば……次の一撃で、ツインテールも幼馴染も、貴様の信じる……全てを奪ってやるぞ……!!」
　理性を保つのがやっとなのか、オーガギルディは苦く悶もんしながら構えた。
　駄だ目めだ──奴の動きは察知できない！　今度あの一撃を受けたら、ブルーでも……！
「せっかく帰ってきて……色々知って……これからだってのに……」
　決定的な力の差を目の当たりにしながら、ブルーのツインテールはなおも闘志を迸ほとばしらせる。
「あたしは……負けないっ!!」
　裂れつ帛ぱくの気合いと共に、ブルーの身体からだから光が飛び出した。
「むっ!?」
　警戒するオーガギルディ。それほどのエネルギーを放つ、未知なる物体は──。

　テイルブルーの眼前にぷかぷか浮いているのは、謎なぞの胸パッドだった。

「……思い入れのあるものって、あれだったんですか、ブルぷほほははははははははははははははぎゃ────────────っ!!」
　名前も言い終えることすらできずに大爆笑する仮面ツインテールはブルーの裏うら拳けんの衝撃波でブッ飛ばされたが、ブルーは先ほどまでの気迫が崩壊し、敵をガン無視して狼狽うろたえていた。
「ちょっ……タンマアアアアアアアアアア！　何で過去からついてきたの!?　そんなに欲しかったのあたし!?」

　待ってくれブルー、一人で苦く悶もんされても俺たちには何が何だか!!
「駄だ目め！　これは駄目、これがパワーアップアイテムになったらこの先あたし――」
　無慈悲にも……胸パッドは壮麗なる光を放ち。
「い――――や――――――――――――――――――――っ!!」
　サファイアブルーに輝く、二対の進化装備エヴォルブアームズへとその姿を変えた。
「…………」
「…………」
　ブルーも、オーガギルディも、立ち尽くして声を失う。
　特にオーガギルディは、見てはいけないものを見てしまったとばかりにやや視線を逸そらした。
「……たく……」
　ブルーはわなわなと肩を震ふるわせ、覚悟を決めたように目を見開いた。
「敵がなりふり構ってきてないのに……あたしが怖おじ気けづいたら、ツインテールがすたる!!」
　宙に浮く二枚のパッドを、握りつぶさんばかりの勢いで引っ摑つかむ。
「やってやるわよ、馬ば鹿かああああああああああああああああああああああああああ!!」
　そして――アンダースーツの隙すき間まから、素早くスロットインした。
　こんなにも、周囲に罪悪感を振りまく最強変身があっていいのか――。
　白目で見つめる俺たちの肩を叩たたくように、荘厳な光が周囲を取り

巻いていった。
　胸パッドを中心に、ブルーのテイルギアが光条を放つ。
　リボンが、装甲が、激しいスパークと共にその煌きらめきを取り込み、変化していく。
　砕けたランスは修復され、穂先が更に鋭く隆起し、尾にまでも小型の刃が形成された。
「これで……お下がりは卒業ね!!」
　やけくそ気味に呟つぶやき、満面の笑みになるブルー。仮面ツインテールも満足げに頷うなずく。
「ええ、もうそこまでしたらお好きなようにカスタマイズしちゃってください!!」
「あたしだけのテイルギア――エターナルチェイン!!」

　あれがテイルブルーの最強形態……愛あい香かが辿たどり着いた真のテイルブルー！
　愛香が望んでいた胸部の追加装甲は全くなく、依然として巨乳を見せつけるためのデザインが幅をきかせているが、それ以外の部分は全てがより鋭利に、より攻撃的に、より野性的ワイルドにパワーアップしている。
　その象徴とも言えるのが、蒼あおき煌きらめきを迸ほとばしらせるブレードだ。両腕両足どころか、フォースリヴォンにまで加積されたそれは、弱点すらも攻撃的に進化させた徹底さを物語る。
　俺たちと違い、武器にまで進化が及ばせた信念が、攻撃特化の終着点だった。
　焼き切れそうな理性の中、オーガギルディもその美しさを讃たたえた。
「……それが貴様の覚悟か、テイルブルー！　あえて胸を隠さぬその覚

悟……！　貴様も鬼の道を歩むというわけだな!!」
　元々鬼だったのに、これ以上焚たき付けるのはやめてください……。
「まあ、追加装備がパッドなら少しは胸元が大きく見えるはずだし……!!」
　前向きに考え、戦意を向上させていたブルーに、悲しいお知らせが。
「──いえ、ブルーの進化装備エヴォルブアームズ……いわばエターナルパッドは、パワージェネレーターとしてテイルギアの装甲繊維フォトンヴエイルに融合しています。一ミリも胸は大きくなっていません……!!」
　携行していた端末で即座に胸の大きさが変わっていないことを分析され、肩を落とすブルー。



「……随分迷惑かけたみたいだけど……これでチャラにしといてよ、トゥアール」
　しかし、いつものように胸のことで殊更に落ち込んでいる雰囲気はなかった。
「知りませんよ？　愛あい香かさん、貧乳が目立たなくできる、最後のチャンスだったかもしれないのに。あなたの攻撃性ばかりを汲み取ってしまって」
「ホント。何やってんのかしらね、あたし……。っていうか、呼び方戻さなくていいのに」
　拗すねるように呟つぶやくと、ブルーは決然と目を見開き、進化したウェイブランスを構えた。
　俺は瞠どう目もくする。トゥアールにも、エレメリアンたちにすら弱点と指摘された、胸を隠すように自信なさげに立つテイルブルーは、もういない。愛香だけの輝き──エターナルチェイン。試練を乗り越えて風に舞うそのツインテールが、最終激突の合図となった。
　転移し後方に出現したオーガギルディの攻撃を、回し蹴げりで迎撃するブルー。
「むっ⁉」
　右足が発光し、大幅な脚力強化を見る者に伝える。紛まぎれもなく、脚属性レツグの能力だ。
　回避すべく転移したオーガギルディ。その動きを捉えるべく、ブルーの眼前にデータを分析する小型スクリーンが形成された。あれは、文学属性ブツクの能力……。
「やああああっ‼」
　そして、ブルーが上空を睨にらみ据えると、そこには転移が完了したオーガギルディの姿が。
　すかさず槍やりを突き出すブルー。柄えが大きく伸び、出現点へと鋭

い刺突が疾はしる。
　射程の強化……項後属性ネープの単体での発動効果だ。
　矢や継つぎ早ばやに繰り出される、属性玉エレメーラオーブの能力。
　ようやく俺は、ブルーの全身に漲みなぎる力の正体に見当がいった。
「……今まで倒したエレメリアン……全ての属性玉エレメーラオーブを発動しているのか!?」
　ブルーの全身で、ブレード以上の輝光を放つパーツ――二対のリヴォン、胸、両腕と両足―七つの属性玉変換機構エレメリーションが、エターナルチェインと化したギアの中で脈動している。
　ブラックやイエローと違い、目に見えて出力の極大化をしたわけではない。
　属性玉変換機構エレメリーションに装そう塡てんするまでもなく、即座に全ての属性玉エレメーラオーブの力を発動できる……属性玉エレメーラオーブを駆使した多彩な戦闘を得意とするブルーに相応ふさわしい、最高の力だ!!
「馬ば鹿かな、敵の力に頼って進化するとは……戦士の誇りを捨てたか！」
「あんたは誇りを捨てたんじゃなかったの!?」
　手痛い指摘に、転移直後に硬直するオーガギルディ。ブルーが迫撃する。
「別に、最強形態とかそういう肩書きに興味はないから。ただ、自分の力に不足を感じたら、その分だけ強くなる。あんたたちを倒せればそれでいい！」
　ランスと、突き出した二角が交錯し、火花を散らす。
「頂点を極めた圧倒的な力、とか興味ないしね……!!」
　拮きつ抗こうした力で弾き合い、地面に同時に着地する。
「あたしは……ツインテールを守る、あいつを守りたい。それが一番難

しいけど……そのためなら、どんなかっこわるい戦い方だってする！　そのためなら、どこまでだって強くなれる!!」
「……それほどの覚悟で戦っていたとは……知れば誰だれもが詫わびるであろう……！」
　オーガギルディはブルーから俺へと一瞬だけ視線を移すと、転移の速度を上昇させた。
「その底無き精神性こそが頂点きわみだというのだ……！　いわば、未完の最強！　未完ゆえの最強形態！　恐るべし……誇り高き蛮族せんし、テイルブルーよ!!」
　オーガギルディは二本の角へエネルギーを集束させ、それを全身に伝達させた。
　異空間のゲートと同じ極彩色の光が、皮膜のように赤い肉体を包み込む。
「ゆくぞ────ッ!!」
　これまでとは桁けたの違う練度の時間跳躍。戻っては進み、進んでは戻り、時間という重力から切り離された生命が、大地に立つ者をあざ笑うかのように翻ほん弄ろうする。
　懸命にウェイブランスで防いでいたブルーだが、次第に追いつめられていく。
「いかに貴様があらゆる能力を使いこなそうと、時間移動能力は私にしか操れぬ秘中の秘！　それを全開した今、為なす術すべはない!!」
「……あんただけの力？　そんなの、誰が決めたのよ……!?」
　槍やりを地面に突き立て、ブルーは左腕の属性玉変換機構エレメリーションを頭上に高々とかざした。
「属性玉完全解放ブレイクエレメリーズ!!」
　全身七つの属性玉変換機構エレメリーションがテイルギアから分離し、ブルーの周囲を光の尾を振り散らして旋せん回かい。装備の原点た

る左腕に結集、合体した。直後、無数の属性玉が左腕から飛び出し……総力を結集するように集束し、一気に再装そう塡てんされる。

　オーガギルディと同じように、ブルーの身体からだを極彩色の光が取り巻く。大気を破裂させ、姿をかき消した。

「む！　まさか……！　今この瞬間相対している相手の能力すらも……!!」

　追いすがられるはずのない次元に肉薄され、今度こそ驚きよう愕がくを超えた賛美に身み震ぶるいするオーガギルディ。

　エターナルチェインの真の能力……それは、現在進行で対戦している相手の力まで属性玉変換機構エレメリーションで取り込む規格外の離れ業わざ。

　暴走、蛮性とは決別した、戦闘巧者たる正統進化。それはまるで、属性力エレメーラという人それぞれの愛を受け止めた、ブルーの成長を象徴するかのようなオーバースペックだった。

「あたしのツインテール自体が、未来あたしの模マ倣ネから始まったんだから……！　あたしのツインテールが行き着く先も、それしかないでしょっ!?」

「面白い！　全力の私についてこれるか、テイルブルー!!」

　跳躍した二人は、ちょうど中間で激突し──爆裂するように、大気もろとも弾けた。

　次の瞬間、武器をつば競り合った状態で別の地点に出現し、再び弾ける。

　それは速度という尺度を超越した、時空乱戦。

　二人は、目にも止まらない超スピードで戦闘を繰り広げているわけじゃない。

　それよりもなお凶悪な戦闘場バトルフイールド、生命体ならば誰だれもが畏おそれ敬うやまうはずの神に等しき存在──〝時間〟の上に互いの

二足を踏みしめ、戦っているんだ。
　周囲に紫し電でんが放たれていく。闘とう気きの奔ほん流りゆうが竜巻のように激しく渦巻く。
　一打一打が時を軋きしませ、一いち斬ざん一斬が輪りん廻ねをも断つ。
　時間干渉能力を持たない俺たちでは、二人の戦いの全容は把握することができない。
　しかし、俺は感じていた。
　時をも越えてなお輝く、テイルブルーの……愛あい香かのツインテールを。

「あたしのツインテールは──永遠よ!!」

　極彩色の粒子をまとい、テイルブルーのツインテールが乱舞する。
「がっ……あ……!!」
「どーしたの？　鬼ごっこはもう終わり!?」
「ほ、本元である私の肉体が先に音ねを上げ始めるとは、立つ瀬がないぞ……!!」
　最初に競せり負けたのは、オーガギルディだ。
「だが時間干渉能力は、どれだけ超絶の装備を得ようと、どれだけ強大な肉体を備えようと、そう容易たやすく手た綱づなを握れるものではない！」
　着地と共に地面が爆裂し、吹き上がった土砂がさらに巻き戻しのように地面に戻り、二人の姿が消える。二人の時空戦はいよいよ、周囲をも巻き込み始めた。
「たとえツインテールの戦士の卓越した精神力といえど……これほどの短時間に連続して時を越えれば、時のうねりに精神を蝕むしばまれ、崩

壊してしまうはず！　何な故ぜだテイルブルー！　何故貴様はここまで！　何のために戦うのだ!!」
「――完全解放ブレイクレリーズ！」
　アンダースーツを透過して飛び出したエターナルパッドが、ウェイブランスの柄に合体。
　さらにテイルギアの全身のブレードが分離して錐すい状じょうにランスの穂先へと結集し、ランスの突貫力を解放した。ブルーは、風車のように頭上で回転させ、水流を迸ほとばしらせた。ブルーの全身を取り巻く極彩色の光が、水流に宿っていく。
「ほらトゥアール！　何か新しくなってるけど……どーする!?　この槍やりの名前！」
　遥はるか離れた場所で刮かつ目もくしていた仮面ツインテールに、通信で語りかけるブルー。
『ウェイブランスエクシードです！　ブッ飛んだ蛮族にはピッタリでしょう!?』
　ブルーは承知とばかりに不敵に笑い、先ほどのオーガギルディの問いに答えた。
「現い在まも過去むかしも……あたしが戦う理由は、一つだけ!!」
　ウェイブランスエクシードから放たれた水流が、決して逃のがれられない時の鎖と化し、オーガギルディを絡め取る。
「守りたいヤツの、未来あしたのためよ!!」
　ウェイブランスエクシードが、時空をも貫くほどに猛然と打ち出された。
「エクストリ――――ムウェ――――――――ブ!!」
　必殺の槍そう撃げきに貫かれ、オーガギルディは全身を放電させながらも満足げに微笑ほほえんだ。
「……停滞せず、先へと進む幼おさな馴な染じみ……！　テイルブ

ルー！　貴様こそ……勝者!!」
　そして力尽き、大の字になって地面に倒れ込む――。

◇

「……た、確かに、そうそう使っていいもんじゃないわね、これ……」
　時間移動を駆使した戦いの反動で憔しよう悴すいするブルーを見て、溜りゅう飲いんが下がったように皮肉るオーガギルディ。
「フフ……　テイルブルーの正体を伝え損ねてしまったか」
「あんた……」
　伝えようと思えば、いつでも伝えられたはず。ましてや、これからアルティメギルの脅威となるであろう、あんな凄すさまじい能力を目の当たりにしていながら。
「勘違いするな。変身前も後も蛮族ときては、正体を知ったところで何も変わらぬ。そんな些さ細さいな告げ口が手柄になるほど……誇り高き我われら死の二菱ダー・イノ・ランヴアスは、矮わい小しようではない」
　ばつが悪そうに俯うつむくブルーに、オーガギルディは小さく肩を竦すくめた。
「この程度の気き紛まぐれを恩に着ているようでは、先が思いやられるぞ」
「誰だれが！」
「……それでよい……。仮面の少女よ……。お前たちはいい関係だな……」
　オーガギルディは遠く立つ仮面ツインテールに目を向け、二人に賛辞を送った。
「関係が壊れることなど恐れず……つまらないものはつまらない……、

滑っているぞと、遠慮なく言ってやれば、救われたのかもしれん……。お前たちのようにな……」

　涙ながらに、愛あい香かにはユーモアセンスがないと訴えたトゥアール。それが、こいつにはどれだけ眩まぶしく映ったのだろう。

「幼馴染を大切にな、テイルブルー……」

「敵に言われるまでもないわよ」

　突き放すような、優しい言葉と微笑みを受け……オーガギルディもまた、不ふ遜そんに笑う。

　そして、今いま際わの際に意志を託すように、ブラックを彷徨さまよい見た。

「……テイルブラック……。ご存じでありましょう……。あの方を、頼みましたぞ」

「無論。向かってくるならば全力で応じ、そして叩たたき潰すまで！　……それと、滑っていたら、全力で突っ込んでおいてやろう。貴様の代わりにな……」

　残された部隊長との、避けえぬ戦いを予期させながら……オーガギルディは、爆散した。

　頼もしく成長して帰ってきた幼おさな馴な染じみに、俺は握手を求め、右手を差し出す。

「……お帰り。愛あい香か」

　するとその右手を取らず、ブルーは俺のツインテールを片房すくい取った。

「……うん。ただいま」

　切なげに零こぼれた言葉と共に、ブルーは……愛香は、自分のツインテールも片房摘つまみあげ、それぞれの毛先をそっと触れ合わせた。まるで、優しい口付けのように──。

「ッ……あ、愛香!?」
　かっと頬ほおが熱くなる。何故か心臓がばくばくし始めた俺を見て、愛香はしてやったりとばかりに笑った。狼狽うろたえて後ろを向くと、他のみんながぽかんとして見つめていた。
「この方がそーじは嬉うれしいでしょ？　ちょっと余裕できたし、今はあたしもこれでいいわ」
　照れくさそうに伸びをするブルー。急いで槍やりから戻したせいでフィッティングがいまいちだった胸パッドが……アンダースーツの隙すき間まから、ぽろりとこぼれ落ちた。

キャラクター名鑑 030

オーガギルディ



DATA

身長：629㎝

体重：82t

属性力：幼馴染（チャイルドフッド）属性

トリケラトップギルディの最終闘体。激しい戦闘衝動に駆られ理性を保つのが困難となり、時間干渉能力という繊細かつ超高等な固有能力を暴走させる危険があるため、禁忌としていた。加えて、この姿で常態化してしまうと、死の二菱とは別の軍団に招集を受けるかもしれないと悩んだ末の封印らしい。世話の焼ける幼馴染を置いていけなかったのだ。能力特化で戦闘能力が低かった彼が大幅に戦闘力を増すため、本来無敵の姿のはずだったが……。

エピローグ　神域のエレメリアン。

　テレパシーのように、ティラノギルディだけにか細く送られてきたプライベート通信。
　何な故ぜか一時的に年とし増まとなったテイルブルーが再び貧乳に戻り、あらゆる属性を使いこなす阿あ修しゅ羅らと化した。胸以外の全てが進化していた。トリケラトップギルディが送ってきた情報はそれだけだった。詳細もなければ、付随する映像もない。そして、それを最後に──。
「……フッ……さては、言えぬものでも見てしまったか……。だがよい、貴様が隠すと決めたのなら、それがよいのだろう」
　独りごち、ティラノギルディは一番お気に入りのものが飾ってあるフィギュア棚に視線を向けた。そこには、象徴的に倒れる、一体のフィギュアが。
「あらゆる属性を……それはまるで……あの方と同じではないか……」
　ティラノギルディはそこにいる誰だれかに語るように、話を続けた。
「ツインテイルズとはまるで、我われらのようだな……。戦いの中で強くなり続け、やがて最終闘体へと到達する……」
　フィギュアを何度元通りに立たせ直そうとしても、倒れてしまう。
　そして、寂しげに笑う。
「馬ば鹿か者ものが……。何が理性を保てぬだ、修練を積めばやがて使いこなせたはず……。トリケラトップギルディよ、お前はこの部隊に残ろうとしたのだな。その姿を保つことで……」
　古代の生命を掲げる軍団にあって、一人輪を乱すまいと。ティラノギルディからすれば馬鹿馬鹿しいだけの生き真ま面じ目めな理由で、トリケラトップギルディは真の姿を封印していたのだ。
　例えば、学生が進路を決める指標として、付き合いの長い友人と同じ

学校に行きたい、ということは……周囲は何か言ってくるかもしれないが、当人からすれば立派な理由だろう。
　幼おさな馴な染じみと、同じ部隊にずっといたい。ただそれだけのために、昼ひる行あん灯どんを演じていたのだ。
　あるいは、さらなる強大な部隊からの招集もあり得た力を持っていながら。

「俺は今泣いているが……またいつものように茶化さぬのか？　トリケラトップギルディよ」
　本心に呼応するように……ようやく、フィギュアが元のように立った。

◇

　神秘を尽くし秘ひ匿とくされた、アルティメギル首領の間──。
　聖布ヴエールに包まれた玉座に座し、アルティメギル首領もまた、死の二菱ダー・イノ・ランヴアス副将敗退の報を受けていた。
「──ほう、トリケラトップギルディが倒されたか……。左右の牙きばが折れるとはな。やはり、ダークグラスパーの手で？」
「いえ、違うようです。その世界のツインテールの戦士が撃破したと」
　報告している部下もまた、白いローブで全身を覆おおい、そのシルエットは窺うかがい知れない。
　ただ一つ、ローブの背には、装飾された剣を基調としたエンブレムが刻まれていた。
　そして──頭まで覆おおわれたローブの奥からなお透すき通って聞こえるのは、女性の声だ。
「……美の四心ビー・テイフル・ハートを壊滅せしめた戦士を擁する世

界……死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの二大巨頭までもを撃破したとなると……いよいよ、無視できぬ存在かと」
　聖布ヴエール越しに見える首領のシルエットは、明らかにワイングラスを指で挟んで持ち、穏やかにくゆらせている。
　いや、飲めないでしょう、とは口が裂けても言えなかった。
「フ……。余は期待外れが大層嫌いでな……。そのように持ち上げて結局のところ雑多なツインテールに過ぎなかった例など、ごまんとあった」
　あ、やばい長話が始まる、と上級戦士たるローブのエレメリアンが研とぎ澄まされた勘で察知しても、時すでに遅く。
「──星は地上から見上げるから輝いているのだ。近づいたところで、文字通り岩に塗まみれた星ほし屑くずに過ぎぬ。無数に散らばるツインテールもまた、それだ」
　それから数十分。果てしなき妙なたとえ話に耐えた後、戦士は首領へと淡々と告げた。
「首領様。対極とはいえ、わかり合える属み性ちを歩むティラノギルディ君を信じてまだ任せますが……ティラノ×トリケラっていう最高のかけ算を壊した戦士、許してはおけません。いよいよとなれば、出ますので。私」
　透明な声だからこそ、その中に含まれる怒りという名の濁にごりが如によ実じつにわかる。
「もしかしたら、ユグドラシルギルディちゃんの仇かたきも、その戦士たちかもしれませんしね。てっきり、フェニックスギルディの仕し業わざかと思っていましたけど……」
　因縁が、繋つながり始めていた。かけ算に導かれた、恐るべき因縁が。
「あのティラノギルディを倒せる戦士など存在せぬとは思うが……その

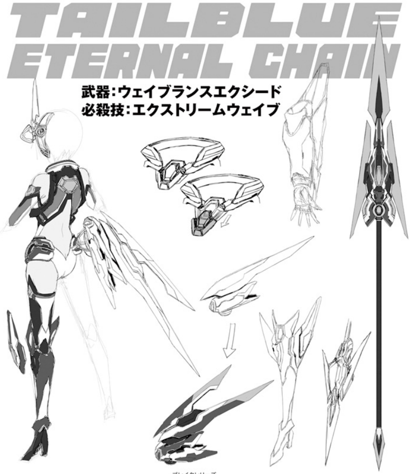
時は、あらためて報告するがよい」
　ローブを翻ひるがえし去って行く戦士を見送り、首領は、意味ありげにワイングラスの中身を床に零こぼした。誰だれが片付けるのだろうか。
「……ツインテイルズ、か……。まあ、余の記憶の片隅には留とどめておいてやろう──」
　それは果たして、星屑か、太陽か。
　ツインテイルズが片隅の記憶から飛び出す日も、おそらくそう遠くはないのだろう……。

テイルギア設定資料 09

テイルブルー エターナルチェイン

TAILBLUE ETERNAL CHAIN

武器：ウェイブランスエクシード
必殺技：エクストリームウェイブ



ブルーがテイルギアそのものを完全解放(ブレイクレリーズ)させた姿。装着者が数度変遷し、スピード型から攻撃型に強引に変換されるなど、旧型にして最も負荷の大きかったブルーのギアだが、そのまま攻撃特化で限界突破するという愛香らしい進化となった。属性力(エレメーラ)の相性にもよるが、獲得した全ての属性玉(エレメーラオーブ)の能力を瞬時に発動が可能な上、対戦している相手の能力さえも体得するという規格外の切り札をも備えた。反面ギアそのものの力が格段に上昇しているわけではない。どんな敵が現れても対等に戦う——総二を守るために永遠に戦い続けることも厭わないという覚悟がもたらした、テイルブルーの最強形態である。



あとツインテールがき

　あとツインテールがきに書くこととか全然無いから、半ページで十分っすよ！（※『俺、ツインテールになります。』ＢＤ□ＤＶＤ一巻特典小説巻末を参照するとより楽しめます）

　そう、この本が出版される頃はアニメがいよいよ佳境。感無量です。色々なことがありましたが、本当に楽しかったです。何かもう、エターナルに続いて欲しいです。

　まさかオーディションに呼ばれることなく当日ぶっつけ本番で本当に戦闘員アルテイロイドをやったり、あまつさえ慧え理り那なさんにインタビューされたりするとは思ってもみませんでしたが……。いやあ、いい経験でした！（口からエクトプラズム）

　温かいスタッフ・キャスト・関係各位の皆様のおかげで、アニメは本当に素晴らしいものになりました。原作も負けないよう、どんどん加速していきたいと思います！

　イラストの春かす日がさん、今回の最大の感謝は満場一致で口絵のトゥアールです！　ヒロイン力完全解放したトゥアールと、ヒーロー力を完全解放したブルー……素敵です！

　担当の濱はま田ださん、アニメ準備期間中から今まで、原作と合わせていつも以上にお世話になりました。あとツインテールがきの編集時に文字数の調整をしないといけなくなると、いつも真っ先に担当への謝辞がカット候補にされてしまっているようなので今回は真ま面じ目めに！

　今回も、完成と出版に携たずさわる全ての方と読者の皆様に、感謝とツインテールを！

水沢　夢
Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。めまぐるしい日々ですが、好きなことを仕事にできているという喜びから全力で取り組んでいます。好きなものを好きになった日のことを覚えていますか？　今回はそんなお話です！　はっ、真面目な著者コメントはらしくない、ここは……モケー（デビュー）

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。 8

２０１４年12月26日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　丸澤　滋

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１４年12月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451524-4